

---

# BSAA学園！外伝 Healing lost Hospital 加富根総合病院物語

charley

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B S A A 学園！外伝 H e a l i n g l o s t H o s p i t a l  
a l 加富根総合病院物語

### 【Nコード】

N 9 0 4 9 P

### 【作者名】

c h a r l e y

### 【あらすじ】

龍の骨さんの作品『B S A A 学園！』にまさかの外伝登場！！しかも主役は黒神さんの『リリカル銀魂 S t r i k e r S 』攘夷戦争鎮魂歌の特別編で登場した女体化伊達政宗と真田幸村！？親愛なる作家の方々のアイディアを結集し、『B S A A 学園！』の裏で始まる新たなギャグストーリー！

I C P O 所属のクリス・レッドフィールドはある日、ひょんなこと

から過労で倒れてしまう。

そんなクリスを心配したストライクウィッチーズの一員であり、クリスの事を愛している宮藤芳佳とサーニャ・V・リトヴァクはSWかかりつけの病院である『加富根総合病院』にクリスを入院させてしばらく静養させる事にする。

だが入院したクリスの同室は地元暴走族集団『BLUE DRAGON』女筆頭かつ地元で1、2を争うヤ○ザの一人娘 伊達政胸であった。

さらに病院には放浪中の格闘家 リュウ、法外な値段を要求する代わりに受けた依頼は確実に成功させる傭兵 ダンテ、賽銭泥棒を探す為に度々病院を襲撃する巫女 博麗霊夢などが集まり『一癖、二癖のある』人間ばかりに囲まれ、彼らの起す騒動のせいでクリスは心休まる時がない。

さらにさらに、アメリカの士官学校に通っていたはずのクリスの弟ラルクが、突然転がり込んできて、クリスの周囲はさらに騒々しくなる。

クリスの困惑を他所に政胸・ラルク達は今日も加富根総合病院で騒動を巻き起こす！

## 注意

※この作品は龍の骨さん作『BSAA学園！(URL <http://ncode.syosetu.com/n0780m/>)』の外伝ストーリーです。この作品を読む際には『BSAA学園！』と合わせて読む事をお勧めします。

※なお、それに合わせてこの小説の文面も基本本編の『BSAA学園！』と同じ形式で作らせていただきますのであしからず。

※なおこの作品を製作するにあたって龍の骨さん、黒神さんの許可は既にとっております。

## キャラ設定（前書き）

まずは今回の小説の中心を担うキャラ達の紹介です。

ここで紹介したキャラ以外にも本編では様々な個性豊かなキャラ達が登場しますのでお楽しみに！

## キャラ設定

ラルク・レッドフィールド (L a l c R e d f i e l d)

イメージC V 岸尾だいすけ

年齢 17歳

オリジナルキャラ。アメリカ人。

クリス・レッドフィールド、クレア・レッドフィールドの弟。

クリスの仕送りで米軍の士官学校に通っていたが、とある理由から自主退学して日本に來日して加富根総合病院の警備員のバイトをする事となる。

政胸とは腐れ縁の仲であり、他にもS Wのシャーロット・E・イエーガーはかつて同じ米軍のガイル大佐（今作では少佐から昇進している）の部隊に所属していた同志。

ウェスカーの弟であるアックスとは親友であると同時に自他共に認めるライバル関係。

性格は破天荒で、大概余計な事しかない上、そのくせおいしいところは持っていくと言う図々しい性格であるが意外とシャイな一面もある。

武器はH & K U S P自動拳銃とかなりの改造が施されたX K . 5 0対物狙撃銃。

伊達政胸 (M a s a m u n e D a t e)

C V 平野 綾

年齢 17歳

『戦国BASARAシリーズ』の主人公 伊達政宗を女体化させたオリジナルキャラ。

地元の有名暴力団『奥州組』の組長代理にして暴走族集団『BLUEDRAGON』を纏め上げる昔ながらのスケバン女子（ファッションは今風）。日本人。

性格は勝気で破天荒であるが、そのルックスは最高の美女である為、町内外共に人気の高いアイドル的な存在。

また男気が強い一方で面倒見がよく、同室になったクリスや、それをきっかけに知り合った芳佳やサーニヤに対しても親身になって接するなど女性らしい一面もある。

主な武器は常に携帯している6本の刀『SIX-nail』。バイクを愛しているが、自分用は持っていない為、大抵は盗品を使う。

真田 優希邑 (Yukimura Sanada)

CV 竹達 彩奈

年齢 15歳

『戦国BASARAシリーズ』の主人公の一人 真田幸村を女体化させたオリジナルキャラ。日本人。

Tーファウンデーションの現総裁 武田信玄の姪（養女）にして、次期総裁候補。

明るくて常に元気いっぱい、正義感が非常に強いが、大の恥ずかしがりやで、己の胸を触れるだけでも気絶してしまうほど。

大企業の令嬢であるが信玄の方針でその生活にはほとんど不自由はない。

その為、時々街に出ては不良達を自身の手で懲らしめて周り、そのたびにその実力と容姿に惚れられて今では『10S《テンズ》』と

呼ばれる優希邑を中心にした総勢1000人程の巨大なストリートギャング集団を結成している。

政胸とは数年前にBLUEDRAGONと10Sとの抗争の最中で出会い、それ以来互いを認め合うライバル関係であり、事あるごとに政胸と戦おうと執事の佐助を連れて殴り込みにくる。

社会勉強の為に加富根総合病院に見習い看護師として配属されるが、そこで偶然にも政胸と再会する。武器は二本の槍。

クリス・レッドフィールド (Chris Redfield)

CV 東地 宏樹

年齢 25歳

『バイオハザードシリーズ (以後バイオ)』、の主人公。原作同様アメリカ人。

『BSAA学園!』の主人公 北郷零斗の友人。『BSAA学園!』と今作では、『バイオ』と異なりICPO (国際警察) の捜査官の設定。

原作同様、拳銃からロケットランチャーやガトリングなどの後方支援火器、さらにはレーザー兵器まで様々な兵器の扱いに長ける他、零斗に教わったマイティ真拳による格闘技やハンヴィーや戦闘機の操縦も得意とする。

零斗の影響からかおふざけが過ぎる時があるが、根は原作同様に正義感が強く、曲がった事を許せない性格。

今作では周囲の人間 (主に政胸や弟のラルク) に振り回されるなど、とことん運が悪く、貧乏クジを引いて悲惨な目に遭うというシーンが多い (この事もあってかラルクなどに「クリス閉運法」と馬鹿にされることもある)。

自由奔放なラルクにはいつも出し抜かれ、その都度ケンカばかりし

ているが、一方でレッドフィールド3兄弟の長男として、弟や妹を温かく見守る優しい一面も持つ。

だがそれは裏を返せば人がよいという事であり、結局はそこをラルク達につけこまれている。

武器はベレッタM92自動拳銃

宮藤 芳佳 (Yoshika Miyahuji)

CV 福圓 美里

年齢 14歳

『ストライクウィッチーズ(以後SW)』の主人公。

原作同様STRIKE WITCHESのメンバーの一人で、今作では日本人の設定。

『BSAA学園!』でのある一騒動で、一時期はクリスに良い感情を抱いてなかったが、北郷零斗の仲介のおかげで和解した後は普通の友人関係となっていた。

サーニャ同様ある一件をきっかけにクリスの事が気になり、今ではサーニャとはクリスを巡るライバル関係(といっても仲が悪くなつたわけではない)である。

原作同様明るく努力家な性格であるが、実はやきもち焼きな一面もある。

ラルクや政胸達の悪ノリの被害を受ける度に激怒するクリスを宥めたり、時にはクリスに代わってラルク達のツツコミ役になる事がある。

使用武器は原作同様のM712シュネルフォイアーとオリジナル装備としてドラムマガジンに改造した89式小銃。



サーニャ・V・リトヴァク (Sanya V. Litvyak)

CV 門脇 舞衣

年齢 13歳

『ストライクウィッチーズ』の主要キャラの一人。

原作同様、STRIKE WITCHESのメンバーの一人で、今作ではロシア人という設定。

『BSAA学園!』では出会った当初はある出来事で一時期クリスと対立していた時もあったが、零斗の仲介で和解した後、さらに別の一件とそれがきっかけで巻き起こった騒動を経て、晴れてクリスに想いを伝える事ができたものの、同時に芳佳も彼に惚れてしまった為、日々彼女とクリスを巡る争い(本当の対立ではない)を繰り広げている。

原作と異なり昼間でも普通に活動できる(しかしやっぱり眠くなる事がある模様)他、政胸やラルク達のハチャメチャな行動に対して激しいツツコミを入れたり、自身も少し毒舌を言うなど様々な面で原作と異なっている。

使用武器はベレッタ90-two (本人曰くクリスが新調してくれたもの)と、原作同様フリーガーハマーを使用するが、屋内戦などフリーガーハマーが使用できない環境での戦闘ではUSSR AK74を使用する。

片倉 小十郎 (Kojuro Katamura)

CV 森川 智之

年齢 35歳

『戦国BASARAシリーズ』の主要キャラの一人。

『奥州組』の若頭にして、政胸の家老的存在。原作の政宗と小十郎の関係と同様に深い主従関係を持ち、政胸からは性別を無視して絶大な信頼を置かれている。一方で原作のように政胸に小言をよく言うのは健在。武器は日本刀。

猿飛 佐助 (Sasuke Sarutobi)

CV 子安 武人

年齢 23歳

『戦国BASARAシリーズ』の主要キャラの一人。優希邑の執事で、彼女の事は「姐さん」と呼ぶが年齢は佐助の方が上である。

執事としては非常に有能な他、原作と同様に忍者であり諜報活動などに長けている。

優希邑に対しては母親のように心配している。武器は二つの巨大手裏剣。

リュウ (Ryu)

CV 高橋 広樹

年齢 26歳

『ストリートファイターシリーズ』の主人公。原作同様日本人。性格は真面目であるが真面目すぎて天然な一面もある。

今作では政胸達の引き起こす騒動に巻き込まれて、その度に退院が伸びてしまうかわいそうなポジション。

原作同様、強き者と戦う事を望む格闘家であり、戦闘時は己の拳の

みを使って戦う。

ダンテ (Dante)

CV 森川 智之 (二役)

年齢 19歳

『デビルメイクライシリーズ』の主人公。本作ではイギリス人という設定。

本作では法外な報酬を請求する代わりに任務成功率100%を誇る凄腕の傭兵兼賞金稼ぎという設定。

原作同様ズボラな性格で、加富根総合病院に入院したのも任務中に負った軽傷の治療に訪れた際、借金取りが自分を探していると知った為、急遽医者に頼んで (脅して)、入院させてもらった為、その為実質病院の居候である。

戦闘時には原作同様、大剣『リベリオン』や二丁拳銃『エボリー&アイボリー』を使用。

全国のような組事務所などを潰してきた経験がある為、日に数回ほどヤクザやマフィアなどが報復に来る事がある。

博麗 霊夢 (Reimu Hakurei)

CV 中原 麻衣

年齢 15歳

『東方project』の主人公の一人。

BSA学園! 本編においてもゲストとして登場済み。原作同様に幻想郷に住んでいる博麗神社の巫女。

今作では神社の賽銭箱を盗まれた為、その搜索の為に友人である霧雨 魔理沙やアリス・マーガトロイドと共に現実世界へとやってきており、ある出来事をきっかけに政胸達とも交流を持つようになる。使用武器は弾幕を発生させる特殊なカードや大麻（よく御祓いのシーンで見かける白い紙の束が付いている棒）。

## キャラ設定（後書き）

いよいよ登場キャラも固まりいよいよBSAA学園外伝開始です！

近日プロローグを投稿予定ですのでお楽しみに！

政胸「Hey Guy! 私達の活躍楽しみにして下さい! 最高のstageの幕開けよ!」

## 第0話 いきなり!? 政胸の入院（前書き）

今回はプロローグなので短めです。  
それといきなりキャラ崩壊があります。

第0話 いきなり!? 政胸の入院

東京都内某所の幹線道路：

そこを何十台の車やバイクの群れが激しい轟音を立てながら突っ走っていた。

それぞれバイクや車には蒼色の塗装が施された派手な装飾が飾られており、それぞれに乗るドライバー達は皆、強面の男達ばかりであった。

そんな中でその先頭を進む一台のハーレー。

それを駆るのはこの集団においては場違いとも言える一人の美少女であった。

蒼髪のロングヘアーで、右眼には眼帯をしていて、上には黒いレザージャケットを着ていて、下は蒼色のミニスカート、胸の大きさは巨乳でグラビア級、さらにはスタイル抜群で、何より左目の瞳に輝いているサファイアと思わせる色取りが綺麗な、美女の中の美女であつた。

しかし、その表情は実に男気溢れる勝気な表情であつた。

少女

Are you ready baby!!!

集團

[illegible]

少女

Let's Fully Rage!!!





成年

「政胸様。ご気分がよろしいのは結構ですが、くれぐれも無理な運転だけはなさらないように。この時間は特に交通事故を起こす可能性が高く…」

小十郎と呼ばれた成年が深刻な面持ちで話すと「政胸」と呼ばれた少女が呆れたように話す。

政胸

「ちよつと！こんな時にまで御説教？やめてよ小十郎。せつかくのdriveが台無しになっちゃうじゃない！」

小十郎

「しかし政胸様！夜間の運転には危険が付きものです。くれぐれも用心だけは怠らないよう…」

政胸

「ああー！もううるさい！それよりさっさと行くわよ！」

小十郎の説教を振り払うように政胸はバイクのスロットルを吹かしてさらにスピードを上げた。

小十郎

「政胸様！ちゃんと話を最後まで聞いてくだされ！」

そう言いながら小十郎もバイクのスピードを上げて政胸を追った。

彼女の名は伊達政胸。

地元の有名ヤ○ザの一門『奥州組』の娘にして暴走族集団『BLU



が付いていない。

小十郎

「!?!? 政胸様! 前方にトラックが!」

政胸

「え!?!? あああ!?!? マズイ! 小十郎!?!」

政胸が気が付いた時にはトラックと政胸のバイクの距離はわずか数メートルのところまで迫ってきていた。

小十郎

「政胸様!?!」

小十郎はすかさず政胸を助けるためにトラックを吹き飛ばそうと考え、腰に下げていた日本刀を取り出して、それを政胸達の方に向けて構える。

すると刀の先端から電流が走り始める。

小十郎

「唸れ! 鳴か……あっ!?!」

小十郎が必殺技のひとつである『鳴神』を放とうとした瞬間、その標的であるトラックの荷台に書かれていた文字が目飛び込んでくる。

『産地直送 おいしいお野菜』

小十郎



政胸

「無事じゃないわよ…これ絶対腕の骨折ったわ…」

小十郎

「政胸様！大丈夫ですか！！？」

構成員達に助け起こされながら立ち上がった政胸が駆けつけてきた小十郎に対し軽蔑の視線を向ける。

政胸

「小十郎…アンタさっきなんでトラックじゃなくて私を吹き飛ばしたの？普通あの場面ならトラックを吹き飛ばして「守り方が過激過ぎ！」ってツッコみを受ける筈でしょ？」

政胸の問いかけにしばらく俯いて聞いていた小十郎が頭を上げると…

小十郎

「いやぁ…なんというか……大好物のお野菜は傷つけたくなかったもので……テヘ／＼／」

政胸

「……………『テヘ／＼／』…じゃないでしょうがあああ！おらあああ  
あああ！！！！」

《バキィッ！！》

小十郎

「ぐはああああああああ！？」

怒声と共に小十郎の顔面にパンチが炸裂する。  
倒れ込んだ小十郎をそのまま蹴りつける政胸。

政胸

「アンタ私の右目でしょ！？それをなにプロローグから主傷つけるような事してんのよ！？それに『テヘ／＼／』って何！？いきなりキャラ崩壊！？似合わないのよアンタに『テヘ／＼／』なんて！」

小十郎

「も…申し訳ありません政胸様！…か…顔は…顔はおやめ下さ…痛！！」

腕を折ってなおも蹴り続ける体力の残っている政胸のパワーはある意味恐ろしいものである。

しばらくして埒が明かなくなった構成員達が政胸を抑える。

構成員 A

「筆頭！今はそれより病院に行きましょう！！」

構成員 B

「そうですよ！今は怪我の治療を……おいお前ら！一番近い病院に大至急筆頭を運ぶぞ！」

構成員 C

「了解！えっ…と一番近い病院は…」

一人の構成員が慌てて携帯電話を取り出して『ナビ○オーク』で検索し始める。



## 第0話 いきなり!? 政胸の入院（後書き）

政胸「ちよつと！開始早々いきなり入院ってどういう事よ!？」

charley「しょうがないだろ！この作品の舞台は病院なんだから主役を入院させないといけないんだし」

政胸「だからって少しの活躍もないまま入院はないでしょ!!小十郎だって技出してたのに!!」

charley「大丈夫だって！主役なんだから活躍はこれからこれから。それにしてもあれだな…書いてて思ったのだがお前って言動がなんかハ○ヒに似てないか？」

政胸「まあ声が同じだからね。当然でしょ？」

次回はICPO&SWメンバーが登場しますのでお楽しみに。



## 第1話 クリス入院する (前書き)

charley「ああ疲れた。いや大変だったよ。せっかく作っ第一話のワード手違いで消しちまって作り直しになったりしてさあ」

政胸「おそいわよ! そういうときこそもっとキビキビ書きなさいよ!」

charley「無茶言うな! 俺だっていろいろ忙しかったんだぞ!」

芳佳「そのわりにはリリカルBASARAの方の連載はペースよく進めてましたよね?」

charley「うっ!」

## 第1話 クリス入院する

フランス リヨンにあるICPO (International Criminal Police Organization) 本部 対特殊犯罪捜査課オフィス。

世界でも優秀な刑事のみが所属を許されるこのオフィスで捜査官 クリス・レッドフィールドは綺麗に整えられた自分のデスクで今日ものんびり…

上司A

「おいレッドフィールド！この報告書誤字脱字だらけだぞ！やりなおせ！」

クリス

「はい！す…すみません！」

上司B

「レッドフィールド！例のキジュジュにおける秘密任務の調査書はまだか！？」

クリス

「はい！只今持っています！」

上司C

「レッドフィールド。先月の捜査経費の会計を頼むぞ」

クリス

「りょ…了解です！」

…する暇もないまでに上司達からの無茶苦茶なデスクワークの要求に追われていた。

クリス

「これで6日連続オフィスから出てねえ…もう限界だ…」

いつもの屈強ながらも爽やかな印象を与える顔はすっかり疲労一色に染まり、大量のプリントの山に埋もれながら力なく項垂れるクリス。

まずここで読者の皆にはこの世界におけるクリス・レッドフィールドに関する情報を与えなければならない。

この作品とその本編である『B S A A 学園!』でのクリスは、国際警察（ICPO）に所属する捜査官で、『B S A A 学園!』の主人公 北郷零斗の友人である。

ちなみにこのクリス。本家『B S A A 学園!』における初登場は『第十七話 ハジケろ! 夏のサマースペシャル!』において零斗に召喚されての登場といういきなりぶっ飛んだ登場の仕方であった。

『B S A A 学園!』本編ではその後、ある一件がきっかけでストライクウィッチーズ（以降S W）に目の敵にされてしまい、一時期彼女達から散々な扱われ方をした事もあったがその後零斗の仲介で和解し、さらにその後『第三十七話 かっこ悪いキャラをかつこよくする』より『第三十九話 犬と猫の喧嘩は激しい』にかけて繰り広げられた一件でS Wの宮藤 芳佳、サーニャ・V・リトヴァクの二人に惚れられ、告白されるというまさに『逆転』ともいえるギャルゲー的展開を迎えたのであった。

だがそんなクリスも仕事の方は甘い展開など起こらないようである。

クリス

「や…やっとな報告書を全部書き上げた…これでやっとな休暇が貰える

ぞ」

数時間後、綺麗にまとめられた書類の山を前にクリスが息を切らしながらつぶやき安堵の表情を浮かべる。

だが、そんな彼の肩に背広を綺麗に着こなした小太りの上司が一枚の封筒を差し出しながら平然と悪魔のような一言を話す。

上司A

「よし。それが終わったなら、今から上海に飛んでこの書類を届けに行け」

クリス

「えっ!?!」

クリスの顔が真っ白に染まって行った。

数十時間後…中国 上海

クリス

「つ…疲れた…てかもう無理…」

足元がふらつきながら書類の届け先であるとあるビルからでてきたクリスはオフィスに居た時よりもやつれていた。

クリス

「でも今度こそ仕事は終わり…」

その時クリスの懷から携帯電話の着信音が鳴る。

ちなみに仕事関係からのクリス着信音は映画『バイオハザード?アフターライフ』のCMソングである。

クリスは震える手でそれをとると、電話の相手はクリスに上海行きを命じた上司からであった。

上司A

『レッドフィールド。カタールで某反政府組織が原因不明の壊滅に追いやられたそうさ。直ちに飛んで捜査を開始しろ』

クリス

「ええ！？今からですか！？」

そう問い直すクリスの表情はどこかの世紀末漫画の名言「お前は既に○んでいる」が似合いそうな雰囲気であった。

さらに数十時間後：中東 カタールのとある反政府組織の本部

クリス

「押収品…をすべて回収…現地捜査これで終了……」

もはや完全燃焼状態のクリスがボロボロになりながら備品の片づけをして帰ろうとしている時にまたしても仕事関係からの着信音が流れる。

クリス

（ま…まさか…！？）

恐る恐る携帯電話を手にとると彼の予想通りそれは例の上司からであった。

上司A

『レッドフィールド。捜査が終わったら直ちにオフィスへ戻って報

告書を書け』

クリス

「ええ！？今からフランスまで戻って事ですか!？」

上司A

『そうだ。それからその後国連への調査報告会へ参加した後、新人捜査官への捜査訓練をして各国首都警察より指定国際手配犯の捜査報告書を受け取りに行つて……』

電話越しに聞こえてくる上司からの指令にクリスは次第に視界を大きく回し始める。

クリス

「も…もうダメ……だ…」

クリスの意識はそこで真っ暗な闇に溶けていった…

数時間後…フランス パリ ICPO専用警察病院。

その屋上に飛行機を模した特殊な形の装着兵器 ストライカーユニットを装着した少女が舞い降りた。

一人はセーラー服にスクール水着のような服を着た日系の少女…国連軍第501統合戦闘航空団『STRIKE WITCHES』隊員 宮藤芳佳軍曹。

もう一人は黒い洋服に黒いタイツを履いた東欧系の少女…サーニャ・V・リトヴァクであった。

少女達は着陸してすぐさまストライカーユニットを脱ぎ捨てると、それぞれ大慌てで病院へと駆けこんだ。

そして、すぐさま病棟へ向かうと、『クリス・レッドフィールド』

と書かれたプレートに掲げられた病室を発見するや否やすぐさまそこへ飛び込んだ。

少女達

「「あの！クリス君が倒れたって！！？…聞いて…て…」」

二人は病室に入ったと同時にハモリながら叫ぶが、その前方にあるのはクリスの寝ているベッドではなく花の差された花瓶であった。

クリス

「おい二人共…なに花瓶にステレオ放送で話しかけてんだよ？俺はこっちだ」

クリスがベット寝たまま呆れたように二人に呼び掛けた。

指摘を受けて慌てて二人は今度こそクリスの傍に駆け寄る。

芳佳

「クリス君。大丈夫？」

クリス

「大丈夫じゃないぞ。見ての通りすっかり痩せ細っちゃったし」

クリスの言う通り、今のクリスの姿はガリガリに痩せて顔色もあまりよくなかった。

サーニャ

「それでクリスさん。なんの病気だったのですか？」

クリス

「うん。さっき検査が終わったばかりなんだけど…どうやら肉体疲

労と睡眠不足気味の上に、栄養失調もひどかったらしい。おそらく過労だそうだ」

芳佳

「過労！？クリス君が！？」

サーニヤ

「そう言えばこのところクリスさん国際警察の仕事が忙しいって話してましたけど…まさかこんな事になるなんて…」

クリス

「まあ確かにこのところ連日連夜任務ばかりだったからなあ疲れるのは当然だよ」

芳佳とサーニヤが心配そうに話すとクリスが皮肉っぽく笑う。

クリス

「まあ、なんにせよしばらくは静養しないといけないらしいが…ここは長期入院する施設はないからなあ…どこかい病院はないものかな？」

クリスの言葉に芳佳とサーニヤが電波を受けたように反応する。

芳佳

「あるよひとつ！」

数日後…日本・横浜

数日後、しばらくの休職手続きを済ませてクリスは芳佳、サーニヤ



に連れられて久々に日本にやってきた。

そして二人に連れられてやってきたのは一見オフィス街にでも建っているのがお似合いな雰囲気の高層ビルであった。

クリス

「加富根総合病院……病院なのか？ここ」

芳佳

「そうだよ。私達STRIKE WITCHESもご用達にしている超最新の医療施設で、私も時々ここへ看護師の勉強をする為に來てるんだ」

サーニヤ

「ここなら長期入院も大丈夫ですし、設備も充実してるからクリスさんも安心して静養できますよ」

クリス

「そうか。それは嬉しいな。態々ありがとうな……芳佳……サーニヤ……」

芳佳

「クリス君……／＼／」

サーニヤ

「クリスさん……／＼／」

突然3人の周りに甘い雰囲気包まれ始める。

その真ん中で互いに見つめ合うクリス、芳佳、サーニヤ、ハゲのおっさん……

クリス

「えっ…ハゲのおっさん?!」

自分達の甘い世界の中になにか異色な存在がいる事に気付いたクリス達が一斉に視線を向けた先には筋骨隆々の肉体に服はピンクのビキニパンツと上着の白衣しか身に付けていないナース帽を被った明らかに『変人』と呼べる巨漢がクリス達の間にか入り込んでいた。

芳佳・サーニヤ

「「キャアアアアアアアアアア!」」

クリス

「な…なんだお前は!? 金山企業の製造した生物兵器か?!」

そのあまりにもアンバランスで不気味な姿に芳佳とサーニヤは悲鳴を上げ、クリスに至ってはナイフとベレッタ92拳銃まで取り出して警戒する。

おっさん

「ああ…んもお! せっかく甘い雰囲気してたのに! なんでやめちゃうのよお!」

身体をクネクネと不気味に動かすおっさん。

その姿を見て芳佳とサーニヤはこのおっさんの名を叫ぶ。

芳佳、サーニヤ

「「ちょ…貂蟬看護師長!!」」

クリス

「えええ!? 看護師長だって!? これが!?!」



ゲールである貂蟬が貴方の身体をすぐにでも治してあ・げ・る♪」

クリス

「……帰ります」

そう言ってクリスは真っ青になりながら踵を返そうとする。

慌ててクリスを押さえる芳佳とサーニャ。

芳佳

「あああ！クリス君落ち着いて！！」

サーニャ

「帰っちゃダメですよ！！」

貂蟬

「んまあどうしたの？！この病院気に入らなかった？不満があるならこの私がなんとかしてあげるわよ」

クリス

「お前だ！不満ってのは！！」

その後、クリスを引き留めてやっと納得させるまで10分の時間をかけることとなった芳佳とサーニャだった。

その後、何とか入院の手続きを済ませたクリス達は病室へ行く前に主治医の検診を受ける為に入院患者用の診察室へと行くことになった。

クリス

「あゝ気持ち悪かった…まったくあんなタイラントもどきな看護師に手当てされると思うと生きた心地がしないぞ」

芳佳

「アハハ…クリス君、それはちよつと言い過ぎだよ」

サーニャ

「確かに見かけは怖いですけど貂蟬看護師長はいい人なんですよ」

今だ貂蟬に不快感を抱くクリスにフォローを入れる芳佳とサーニャ。そんなやりとりをしながら三人は入院患者用診察室へとやって来た。

クリス

「失礼します」

クリスが診察室のドアを開けて中に入ると、そこで待っていたのは白衣を着た赤い髪の医者らしき青年であった。

若医者

「おお！よく来た！さっそく治療を始めるか」

クリス

「えっ！？いえ…まだ何も…」

戸惑うクリスを尻目に、若医者はクリスを診察用の椅子に縛り付ける。

そして懷から徐にメスを取り出す。

クリス



「いや、今のくだりはなんだよ!？」

クリスが冷や汗をかきながら若医者にツッコむ。

芳佳

「華陀先生。いつもありがとうございます」

クリス

「いやいや芳佳!! 誰だよコイツ!？」

芳佳

「この人は華陀先生っていつて、内科医、外科医もこなすこの病院の主任医師で、五斗米道の使い手の名医なんだよ」

サーニヤ

「ちなみにお医者さんになるのが夢の芳佳ちゃんも尊敬している方なんですよ」

クリス

「ごとべいどお?…何か知らないけどほんとにコイツが名医なのか?」

クリスは眉睡な表情で若医者…華陀を睨むと…

華陀

「違あああああーーーーー!う!!!!」

クリス

「な…なんだ!？」

突然怒鳴り声を上げる華陀。

華陀

「ごとべいどおではない！ ゴットヴエイドオオ！」

クリス

「いや、ごとべいどおでいいだろ？」

華陀

「違う！ ゴッドヴエイドオオだ！」

クリス

「なにもそんな怒らなくてもいいだろ。たかが名前くらいで…」

華陀

「たかが名前だとおお！！貴様それでも医療の道を学ぶ者かあああ！！！！？」

クリス

「俺は患者だああああああああああああ！！！！」

華陀のメチャクチャな逆切れにキレるクリスであった…

数分後…

何とか診察と入院手続きを終えたクリスは芳佳、サーニヤを伴って、ロビーで看護師より病室の案内が来るのを待っていた。

クリス

「まったくなんだよこの病院！ 看護師長だけでなく医者も変人じゃ



ないか!!」

芳佳

「まあまあ、クリスさん。今は病室で安静にする事だけ考えましょうよ」

サーニャ

「華陀先生もなるべくストレスを溜めないようにって言ってたじゃないですか」

クリス

「っていうかあの華陀って奴が既に相当ストレスになったんだけどな」

クリスが不機嫌そうにぼやいた。

するとそこヘシヨートヘアの若い女性の看護師がやってくる。

看護師

「クリス・レッドフィールドさんですか？」

クリス

「あっ…はい」

看護師

「病室の用意が整いましたのでそちらに向かって下さい。病室は49階の外科病棟429室です」

そう言って部屋までの案内の鍵を渡す看護師。

クリス

「えっ？外科？俺過労で入院な筈ですが？」

看護師

「申し訳ありません。今内科の病室が満室になっていて…とりあえずしばらくは外科の病室を使って下さい」

クリス

「はぁ…わかりました…」

そう言って自分の入院する病室に向かうべく、上層階までのエレベーターを探すクリス達。

クリス

「49階の429号室って…メチャクチャ縁起悪い病室じゃないか。大丈夫か？」

芳佳

「大丈夫だよ。こういう事は気にしない方がいいって言うから」

クリス

「そういう問題か？」

自分の部屋番号に不安を覚えるクリスを笑顔で励ます芳佳。  
するとサーニヤがある事に気づく。

サーニヤ

「そういえばクリスさん。この病室って…」

クリス

「なんだよサーニヤ」

サーニャ

「私気付いたんですが…この病室って語呂を合わせたら『429（しにく）』死肉』ですよね？」

クリス

「そ…それがどうしたんだ？」

するとサーニャがどこか黒い笑顔を浮かべて話す。

サーニャ

「やっぱりクリスさんってどんな作品でも『腐った物』に縁があるかもしれないねえ…フッフ…」

芳佳

「さ…サーニャちゃん!？」

クリス

「お前原作ではそんなキャラじゃねえだろ!？なにこれ!？一話目でもうキャラ崩壊開始!？」

どこか黒い電波的なものを放つサーニャに恐怖を抱くクリスと芳佳だった…

49階 外科病棟

芳佳

「あっ! あったよ! 429号室」

無数に並ぶ病室の中からなんとか429と書かれた病室を見つけ出

した芳佳。

クリス

「やっと、安静にできるか」

サーニヤ

「早く病室に入って横になって下さい」

クリス

「ああ、そうだな。じゃあさっそく…」

そう言ってクリスが病室の引き戸を開けた先には…

ヤ○ザA

「ああ!?!」

ヤ○ザB

「んあ!?!」

ヤ○ザC

「んだデメエ!?!」

いかにも人相の悪いヤ○ザ達の手厚い歓迎!  
しかもヤ○ザ達は全員刀を装備している。

クリス・芳佳・サーニヤ（（Oh my go~~~~~  
~~~~~d!?!!））

それを見た瞬間、顔面蒼白になり身体が硬直するクリス達。

クリス

「よ…芳佳…びよ…病室…間違ったんじゃないのか？」

芳佳

「あれ…おかしいなあ…確かここだった筈だよ…？」

サーニヤ

「そ…それよりどうしましょう？…これ…」

クリス

「ハハハ…二人とも落ち着け…とりあえずタイムマシンを探すんだ」

芳佳・サーニヤ

「「クリス君が<sup>さん</sup>一番落ち着いて下さい！！」」

ガタガタ震える三人、目の前にはヤクザ達。  
まさに危機一髪！つとその時だった。

？

「アンタ達！何気質の人達怖がらせてんのよ！？」

突然クリス達の背後から女性の力強い声がかかる。

その声にクリス達が振り返ると、そこに居たのは蒼髪のロングヘア  
ーで、右眼に眼帯をし、右腕をギブスで固めて、腰に6本の刀を差  
した長身の美女。

クリス・芳佳・サーニヤ

「「「だ…誰？」」」

それがこれから同室として長い付き合いとなる伊達政胸との出会い

の瞬間であつた…

## 第1話 クリス入院する (後書き)

政胸とクリスが遭遇。

そして次回、早くも政胸の破天荒さが炸裂します。

政胸

「さあ行くわよ！イカレたパーティーの始まりよ！L e t , s  
c k ! !」

## 第2話 悲劇！？合部屋相手はゴクドー娘！（前書き）

政胸「ようやく主役らしい活躍ができるってものね！…ってか小十郎。アンタ何新聞読んでんの？」

小十郎「平野 綾…今度は脱税疑惑…はあ、声優界からどんどん浮いた存在になっていく彼女も…」

政胸「なんで？…なんか他人事のように思えないんだけど？」

charley「ん…確かに最近スキャンダルが多くてファン離れてるよね平野さん。それに実はというと俺の中では政胸の声ってどちらか竹達彩奈さんの方がイメージ合うと思うんだよね」

政胸「ちょっと！それ平野さんのファンに喧嘩売ってんの！？」



## 第2話 悲劇！？合部屋相手はゴクドー娘！

加富根総合病院 429号室

芳佳

「み：皆さんこんにちは…こ：国際連合平和維持軍第501統合戦闘航空団所属 宮藤芳佳軍曹です。さっそくですが只今私達かなりDANGERな場所にいます…ハハ」

サーニャ

「芳佳ちゃん。誰に話してるの？」

クリス達は病室内に宛がわれたベッドとその周りで出来る限り目立たないように身体を縮こませていた。その原因は…

政胸

「良直。PSPちょうだい」

ヤ○ザA

「はい！こちらに」

政胸

「左馬助。『くの一キャロ』の新刊買ってきた？」

ヤ○ザB

「もちろんです、さあどうぞ！」

政胸

「孫兵衛。ポテチある？」

ヤ○ザC

「用意しときました姐さん」

クリスの寝るベッドと間に空きのベッドを挟んで、特注と思われるなんとも高級感ある和風ベッドに踏ん反り返るように横になり、部下のヤクザ達の世話を受ける少女：伊達政胸。

クリス

「おいおい：よりによってとんでもない奴が同室になっちまったな：」

サーニヤ

「さっき看護師さん達に聞いて来たんですけど、あの人このあたりでは有名な暴走族集団『BLUE DRAGON』の筆頭であると同時に『奥州組』っていう大きな暴力団の令嬢さんらしいですよ」

クリス

「怖！まんま『敵に回してはダメ的な人』じゃねえか！！」

芳佳

「とにかく最低限関わらない方がいいよ」

芳佳の言葉にクリスとサーニヤが同時に頷いた時だった。病室のドアが開き、部屋の中に刀を腰に携えたオールバックで長身の男が入ってくる。

よく見たら男の頬には傷跡が：

芳佳

（いやあああゝゝゝ！！完璧にゴクドーな人が来ちゃったあああ  
ああ！！）

芳佳が心の中で悲鳴を上げている事など露知らない男は政胸の傍に  
群がるヤ○ザ達を威厳ある声で指示する。

???

「お前ら。政胸様の世話は俺がやるから、お前らは警備中の文七郎  
の手伝いでもしてこい」

ヤ○ザ A

「りよ…了解っス片倉様！お前ら行くぞ！」

ヤ○ザ B、C

「「おう！」」

ヤ○ザ達がそそくさと病室から退散していくと男は政胸のベッドに  
近寄りかけ…ふと、部屋の反対側にいるクリス達に気が付く。

???

「ん？なんだテメエらは？」

クリス

「ヒィ！いや…あの…今日からここに入院する事になりました…ク  
リス・レッドフィールドと申します…」

芳佳

「そ…その恋人の宮藤芳佳と…」

サーニヤ

「さ：サーニヤ・V・リトヴァクといいます」

男の眼力に思わず背筋が凍りつく感覚を覚えたクリス達は震える口調で自己紹介する。  
するとその様子を見ていた政胸が痺れを切らしたように男を注意する。

政胸

「小十郎。普段からその威嚇するような言い方はやめなさいって言うてるでしょ。」

小十郎

「政胸様。しかしもしや不審者ではないかと警戒して…」

政胸

「ベッドで寝てる時点で不審者なわけないでしょ。それに本当に不審者だったら、私がつくに斬り伏してるっての」

政胸が男：小十郎に笑いながら忠告すると、笑顔のままクリス達の方を向く。

政胸

「ごめんね。ウチの連中が怖がらせてばかりして。あっ！私は伊達政胸っていうの。そこでこっちが…」

小十郎

「政胸様の護衛役。奥州組若頭の片倉小十郎だ」

クリス・芳佳・サーニヤ

「「あつ…ど…どうも」」

意外に爽やかな態度の政胸に拍子抜けする三人。

政胸

「交通事故で腕折れちゃってね。今腕がぷらくんぷらんなのよねえ」

笑いながらギブスで固められた腕をクリス達に見せる。

芳佳

「うわあ…」

サーニヤ

「これはひどいですねえ」

政胸

「そうなのよ。ハハハハハハ」

そう言って政胸が笑っていると小十郎の懷からアラームのような音になる。

小十郎

「政胸様。いつものお時間です」

政胸

「あら。早いじゃない」

そう言うとき突然ギブスと包帯を外し始める政胸と、ボクシング用の小さなサンドバックを取り出す小十郎。

何をしているのかわからないクリス達が首をかしげていると…

政胸

「one! two! three!」

なんとギブスをしていた骨折している筈の腕で、小十郎の持つサンドバックにパンチを入れ始める政胸。

クリス・芳佳・サーニャ

「「えええええー！！！！！！！！！！」」

それを見て驚くあまり同時に声を上げるクリス達。

芳佳

「ちょ：ちよつと政胸さん！？腕：腕治ってるじゃないですか！！」

政胸

「そうよ。治ってるわよ」

あたりまえのように言いながら30回のパンチの練習を終えて再びギブスを腕にはめる政胸。

サーニャ

「治ってるなら退院した方がいいんじゃない？？」

サーニャの言葉に「わかってないなあ」と言わんばかりに首を振る政胸。

政胸

「バカな事言ってるじゃないわよ。入院していたら保険金がどんどん入ってくるのよ」

小十郎

「政胸様は常にお金の事を考えていらっしゃる健気な性格なのだ」

クリス

「いや健気っていうより金に汚いだけだろうが！！悪い人だな 안타！」

政胸

「大丈夫よ。どうせ警察がいるわけじゃあるまいし」

クリス

「あのー…俺一応警察官なのですが…？」

そう言って警察手帳を掲げるクリス。

芳佳

「ついでに私達も…」

サーニャ

「治安維持執務の職業で…」

そう言ってそれぞれ第501統合戦闘航空団の勲章を見せる芳佳とサーニャ。

政胸

「んな！？ICPO！？なんでそんなのが同室なのよ！？」

小十郎

「しかもあれは第501統合戦闘航空団の紋章…まさかお前らがあ

のストライクウィッチーズか!？」

3人のそれぞれの正体を知って驚く政胸と小十郎。

クリス

「休職中なんで逮捕はできないけど…少なくともこんな身近で不正を見たからには病院に報告しないわけにはいかないな」

政胸

「待って!病院には言わないで!バレたら即刻退院させられちゃう!」

芳佳

「いいじゃないですか。退院できて」

政胸

「よくないわよ!折角保険金も大分集まって、ここの生活も快適だから気に入ってるのに!!」

小十郎

「おい!どうしても病院に報告する気なのか?」

サーニヤ

「だって実際に見てしまったわけですから…」

政胸

「そう…仕方ないわね…小十郎!!」

突然小十郎の名を呼びながら腰に差してあった六本の刀の内の一本を抜く政胸。





「だあああああああ——！！」

政  
胸

芳佳

「無駄にタイトルが長いですううううううう！！！」

「ゴチャゴチャうるせえ！それよりこの事は病院に黙っている気になったか！？」

「そんなわけな…」

小十郎

「唸れ！鳴神！！」

57

小十郎

「ダメツテイルキニ、ナツタノカ？」

クリス

「はいいい！！黙ってます！黙りますから！！」

クリスが叫ぶとようやく政胸は電撃弾の乱射を止めた。

政胸

「そういえばいいのよ。ねえ小十郎。ほんと、人ってゆっくり話し合えば判り合えるものよね」

芳佳

「全然話し合いになってませんでしたよ！！」

サーニャ

「完璧に脅迫してたじゃないですか！！」

政胸の傍若無人な言動にツツコむ芳佳とサーニャ。

クリス

「ほんと…別の病室に変えてもらいたいよ」

電撃弾の乱射でボロボロになった病室を見てクリスが嘆くように呟いた。

芳佳

「あのすみません。クリス君は過労で本当に疲れているんです。だからそっとしといて下さい」

そんなクリスを気づかってか芳佳が彼に代わって政宗達に釘を差す。

政胸

「わかったわよ。んもうつままないわねえ」

さすがの政胸もそれに応じ、ようやく病室に静寂な時が：訪れるわけなかった。

政胸

「そんでクリスさんとか言ったわね」

クリス

「はい？」

政胸

「アンタなんで入院してんの？」

クリス・芳佳

「「過労ですよ!!」」

芳佳

「今私が言ったじゃないですか!!」

そこからベルトコンベアー形式で政胸達のからかいが始まる。

小十郎

「そんな事より、病名はなんだ？」

クリス

「過労!!」

政胸

「小十郎しつこいわよ…んで病名は？」

クリス

「だから過労！」

小十郎

「それで病名は？」

芳佳

「過労！！」

政胸

「病名は？」

サーニャ

「過労です！！」

クリス

「何回言わせるんだよ！？『か・ろ・う』だ！！」

すると小十郎が政胸の傍で膝まづく。

政胸

「小十郎！私の背中は何時でも預けるわよ」

小十郎

「無論、この片倉小十郎。命に変えても貴方の背中を守ります」

クリス

「…ってそれは『ご家老』だろが!!」

いかにも古臭い芝居を見てクリスがイラつきながらツツこむ。

政胸

「それで病名なんだったっけ？」

芳佳

「だから過労ですよ!!」

芳佳がツツコんだと同時に、政胸のベッドの脇の机に置いてあった携帯電話が鳴る。

それを手に取った政胸が：

政胸

「Ka<sup>かう</sup>ll<sup>ろ</sup>o?」

ダジャレの挨拶をした。

サーニヤ

「それは『ハロー』です！」

珍しいサーニヤのツツコミ。

ここから政胸達の『過労イジリ』がクイズ形式になっていく。

小十郎

「政胸様。この小十郎政胸様を幼少期よりここまで育てるのに…」

クリス

「『苦勞』だ！」

政胸

「亀に乗った浦島？」

クリス

「太郎！」

政胸

「桃から生まれた桃？」

芳佳

「太郎！！」

政胸

「狂乱の貴公子 桂 小…」

サーニヤ

「太郎！！！！」

政胸

「天才ねアンタ達！全部正解じゃない！」

クリス

「誰が『過勞』でクイズしろって言ったんだ！！」

政胸が満足そうに笑うがクリスはひどく立腹する。

クリス

「あのだから何度も言ってるように、俺本当に疲れてんだよ。『過

劣』で遊んでる場合じゃなくて…」

芳佳

「お願いですから本当に寝かして上げて下さい」

政胸

「判ったわよ。なによ面白くない奴ね」

こうしてようやく安眠に入り始めたクリスだったが…

政胸

「そうだ小十郎。しりとりしない？」

小十郎

「おっ？ やりますか」

政胸

「今日は私負けないわよ」

小十郎

「この小十郎も負けていられませんよ」

突然しりとりを始めた政胸と小十郎。

芳佳

「なんか嫌な予感がする…」

政胸

「じゃあ私から…えくと…『カメレオン』！…あああ！さっそく  
ん』付いちゃったああ！！」



政胸・小十郎

「アハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

小十郎

「では参らせていただきます。：『麒麟』」

政胸

「あああら！アンタも『ん』付いちゃってる！」

政胸・小十郎

「アハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

政胸

「『ジーンパン』！」

政胸・小十郎

「アハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

小十郎

「『レンコン』！」

政胸・小十郎

「アハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

政胸

「『フライパン』！」

クリス・芳佳・サーニャ

「「もういいわ（（です））！！」「」」

政胸、小十郎の、ほとんどしりとりとして成立していないしりとりを無理矢理止めるクリス達。

クリス

「イライラして全然寝られへんわ！アホ！」

ストレスのあまりツツコミが関西弁になってしまいうクリス。  
そこに食いつく政胸達。

政胸・小十郎

「「『寝られへん』！！」」

サーニヤ

「いやそうじゃなくて！クリスさんは参加したんじゃないんですよ！」

政胸・小十郎

「「『じゃないん』！！」」

サーニヤ

「だからそうじゃなくて…もう知りません！」

政胸・小十郎

「「『知りません』！！」」

サーニヤ

「違うってばもう！！」

完全に政胸達のペースに乗せられているサーニヤ。

政胸

「アンタ達やるじゃない三連発って」

小十郎

「お前達しりとりの方が才能があるな」

芳佳

「だあかああああ！私達参加してるわけじゃないんです！大体それしりとりでもなんでもないし！！！」

さすがに温厚な芳佳もイライラしてきたのか口調がキツくなりはじめる！

クリス

「あの聞いててイライラするからしりとりしないでくれないか？」

政胸

「『しません』！！」

クリス

「いやもういいから！」

政胸

「『もういいから』！！……って『ら』じゃないわよね」

こうしてようやくデタラメしりとりが止まった。

しかしまだまだ政胸達のハチャメチャな行動は止まらない。

小十郎

「では政胸様。しりとりがダメでしたらおやつにしませんか？」

政胸

「あらいいわね。今日は何持ってきてくれた？」

小十郎

「今日は政胸様の好物の『生ほたて貝ゼリー』を…」

政胸

「あらいいじゃない。じゃあさっそく頂戴！」

小十郎

「どうぞ。政胸様」

小十郎がベッドの脇に置いてあった紙袋の中からゼリーを取り出す。すると突然ベッドの上に立ちあがった政胸。

政胸

「ありがと小十郎。私これ大好物なのよね。じゃあいただきます！」

すると政胸は起立した体制で小十郎が持ったゼリーに首を向けたかと思うと…

政胸

「コケエコツコツコエエー！」

ニワトリが餌をつつくような動作でゼリーを啄ばみ始めた。

芳佳

「それで食べるのーーーーー!?!」

あまりの珍光景に叫びながらツツコむ芳佳。

クリス

「やめろコラアアアアア!! オイイイイイイイイイイイイ  
イ!!!!」

クリスが叫んで政胸を制止する。

政胸

「なによ、さっきから。疲れてんなら黙って寝てなさいよ」

クリス

「そんな珍プレイ見ながら寝られるか!! 頼むから手を使って食べてくれ!」

小十郎

「政胸様は食物はなんでも箸で食べる派なのだ」

芳佳

「知りませんよそんな事!!」

サーニヤ

「だったらお箸使ったらいいじゃないですか?」

政胸

「ゼリーはこうして食べた方が早いって最近発見したのよ」

クリス

「そんな意地汚い食べ方発見すんな!!」

クリスのツツコミを他所にまだゼリーを啄ばもうとする政胸達。

芳佳

「あのお願いですから、せめてクリス君が寝た後に食べて下さい!」

政胸

「ええ〜?! ったくわかったわよ」

芳佳がそう嘆願すると、渋々従う政胸達。

政胸

「まったく何よさつきから。しりとりはすんな、ゼリーは食べるな、私達何もできないじゃないの」

小十郎

「だったらせめて早く寝てくれ。政胸様の為にも」

クリス

「わ…わかりました早く寝ますから!… ったく被害被ってんのはこっちだっつうの」

芳佳

「まあまあクリス君。とりあえず早く寝た方がいいよ」

どうも納得できない様子のクリスを宥める芳佳。  
すると政胸が突拍子も無い事を言い出す。

政胸

「じゃあ私達の子守歌って上げるからそれで熟睡しなさい」

サーニヤ

「えっ…クリスマスさんの子守唄は私が…」

サーニヤの言葉を見殺して、ギターを取り出す政胸とベースを取り出す小十郎。

そしてギターを弾きながら子守歌をセッションで歌い始める政胸達。

政胸

「one! two! one! two! three! four!」

小十郎

「羊が一匹!」

政胸

「メエエ!」

小十郎

「羊が二匹!」

政胸

「メエエ!メエエ!」

小十郎

「羊が三匹!」

政胸

「メエエ!メエエ!メエエ!」

小十郎

「羊が四匹!」

政胸

「メエエ!メエエ!メエエ!メエエ!」

小十郎

「羊が五匹!」

政胸

「メエエ!メエエ!メ…」

クリス・芳佳・サーニヤ

「「そんな歌で寝られるか——————————!!!!」」

ギターの音と政胸の大きすぎる声でとても子守歌になっていない二人の子守歌に叫びながらツッコみつつ、  
クリスは本当にとんでもない奴と同室になってしまった事を激しく嘆き、芳佳とサーニヤはそんな不幸過ぎるクリスに深い哀れみを感じるのであった…



**第2話 悲劇!?!合部屋相手はゴクドー娘! (後書き)**

初日から散々なクリス。

果たしてこれからどんな入院生活になるのやら…

次回は加富根総合病院の愉快な仲間が登場します。

**第3話 優希邑登場 地獄の回診時間!?** (前書き)

新米看護師はお嬢様!?

今回は政胸の好敵手であるあの娘が登場します。

政胸「ちなみに『あの子』はかなりの巨乳だから巨乳フェチにはたまらないわね」

芳佳「巨乳……(ゴクッ)／／／」

### 第3話 優希邑登場 地獄の回診時間!?

加富根総合病院の回診時間は毎日午前9時から始まる。

その時間になると各病棟ごとに担当の医師や看護師が各病室を回りにくる。

すると政胸は仮病を使っているからか9時になる直前から病室を空けており、429号室の回診はいつもクリス一人が受ける事になっていた。

レベッカ

「クリスさん。おはようございます」

鶴姫

「回診の時間ですよ」

そう言って病室に入ってきたのはクリスの主治医である華佗と、ボブカットの少女とショートヘアの女性：

この二人の事はクリスはすでに知っていた。

ボブカットの少女は鶴姫、ショートヘアの女性はレベッカ・チェンバース。

二人ともこの加富根総合病院の看護師だ。

二人の後ろにもう一人：クリスが入院してから今まで見た事がなかった一人の看護師の姿があった。

髪型はツインヘアーで、眼はルビーの如くに真紅に輝いており、首には首飾りと六文銭のペンダントをした巨乳の少女。

そのぎこちない歩き方からみて、新人ナースだとクリスはすぐにわかった。

クリス

「あの？そちらの方は？」

レベッカ

「ああ、この子は今日から研修生としてこの病棟の担当になった真田優希邑さんですよ」

レベッカが紹介すると少女、優希邑が恥ずかしそうに礼儀正しく頭を下げる。

優希邑

「さ…真田優希邑と申します！不束な者ですがよろしく願いします！」

クリス

「（不束な者って嫁入りかよ？）どうも、クリス・レッドフィールドです」

華佗

「優希邑君はあの名門財団『Tーファウンデーション』の会長の姪で、この病院には社会勉強の為に来たそうだ」

クリス

「えっ！？『Tーファウンデーション』って言えば、あの一大コンツェルンの！？」

クリスは驚いて声を張り上げた。

Tーファウンデーション――

日本の五本の指に入る程の資産を保有する大財団であり、投資系事業を中心に、インスタント製品から冷凍食品までの幅広い食品産業

から多種多様の工業生産業、IT産業からブティックブランド、飲食店事業、輸入事業、旅行代理店、さらには宇宙開発事業なども手掛けている。

ちなみに代表的な傘下組織に、芳佳、サーニャも所属する第501統合戦闘航空団『STRIKE WITCHES』の主装備 ストライカーユニットの開発、整備を担当する『武田重工』や、この加富根総合病院やBSAA学園にも多額の投資を行っている銀行『Tーシンゲン銀行』などがある。

クリス

「そんな大企業の姪っことは、お嬢様ってわけか？ すごいなあ」

優希邑

「そ…そんな…恥ずかしいじゃないですかあ…／／／」

クリスがほめると優希邑は照れくさそうに笑う。

レベッカ

「ほら、優希邑。おしゃべりはここまでにして仕事、仕事」

優希邑

「は…はい！」

レベッカに注意されて慌てて気持ちを切り替える優希邑。

優希邑

「華佗先生。これが昨日撮影したクリスさんのレントゲン写真です」

優希邑が華佗にレントゲン写真とカルテを手渡す。

華佗

「これか。どれどれ……ふむふむ……」

それを真剣な表情で見つめる華佗。

クリス

「先生。それでどうですか？」

クリスの問いかけに華佗は何でもなさそうにとんでもない返事を返してきた。

華佗

「心配する必要はないぞ。ただの『胃ガン』だから」

クリス

「ええええ!!?! い…い…胃ガン!?!」

クリスは悲鳴に近い叫びを上げて仰け反る。

レベツカ

「ちよつと先生! それ私もさっき見ましたがど胃炎じゃないですか?」

華佗

「あああ! そうだったそうだった! ……『そういう事にしないとダメだったんだな?』」

華佗が申し訳なさそうな顔で話すとクリスはますます不安になる。

クリス

「『そういう事』ってどういう事だよ!? ねえ! やっぱり俺、胃ガ  
ンなのか!？」

鶴姫

「大丈夫ですよクリスさん。胃炎ですから安心してください」

鶴姫がそう言ってクリスを宥める。

クリス

「はぁ、よかった。どうもありがとうございます…痛!」

すると突然腹を押さえて苦しみ出すクリス。

レベッカ

「クリスさん!？」

鶴姫

「大丈夫でございますか!？」

慌ててクリスの傍に駆け寄るレベッカと鶴姫。

クリス

「痛てて…安心したらまた胃がちよつと痛く…」

レベッカ

「大変! 先生早く検診を…」

華佗

「よし! 優希邑! 大至急クリスを椅子に…」

優希邑

「はい！わかりました」

そう言うのと優希邑はクリスのベッドを鷺掴みにすると…

優希邑

「どりゃあああああああああ！！」

《ガッシャー————ン！！》

クリス

「痛あああああああああ——————」  
「！！！！？」

突然真横にひっくり返されて、クリスはそのまま床に投げ出されてしまった。

優希邑

「さあクリスさん！早くここに座ってください！」

一方優希邑は何でもないかのように、ベッドをひっくり返してどけた場所にパイプ椅子を用意してクリスに座るように促す。

鶴姫

「ちょっと優希邑さん！いくら急いでもクリスさんをベッドから叩き落とすなんてひどいじゃないですか！」

さすがにこれには鶴姫も優希邑を注意する。

優希邑



「えっ?!でも早く華佗先生が診察できるようにと思って…」

鶴姫

「そんな言い訳よくつけるでございますね!」

優希邑

「!?!ちよつと!それじゃ私が悪いって事ですか?!」

鶴姫

「そうでございますよ!」

とうとう喧嘩を始めた二人。

優希邑

「何よ!」

鶴姫

「なんですか!?!」

優希邑

「やるというのですか!?!」

そう言いながら、床に倒れているクリスの腹を踏みつけて互いに威嚇する優希邑と鶴姫。

クリス

「痛い痛い!踏んでる!踏んでるって!!!」

レベッカ

「何してるの二人とも!やめなさい!!!」

クリスが悲鳴を上げて、レベッカが慌てて二人をクリスから離すと慌てて彼の下に駆け寄る。

レベッカ

「ごめんなさい！クリスさん！大丈夫ですか！？」

クリス

「全然大丈夫じゃないですよ。ベッドから叩き落とされるわ胃が痛いって時に腹思いつき踏まれるわ…まったくなんて病院だよ？」

優希邑・鶴姫

「「ここは加富根総合病院でございます♪」」

クリス

「名前聞いたんと違うわ！！」

クリスは優希邑と鶴姫にツッコみを入れつつパイプ椅子に座る。

クリス

「担当の患者踏みつけるような看護師、変えてくれ！」

クリスはひどく立腹しており、顔を赤くしながらクレームを付ける。すると華佗は苦笑しながら話す。

華佗

「いやそんな事言ってもこの病院も人手不足でな。『ガン』の治療の助手を務められる看護師で今手が空いてるのは彼女達だけなんだ」

華佗の発言を聞いて再び飛びあがって驚くクリス。

クリス

「やっぱりガンなんのかよ!? ねえちょっと本当の事言ってくださいよ!」

華佗

「いやいや、冗談だ。安心しろ」

華佗はそう言うと言察の準備をしようとして…ふと、倒れたままのクリスのベッドに目をやってある事に気付く。

華佗

「おいレベツカ。そういえばクリスのネームプレートが前の患者のままじゃないか」

クリス

「え?…あっ! そう言われてみれば名前が俺のと違うような…」

クリスが自分のベッドに掛けられたネームプレートを見ると、そこには確かにクリスの名前ではなく『鈴木』と書かれていた。それを見たレベツカが驚きの声を上げる。

レベツカ

「あーっ! これクリスさんが入院してくる前の晩に『お亡くなり』になった鈴木さんのネームプレートだ!」

クリス

「いやあああああああああああああああああああああああ  
あ!…!」

《ゴチン！》

レベッカがそう言った途端にクリスは驚いて椅子から転げ落ち、頭を打つ。

クリス

「ちょっと！俺入院したのって3日前ですよ！3日も死人のネームプレートのままだったって事ですか！？」

華佗

「まあ、鈴木さんの霊に呪われなかっただけでも奇跡じゃないかハッハッハ！」

クリス

「笑えるか！！！！」

クリスは怒鳴りながら椅子に座り直す。

クリス

「早く変えてくださいよ！！」

華佗

「わかったわかった。とりあえず鶴、レベッカもクリスのネームプレートを用意してくれ、あっ！それ終わったら二人で、別室で検診中のシャル先生の手伝いを頼むぞ」

鶴姫

「はいです！」

レベッカ

「わかりました」

そういうと病室から出て行った鶴姫とレベッカ。  
すると病室の外から明らかにわざと中まで聞こえるような大声で2  
人の会話が聞こえてきた。

鶴姫

「レベッカさん。それでクリスさんはあとどれくらい保つと思いま  
すか？」

レベッカ

「そうねえ…長くもってあと3日くらいかしら？」

鶴姫

「お気の毒でございますね…：ププ！」

鶴姫・レベッカ

「「アハハハハハハハハハハハハハハハ！」」

それを聞いたクリスは慌てて華佗に抗議する。

クリス

「ちょ…ちょちょちょちょっと先生！あの2人あんなこと言っ  
てるけど…!？」

華佗

「ははははは、冗談に決まっているだろう。俺のゴットヴェイドオ  
であと1週間はもたせるから」

クリス

「えええ！？1週間もたす！？」

クリスは顔が真っ青になる。

華佗

「だからこれも冗談！冗談だ。ここの看護師は皆ギャグやユーモア好きなんだ。変わった奴らだろう？」

クリス

「俺からしたらアンタが一番変わってるよ」

クリスが皮肉をこめて言い放ちながら安堵の息を吐く。

華佗

「とりあえず診断しとくか。じゃあ優希邑、聴診器用意して。」

優希邑

「はい！」

ようやく医者らしい事を始めた華佗を見て安心感を覚えるクリスの前では、優希邑がいそいそと聴診器を用意して華佗に手渡した。それを受け取った華佗は、自分用のパイプ椅子を取り出すとクリスの前に座った。

華佗

「じゃあ上着を上げてくれるか。心臓の動きを診るから」

華佗がそういうとクリスは言われた通り服をたくしあげた。その胸に聴診器をあてて診察を始める華佗。  
しかし…

華佗

「あれ？…なにも聞こえない？…お前心臓が動いてないんじゃないか？」

クリス

「はあ！？そんなわけないだろ？！ちゃんとよく…ん？」

クリスは華佗をみておかしいことに気がつく。

クリス

「ちよつと先生。お前それ耳に差してないじゃないのか？」

クリスがそう言って指差した先には、首に提げたままの聴診器が…

華佗

「ああ！そっかそっか！どおりで聞こえないわけだな。ハハハ！」

優希邑

「もう、華佗先生ったら。アハハハハハ！」

クリス

「ハハハ…」

自分のミスを恥じる華佗を見て、釣られて笑う優希邑とクリス。ともあれ今度こそ聴診を…

華佗

「じゃあ注射打つか」

クリス

「…って聴かないのかよ!!?」

聴診器をしまい始めた華佗にツツコみを入れるクリス。

華佗

「まあ、俺は『だいたい』の事はわかるからな」

クリス

「だいたいかよ!?! ちょっとそんない加減な診察しないでくれって! きっちりしてくれよ!」

華佗

「大丈夫、大丈夫注射はちゃんと打ってやるから。えゝと…注射用の薬は…」

優希邑

「あっ! ここですよ華佗先生!」

そう言って上着の首元に手をつ込み、大きな胸の谷間から小ビンと注射器を取り出す優希邑。

クリス

「…ってどっから出すんだよ!?!」

華佗

「だって鞆使うの勿体ないだろ? それに男性患者の『あっち』を元気にするためのサービスだ」

クリス



「『あっち』ってなんだよ!? どの風俗店かここは!」

クリスの怒声が病室に響き渡る。

華佗

「ほらほら、そんな怒らない、怒らない。ちゃんと注射打ってやるから」

そう言って小ビンに注射針を入れると、薬剤を注入し始める華佗。

クリス

「うわぁ…そんなに入れるのか?」

注射器はどんどん薬剤を注入していき…

《ポンツ!》

クリス

「っておい!?!」

スポイトが取れて、中の薬剤があふれて床に零れてしまった。

クリス

「ああぁ!?! 溢れた! 溢れたぞ!」

優希邑

「わわわ!?! どうしよ!?! どうしよ!?!」

華佗

「と…とりあえずこうするか!」

そう言って床にこぼれた薬剤を注射器に吸わせようとする華佗。

クリス

「戻すな！不衛生だろ！」

華佗

「いや薬剤がもったいないから…でもやっぱりビンから入れ直した方がいいか？」

クリス

「あたりまえだろ！」

クリスがそういうと、華佗は今度こそちゃんと注射器に薬剤を入れた。

優希邑

「じゃあ注射打ちますから手を出してくださいさ〜い」

クリス

「ってちょっと。消毒は？」

クリスの問いかけにキョトンとした表情になる華佗と優希邑。

華佗

「消毒？消毒ったって消毒液なんてないし…」

優希邑

「そうですねえ。この部屋にはさすがに…」

優希邑がそう言って周りを探そうとした時。

《ガッ!!》

優希邑

「えっ!!? あっ… あっ…」

華佗が座っていたパイプ椅子に躓いた優希邑はそのままよろけて…

優希邑

「キャアアアアアアアア!」

華佗

「わ… わわわわ!!!!?」

転んだ拍子に華佗を後ろから押し倒して注射器を持ったまま華佗は前によろけて注射器をクリスの額に…

《ズボッ!!》

思いっきり射した。

クリス

「!!!?:… うぎゃああああああああああ!! 痛あああああああああああ!!」

悲鳴を上げてのたれ打ちまわるクリス。

あわてて注射器を引き抜く華佗であったが、すでに中の薬剤は空っぽになっていた。

クリス

「ど…どこに射してんだよ…:…?」

華佗

「いや今のはわざとじゃなくて…あゝあ、全部入っちゃった」

すると優希邑があわててフォローする。

優希邑

「でもこういうのは脳に直接打った方が効くそうですよ」

クリス

「ほんとかよ?」

華佗

「優希邑の言うとおりだ。ほらちょっと効いてきた気がしないか?」

華佗がそう問いかけるとクリスはふと自分の身体を確かめて、少し身体が軽くなった気を感じた。

クリス

「そういえばなんとなく、胃の痛みも楽になったような…?」

華佗

「そうだろう?」

クリス

「ああ、すごいなこの薬」

優希邑

「そうでしょう？ やっぱり効果てき面ですね『リポ○タンD』は」

クリス

「…っておい！ 何打ったんだよ！！？」

優希邑の言葉を聞いて再び顔が真っ青になるクリス。

華佗

「だから冗談だって言ってるだろ。君はさっきからカリカリし過ぎだぞ」

クリス

「するだろ普通は！！ ベッドから引き倒されるわ、腹は踏まれるわ、額に注射打たれるわ、さっきからメチャクチャじゃないか！」

華佗

「まあまあまあ。後でちゃんと注意はしとくからな。過労の身なんだからストレスは毒だぞ」

優希邑

「ちゃんとビタミン剤を打ちましたから安静にしててください」

そう言って華佗と優希邑に宥められながらクリスはようやくベッドに横になることができた。

華佗

「じゃあ、優希邑。今日はこの病室付きだから、しっかりクリスさんとこの病室の患者さんの世話してやるんだぞ」

優希邑

「はい、わかりました!」

クリス

「えっ!?! お前帰らないの?」

華佗はそう言うのと病室から出て行き、優希邑はクリスのベッドの脇にパイプ椅子を持ってきて腰掛ける。

クリス

「あのゝゝ君がいると逆に気になって寝れないのですが?」

優希邑

「心配しないでください。私クリスさんの安静の邪魔だけはしませんが」

クリス

「いやゝゝでもゝゝ」

優希邑

「大丈夫! 私これでも空気を読むところの区別くらいはわきまえて行動してますから、騒ぐなんてことはしませんよ」

そう確信を持って話す優希邑。  
つとその時ゝ

政胸

「いやあゝ。やっとあの医者共も行ったわねゝ」

華佗が次の病室に診察へ行った事を確認した政胸が堂々と病室に入ってきた。



クリス

「うわああああああああああああああああ！！！！？」

政胸の刀と優希邑の槍がぶつかり合うと同時に、病室内に電流と炎が衝撃波に乗って広がり、クリスはまたしてもベッドをひっくり返されて床に投げ出されてしまった。

さらに今回は倒れた身体の上にひっくり返されたベッドが乗っかってくる。

優希邑

「政胸さん！何故貴方がこんなところに！！？」

政胸

「貴方こそ何なのその格好は！？でも今はそれより…」

政胸・優希邑

「「まずは今日こそ雌雄を決してやるわ（決します）！！！！」」

そして病室全体を舞台に激しい戦いを繰り広げる政胸と優希邑。

政胸

「phantom dive！！」

優希邑

「朱雀翔！！」

病室に雷が…炎が…吹き飛ばされた家具が飛び交う。

それを床に倒れたまま眺めながらクリスは…



クリス

「なんでこの病院には変な奴ばかりいるんだよ……不幸だあああああああ……！！！！！！」

静養するはずが、逆に疲れていく事ばかりの病院を嘆くあまりどっかのライトノベルの主人公のような事を叫ぶクリスであった。

**第3話 優希邑登場 地獄の回診時間!?** (後書き)

まさにナイスタイミング(!!?)で政胸のライバル 優希邑登場!  
さらに騒がしくなる加富根総合病院。

次回はまたしても新たなキャラが…

クリス「作者は俺を過労死させたいのかよ…(怒)」

#### 第4話 思わぬ来訪者（前書き）

今回は3人目のオリキャラが登場します。

政胸

「ってかこの作品って話数ごとにオリキャラ登場してない？」

小十郎

「政胸様！そこはまだ始まって間もないので堪忍してやりましょう」

## 第4話 思わぬ来訪者

東京上空…

雲ひとつない快晴の空を、一機の米軍の輸送機が飛行していた。

その機内の中では金髪のメッシュの入った茶髪の長髪を後ろに束ねたビジュアル系の顔に赤い布を鉢巻代わりに巻いている青年が、

I podで音楽を聴きながら座席にふんぞり返っていた。

ちなみに青年にかけているヘッドホンから漏れて聞こえてくる音楽は『勇気凜凜』である。

青年の隣には銃やら弾薬やらが積まれたリュックサックが置いてある。

パイロット

「おいらルク。そろそろ目標の上空700メートル地点だ」

青年

「サンキュー、レックス！さて、俺が来た事知ったらびっくりするだろうなあクリスマス兄貴」

青年がそう呟きリュックを背負うと同時に輸送機のカーゴドアのハッチが開いた。

その頃、加富根総合病院では…

10階から25階までを占めている入院患者、スタッフ、見舞客用のバラエティモール。

そこは本来のショッピングモールと同様、様々な専門店から映画館、ボーリング場、屋内プールなどのアミューズメント施設がそろって

おり、

もはや一つの巨大商業施設である。

その一角にあるゲームセンター『K I J U J U』ではクリスと芳佳、サーニヤがエアホッケーをしていた。

遊びながら話している話題は、言うまでもなく政胸達の事に関してだった。

クリス

「それで政胸と優希邑が散々病室で暴れまわったせいで部屋はめちゃくちゃだわ、俺まで看護師達に怒られるわで、その日は散々だったんだ」

芳佳

「ハハハ：とんだとばっちりだね。クリス君」

愚痴をこぼしながらクリスが弾いたパックをダブルスを組んで上手く打ち返している芳佳とサーニヤ。

サーニヤ

「そういえば、その政胸さんと優希邑さんってどんな関係なんですか？」

クリス

「なんでも優希邑の奴も『10S』<sup>テンズ</sup>っていうストリートギャング集団のリーダーらしくて、政胸率いる『BLUE DRAGON』とある時ドンパチやからして以来、互いに認め合う好敵手同士らしいぞ」

サーニヤ

「好敵手…」

するとクリスの打ったパックを返そうとした芳佳の前に割り込むようにサーニヤがパックを打ち返す。

サーニヤ

「好敵手といえど：私達もそろそろクリス君の本命を決める決着をつけないと：ねえ芳佳ちゃん？」

《カチン！》

サーニヤの挑発的な笑みに反応する芳佳。

芳佳

「そうだねえサーニヤちゃん：じゃあ決着つけようか？」

二人は笑いあっているがそこから発せられるオーラはすさまじくどす黒い。

クリス

「あ：あの二人とも：？」

芳佳

「クリス君！」

サーニヤ

「クリスさん！」

クリスが声をかけようとする、まるで狂犬と化け猫のようなすさまじい形相で睨んでくる芳佳とサーニヤ。

芳佳・サーニヤ

「「さあ！パックを打ってきて（ください）！！」」

二人は目に見えない程の早さでマケットを持った腕を振り回す。

クリス

「なんか二人とも怖いんだけどおおおおお！！」

悲鳴を上げるクリス。

そしてその様子を見ていた周りの客達も…

客1

「あれってストライクウィッチーズの芳佳ちゃんとサーニャちゃんよね？」

客2

「あの子達ってあんなに怖かったっけ？」

客3

「俺ストパンのパフォーマンス飛行見た事あるけどあんなに怖い雰囲気だしてなかったような…」

客4

「なんか知らないけど近づかない方が無難だな…」

かなりどん引きしていた。

…つとその時だった。

アナウンス

《お呼び出しします。429号室のクリス・レッドフィールド様。

お手紙をお預かりしていますのでバラエティモール14階『院内郵便局』までお越しください」

クリス

「あっ!?! 助かつ…じゃなくて! 二人ともごめん呼ばれたから勝負はここまでにしよう」

クリスがそう宥めると二人は渋々ながらもそれに従った。

14階 『院内郵便局』 配達物受付コーナー

受付嬢

「どうぞ。配達物はこちらでございます」

そう言って受付嬢が手渡してきたのは一通の手紙であった。

サーニヤ

「今時、手紙って珍しいですね」

クリス

「確かにな。誰からだろ…ん?」

差出人の名前を見て目を見開くクリス。

芳佳

「どうしたのクリス君?」

クリス

「この差出人……ラルクからじゃないか!」







優希邑

「な…なんでしょうか!? 今の音は!?!」

アベル

「屋上の方から聞こえてきたぞ!?!」

魔理沙

「アベル隊長。行ってみようぜ!」

すぐさま優希邑は二槍を、魔理沙は箒を手に取り、柔道使いであるアベルはそのままの状態で屋上に向かった。

時を少し遡り、数分前 屋上に設置されたグラウンドテラスでは…

リュウ

「ふん! はあ! やあ!」

白い柔道着を纏った青年…リュウがウォームアップがてらに軽く格闘技の練習をしていた。

彼は数日前に金山企業の鬼川という青年に襲撃されてしまい、重度とまではいかなかったものの怪我を負ってこの加富根総合病院に入院していた。

リュウ

「うん……だいぶ、感も取り戻してきたな」

リュウは満足そうに自身の拳を見つめる。

リュウ

「明日はいよいよ退院か。嬉しいがまた放浪生活に逆戻りになるのは気が引けるな」

リュウはそう呟きながら、ベンチに座ってミネラルウォーターを飲みながら、ふと空を見上げた。

リュウ

「ん？」

その時、リュウの視界に広がる青空の真ん中を飛行する輸送機らしき機影から、小さな黒い物体が飛び出してきたのが見えた。

リュウ

「なんだ？」

リュウが注意深く黒い物体を見てみると、それはだんだんこちらに近づいてきており、同時にその姿は大きく見えてくる。

リュウ

「あれ…人じゃないか!？」

その影は次第に人の姿となっていく、明らかにこちらに向かって落ちてきている事が確認できた。

リュウ

「まずいますい!よせ!」

リュウが慌てて逃げようとするが、人らしき影はリュウに向かって



魔理沙

「な…何だこれ！？屋上が目茶目茶じゃん！」

グラントテラスの中心にまるで隕石でも落ちたかのような巨大クレターが出来、それを見た魔理沙が驚きの声を上げる。

アベル

「しかし変だな…誰もいない…。」

アベルが屋上を見渡してみるがそこには誰も人影の姿はない。  
すると優希邑がクレターの真ん中で倒れているリュウを見つける。

優希邑

「！？…430号室のリュウさんじゃないですか！！大丈夫ですか！？」

優希邑が慌ててリュウの傍に駆け寄る。  
するとリュウが意識を取り戻した。  
だがかなり手ひどい怪我を負っているようだ。

優希邑

「リュウさん！しっかりしてください！」

アベル

「誰にやられたんだ！？」

優希邑とアベルの掛け声にクリスが虫の息状態になりながら答える。

リュウ

「い…いきなり空から…ひ…人が…」

アベル

「人だと!? どんなんだ?! もしかして黒い服を着て、首に青い石のペンダントを持った女の子か?!」

魔理沙

「おーいアベル隊長…それまんま『ラ○ユタ』じゃねえかよ」

アベルのクールボケに後ろから魔理沙がツッコむ。

貂蟬

「すぐに応急処置の用意をしないと! 優希邑ちゃん! 40秒で支度しなさい!」

魔理沙

「アンタも無理にラ○ユタネタ使うなよ!!」

魔理沙のツッコミが響く中、優希邑はリュウの身体を起こして応急処置の準備を整える。

優希邑

「婦長! 準備が整いました!」

すると貂蟬はリュウにゆっくり近づいていく。

貂蟬

「さあ! 私の愛のマウスツーマウスでリュウちゃんを救命するわよ!」

魔理沙

「ま…マウスツーマウス!？」

咄然とする魔理沙の前で貂蟬はリュウを抱き上げると…

貂蟬

「リュウちゅああああああん! しっかりしてちようだい!!」

激しく抱きしめながら死よりも恐ろしい（笑）『マウスツーマウスMTM』をやった。

リュウ

「!?!?…ぐああああああああああああああっ!! ぐえ  
つぶつぶ…!!?!」

魔理沙

「うええええ!?! 気持ち悪!」

アベル

「ぐっ…とてもたまらん…」

貂蟬のMTMにリュウは全身を真っ青にして悶絶し、魔理沙はその  
気持ち悪い光景に口元を押さえ、アベルも思わず目を反らした。

優希邑

「貂蟬婦長! 頑張ってください!」

魔理沙

「いや応援してないで助けろよ! リュウの奴やばいことになってる  
ぞ!!!」



一人呑気に応援する優希邑に魔理沙がツッコんだ。

その間にもリュウの身体はまるで生気を吸い取られていくかのようにやせ細り、ついにはミイラに近いような姿になった。

貂蟬

「ふう…これで患者が一人救われたわね…」

魔理沙

「どこがだよ!?! どう見ても救ってるどころか、逆に命奪いかねてるじゃねえか!?!」

MTMを終えて一人満足そうにする貂蟬に、魔理沙が怒鳴りながら  
箒で殴った。

その脇に倒れているリュウの身体は干からびた死体のような姿になってしまっていた。

その後、リュウの退院が当分先になってしまった事は言うまでもない……

その頃…

49階 外科病棟共有フロア。

そこには病室に戻りながら弟からの手紙を読むクリスと芳佳、サーニヤの姿があった。

クリス

「…っというわけで、訳あって近々兄貴の見舞いがてらに日本へ行くから。楽しみにしてくれよ。ラルクより…か」

芳佳

「へえ。近いうちに来るんだ日本に」

サーニヤ

「どんな人会ってみたいです」

クリス

「やめとけ。アイツはろくでもない奴だから」

芳佳とサーニヤはまだ見ぬクリスの弟を想像し胸を躍らせるがクリスは手を振って二人を制止する。

芳佳

「どういう人なの？そのラルクって人」

クリス

「まあ…なんて言ったらいいか…そのあれだ。俺の家ってもう両親がいないってことは知ってるよな？」

サーニヤ

「そういえばクリスさん前にそう言ってましたね」

クリス

「あいつは親父やお袋が死んでから俺とクレアで必死に育ててやったのはいいが、末っ子でしかも生まれてすぐに両親を亡くしちゃったから不憫に思ったクレアの奴が、随分甘やかして育ててしまったな…おかげですっかり今じゃとんでもない悪ガキになっちゃったんだ」

芳佳

「そ…そうなんだ…」

クリスが手紙を懷にしまいながら呆れたように話す。

クリス

「あいつが俺にわざわざ会いに来るっていう時は、今通っている士官学校を退学になりそうな時か、金をせびりたい時かのどっちかだろう」

芳佳

「えっ！？士官学校に通ってるの？」

クリス

「ああ。アメリカの特殊作戦軍に入りたいとか言ってたから、奨学金使ってコロラドの士官候補生育成学校に入れてやったんだ」

サーニヤ

「へえ、じゃあ私や芳佳ちゃんと同業者って事になりますね」

そんな会話をしながら429号室へと戻ってきたクリス達は病室を空けて中に入ると…

青年

「んでそのばあさんよく見たらオカマだったんだよ！！」

政胸

「なにそれ！？アハハハハハハハハハハハ！！」

政胸のベッドの脇にパイプ椅子を用意して政胸と談笑する青年の姿が…

芳佳

「あれ？どなたで…」

<<ズデデー！！>>

芳佳が言いかけたと同時に、その隣で派手にずっこけるクリス。

芳佳

「ど……どうしたのクリス君!？」

政  
胸

「ん?…ああ!戻ったんだクリス。芳佳もサーニヤもお揃いで」

クリスの派手に転ぶ音に気付いた政胸が笑いながら声をかけると、青年もクリスの方に振りかえる。

青年

「よお、久しぶりだな兄貴！」

サーニヤ

「えっ!？」  
「兄貴」  
「って事は…もしかして…!？」

するとクリスがゆっくりと顔を起こして青年に向かって言い放つ。

クリス

「ラルク……お前、手紙より先に来るなっていうもいつてるだろ」

ラルク

「いやあ、悪い悪い。久々に兄貴に会うもんだからつからかって



#### 第4話 思わぬ来訪者（後書き）

突然の現れたクリスの弟：その名はラルク・レッドフィールド。

彼の突然の来訪の理由とは？

そして彼と政胸の関係は？

次回早くもラルク&政胸のハチャメチャコンビにクリスもたじたじ  
！？

第5話 やってきた新人職員！？ その名も ラルク・レッドフィールド（前巻）

ラルク

「今回の話のタイトルってあれだよな？ 『BSAA学園！』 本編の第一話のタイトルのオマージュだよな」

政胸

「そうみたいよ。それに今回の話の冒頭部分は『BSAA学園！』第四十五話の続編タイアップものらしいし、まあこういう外伝モノにオマージュやタイアップはお約束じゃない？」

ラルク

「うん。オマージュすることで原作者への敬意を示しているみたいでいいと思うぞ」

政胸

「でしょ？そして上手くすれば本編で私たちの逆輸入登場なんてことにありつけるかもよ？」

ラルク

「それいいなあ。そうなれば本編の主役達と裏編の主役達がコラボして

下手したら零斗達を突き落として俺達が本編の主役ってことに……」

ラルク・政胸

「「ケーケッケッケーー！！」」

クリス

「やめろー！そんな会話してたら逆に龍の骨に嫌われて一生本編に

逆輸入登場できないかもしれないじゃないか！！」

注意（この会話はあくまで『ネタ』です）



第5話 やってきた新人職員！？ その名も ラルク・レッドフィールド

加富根総合病院 1階 急患用応急処置室

看護師 A

「ナーガン先生！こちらです！」

新たに搬送されてきた患者の応急処置をすべく、看護師に連れられてやってきたのは、外科医師のナーガン・メイクラフトである。

ナーガン

「ええっと、どれどれ…フム、なる程『少女達に踏みつけられた揚句魔法による攻撃で、全身致傷』か。これはひどいな。早く患者をここへ」

ナーガンは渡されたカルテを目に通すと、部屋の搬入口まで来ていた救急隊員達に患者を診察台に乗せるように促す。

救急隊員 A

「しっかりしてください！もう大丈夫ですよ」

????

「痛てててて…」

救急隊員達に声をかけられながらその患者は診察台へと乗せられる。その間にナーガンも治療の用意を済ませていた。

ナーガン

「さてと。では応急処置を始めようか」

そう言ってナーガンが振りかえった先：診察台に乘せられていたのは三国ガールズにやられボロボロになった劉備ガンダム（BSAA学園！第四十五話参照）であった。

劉備ガンダム

「痛てててて：あの子達いくらなんでもやり過ぎじゃねえ？：」

看護師B

「あ：あの：患者ってこの方ですか？」

救急隊員B

「はい。そうですけど？」

看護師達は劉備ガンダムを見て冷や汗をかく。

看護師B

「ってかロボットなら整備工場に運んだ方が？」

それは『禁則事項』です。

ナーガン

「まあまあ、一応診察しようじゃないか」

ナーガンはじっと劉備ガンダムを見て：

ナーガン

「あゝこれは……………」

ナーガンは数秒程黙り、部屋の中に緊張した空気が流れる。

そして不意にナーガンは顔を見上げて、

ナーガン

「わかった。これは怪我だな」

《ダアアアアアアア！》

とんちんかんな事を言って劉備ガンダムや看護師達や救急隊員達を  
ずっこけさせる。

救急隊員A

「いや、怪我してるから病院（こく）に連れて来てるんでしょ!？」

看護師B

「それはわかってますから早く治療してください!」

ナーガン

「わかってるわかってる。よし、じゃあまずは問診からやろうか」

劉備ガンダム

「大丈夫か？この医者」

ナーガンのいい加減すぎる診察態度に不安を覚える劉備ガンダム。  
すると劉備ガンダムに顔を近づけるナーガン。

ナーガン

「じゃあ。まずはお前さんの名前から」

劉備ガンダム

「劉備ガンダム」

ナーガン

「変な名前だね」

劉備ガンダムの返答を聞いてテキトーにカルテを書きながら問診を続けるナーガン。

ナーガン

「職業は？」

劉備ガンダム

「B S A A 学園の教師」

ナーガン

「格ゲーは鉄拳派？ ストファ派？」

劉備ガンダム

「鉄拳派です」

するとナーガンはいいかげんな調子で手を振りながら診断を下す。

ナーガン

「うん、わかった。お前さんの病名は『盲腸』だ」

看護師&救急隊員

「「「はあああああ！？」」「」」

劉備ガンダム

「ええええ！！？ いやいやいや！ 絶対違うだろ！！ なんでこの怪我見て盲腸だなんて診断下すんだ！？」

必死で訴える劉備ガンダムを無視しながらナーガンはそう言うて手を叩きながら誰かを呼ぶ。

ナーガン

「天海先生！盲腸の患者ですよ！手術お願いします！」

すると応急処置室にどこかの研究所や原子力発電所にいるような白い防護服を身にまとった集団が駆け込み、劉備ガンダムを拘束する。

劉備ガンダム

「え！？何これ！？」

???

「フフフフフフ…また一人私の手術を受けたい患者が現れましたか…楽しみですね」

そう言って部屋に、ぬらりと入ってきたのは白い長髪に白い肌…何故か血しぶきを浴びた白衣を纏って、口元を鉄製のマスクで隠したいかにも医者らしからぬ雰囲気を出した男であった。

劉備ガンダム

「（キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！）」

絶望に満ちた表情で言葉にならない悲鳴を上げる劉備ガンダム。周りにいた看護師や救急隊員達も啞然とする。

天海

「貴方が私のえも…患者ですか。…フフフ。すぐ楽にしてあげましょう」

劉備ガンダム

「いやいやいやいや!! どう見ても楽にするの意味が違うよね!? それに今一瞬『獲物』って言いそうになってたよね!? やばいよ! この人完璧に殺る(やる)気だよ。100%地獄へ落とす気だよ!」

天海

「さあ、参りましょうか。『宴』の席へ…フフフ…ハハハハハハハハハハ!!」

劉備ガンダム

「いやああああああああああ!! 助けてええええええええええええええ!!」

必死に逃れようと担架の上で暴れまわる劉備ガンダムを連れて、恐怖の執刀医 天海は防護服を着た連中を連れて応急処置室を出て行った。

看護師&救急隊員

「「「「……………」」」」」

ナーガン

「さて、これで我々の役目は終わりだな。皆御苦労さん」

そういうと、しっかり役目を果たしたかのように身体を伸ばすナーガン。

それを見て救急隊員達は…

救急隊員A

「おい…もうこの病院に急患連れてくるのやめようぜ？」

救急隊員B

「そうだな。今度から、この病院は搬送リストから外しとこう」

密かな取り決めを行うのであった。

その後、天海専用の手術室に運び込まれた劉備ガンダムの姿を見たものは…だれもいないらしい…

下でそんな騒ぎが起きていた頃、49階にある429号室ではラルクに芳佳、サーニヤが自己紹介をしていた。

芳佳

「国連軍第501統合戦闘航空団所属 宮藤芳佳です」

サーニヤ

「同じくサーニヤ・V・リトヴァク中尉です。よろしく願いしますラルクさん」

ラルク

「うん、ヨロチクビ！」

クリス

「ギャグが古いぞ。バカ」

畏まった挨拶をする芳佳とサーニヤに対し、ギャグ混じりの挨拶を

するラルクを横から叱るクリス。

ラルク

「でも第501統合戦闘航空団かぁ。って事は君達シャーリーの同僚だろ？」

芳佳

「え！？シャーリーさんを知ってるんですか？！」

シャーリーとは芳佳、サーニヤと同じ『STRIKE WITCH ES』のメンバーであるシャーロット・E・イエーガーの事である。

ラルク

「知ってるも何も、俺とアイツは昔同じ部隊で戦った仲だからな。時の仲間からは『空のシャーリーと陸のラルク』と二人して英雄視されたほどの腐れ縁ってもんよ」

芳佳

「ほえ」

サーニヤ

「知らなかったです」

自分達の仲間とラルクに意外な接点があった事に驚く芳佳とサーニヤ。

すると、ラルクが怪訝な表情で問いかけてくる。

ラルク

「ところで兄貴。なんでこんな有名人の子達二人が兄貴と一緒にいるんだ？」



クリス

「えっ!?! いや…それは……」

恥ずかしいのか頭を掻きながら照れくさそうにするクリス。  
すると芳佳とサーニヤが彼の代わりにはっきりと答えた。

芳佳・サーニヤ

「「恋人です!」」

クリス

「お…おい!」

ラルク

「えっ!?!」

二人の言葉に目を点にするラルク、だが間もなく…

ラルク

「ギャハハハハハハハ!?! こ…恋人おおおお!?!」

腹を抱えて笑いだした。

ラルク

「兄貴! いくら今作品で、バイオ本編のお相手のジルが女子高生になっちまったからって、よりによってこんな幼女を二人も恋人にしてんじゃねえよ!

ロリコンか!?! かの有名な『バイオ』の主演もついにロリコンに成り下がっちまったか!?!」

クリス

「うるさい！それから楽屋ネタをいうんじゃないやねえよ！大体俺だって好きでロリコンになったわけじゃねえし！！」

サーニヤ

「そうです！クリスさんはロリコンではありません！この作品では幼女好きのフェミニストという設定なのです！」

クリス

「ちよつとサーニヤ！それフォローになってないから！大体俺のキヤラ、そんな設定じゃねえし！」

サーニヤのフォロー（！？）に冷や汗をかきながらツツコむクリス。

芳佳

「とにかく愛があれば年の差なんて関係ありません！！私はクリス君の外見や性格、さらには『あそこ』の大きさまですべてが好きなんです！」

サーニヤ

「たとえばクリスさんが『ロリコン』と言われるのが、『ろくでなし』と言われるのが『い○きん・た○し』と言われるのが、

私も芳佳ちゃんもクリスさんを愛しているのです！」

クリス

「いやいや！そこまで言われてないから俺！それに二人とも『あそこ』とか『い○きん・た○し』なんて言葉使っちゃダメだって！全  
国のSWファンから苦情がきたらどうすんだよ！？」

暴走状態になっている芳佳とサーニヤを必死に止めるクリスは、隣

のベッドで寝ている政胸に声をかける。

クリス

「ちよつと政胸!! なんとかしてくれよ! 二人を止めてくれって!」

しかし指摘された政宗は、自分のベッドでくつろいで呑気にファッション雑誌『rin・rin』を読んでいた。

政胸

「あつ…この新作のブラウスいいわね。今度小十郎に買ってきてもらおうっと」

クリス

「いや、呑気にカタログショッピングしてんじゃねえよ! 大体よく考えたらお前、今のが今回の話の第一声じゃねえか! どんだけ雑誌に熟読してんだよ! 主人公なんだからもっとバンバン喋れよ!」

政胸

「だってめんどくさいじゃない。いちいち台詞喋るのって」

クリス

「それでも主役か! お前は!」

クリスの怒声と、ラルクに対して自分達のクリスへの愛の深さを説く芳佳とサーニャ達の声が病室内に響き渡った。

すると…騒ぎが外まで聞こえてたのか、優希邑とアベル、魔理沙が部屋に入ってくる。

魔理沙

「おい429号室！うるさいぞお前ら！！」

優希邑

「何騒いでるんですか？」

すると政胸は優希邑の姿を見るなり：

政胸

「あっ！優希邑！勝負…」

クリス

「するなああ！！」

ベッドの脇に抱えられた刀を取ろうとしてクリスに止められる。  
すると、ラルクがアベル達の方を向くと「ああ！！」っと顔を輝かせる。

ラルク

「これは！これは！アベル隊長！今日からよろしくお願いします！」

クリス・芳佳・サーニャ

「「「はっ？！」「」」」

クリス達が、ラルクの言葉を理解できずに啞然とする。

クリス

「よろしくって…お前何言ってるんだ？」

ラルク

「やだなあ兄貴。俺今日からこの病院の警備員として働く事になっ

たからその挨拶だよ」

クリス

「えっ?!」

クリスが呆気にとられる中、慌ててアベルが懷から履歴書らしきものを取り出して、ラルクの顔を見ながら履歴書に目を通す。

アベル

「あ!!! お前が例の新人警備員か!!!」

クリス・芳佳・サーニャ

「「「えっ!?!」」」

話の意味が分からず呆けるクリス達を後目にラルクはアベル達と話を続ける。

優希邑

「えっ!?!? じゃあこの方が…」

アベル

「そうだ。こいつが例の新人警備員だ」

魔理沙

「おい! 何初日から遅刻して来てんだよ!」

魔理沙はそう叫んでラルクを叱るがラルクは全然気にしていない。

ラルク

「あれ? 俺遅刻した? あちゃ〜! ギリギリセーフだと思ったのに」

謝る気のない返事を返すとラルクは遅刻理由を話し始める。

ラルク

「いやあれですよ。コロラドから仲間に飛行機で送ってもらったんだけど、急にたこ焼きが食べたくなって大阪に寄り道してたら遅刻したみたいで」

魔理沙

「そんな理由かよ！？つーかたこ焼きぐらいそこらで買えばいいだろ？！」

政胸

「そうよラルク。どうせ食べてくるなら好み焼きのがいいわよ」

アベル

「そういう問題ではない！！」

政胸のボケにツッコむアベル。

ラルク

「んでもってそれからここまで直行で送ってもらって、さっきこの病院に『HALO降下』で降ろしてもらったんだよ」

優希邑

「あのアベルさん？HALO降下ってなんですか？」

アベル

「《High Altitude Low Opening》高度降下低高度開傘 まあ、簡単に言えばパラシュートを使って敵地

に降下、潜入する軍隊の作戦方法のひとつだ」

そこまで言った時、アベルがハツとした表情になる。

アベル

「ちょっと待て！？って事はまさかさっきの屋上にできたクレーターは！？」

ラルク

「屋上？ああ、そういえば俺が着陸した際に穴開けちゃったなあ。大丈夫大丈夫なんか胴着着た兄ちゃんを下敷きにしたから床は抜けてはないよ」

アベル

「……………こいつを逮捕しろおおおおお！！」

魔理沙

「了解だぜ！どりゃあああああああ！！」

ラルクの話聞くや否や、彼を取り押さえにかかるアベルと魔理沙。それを寸前のところで避けるラルク。

ラルク

「ちょっと！これから働く同僚をなんで逮捕するんだよ！」

アベル

「問答無用！魔理沙！！マスタースパークで気絶させ…」

クリス

「あの…お取込み中済みませんがちょっと…」

まさに一触即発の状態となったラルクとアベル、魔理沙の間にクリスが恐る恐る割って入る。

クリス

「ラルク……お兄ちゃん話がよくわからなただけど……新人警備員ってどういう事？ 今日から働くって何？ つーか学校は？」

ラルク

「ん？ つまんないから士官学校やめた お金なくなった 国から奨学金返せって言われた だから日本に逃げてここで働くことにした以上」

クリス

「なんで片言説明!？」

ラルク

「説明めんどくさいから。じゃあそういうわけでこれからしばらくよろしく頼むぜ兄貴〜!!」

そういうと電光石火の速さでアベル達から逃げるべく病室のドアへ駆け出すラルク。

ラルク

「あ! それから俺しばらくこの病室を自室替わりに使うから。後で引っ越し業者が俺の荷物届けに来ると思うし代わりに受け取りと片付けよろしく〜!」

アベル

「あっ!?! こら待て!!」



魔理沙

「屋上の修理代払えコノヤロー!!!」

そう言い残して病室を出て行ったラルクを、アベルと魔理沙があわてて追いかける。

優希邑

「ああ！？アベル隊長！魔理沙さん！待ってくださいませ！！」

急いで二人の後を追って優希邑も病室を出て行った。

嵐のように去って行ったラルク達の出で行った半開きのドアを啞然と見つめるクリス達。

芳佳

「あ……あの……クリスマス君？」

サーニヤ

「だ……大丈夫ですか？」

顔を蒼白になつて愕然とするクリスに芳佳とサーニヤが恐る恐る声をかけると、政胸が彼を氣遣つて励ましの言葉をかけようとするが……

政  
胸

「いいじゃないのクリス。しばらくかわいい弟と一緒に住めるんだし？　すごく楽しくなりそうでよかったじゃない」

クリス

「よくないわあああああ――！！！！」

励ますどころか逆に怒りを爆発させたのは…仕方ないことだね（笑）。

今日より、またひとつクリスの静養生活を脅かす存在ができたのであった。

**第5話 やってきた新人職員!?**      **その名も ラルク・レッドフィールド（後妻**

ヤクザの令嬢、政胸に次いで弟のラルクまで病院に住み着くことになってクリスに安静の時間は訪れるのか…

芳佳

「そういえばラルク君と政胸さんって結局どういう関係なんだろうね？」

サーニヤ

「そういえば前回の予告で出たのに今回の話で追求されませんでしたね」

えゝ…そこは予定を変更しまして…しばらくは読者の皆さんの想像にお任せするということで（苦笑）

## 第6話 旧友同士の再会（前書き）

うゝん：初めて、エロ描写に挑戦しましたが、初めて何でこれくらい（劇中参照）が限度でした。

政胸

「甘いわねえ。もっと龍の骨みたいにいけるとこまでいきなさいよ。このヘタレ」

うっ……まあ、とにかくエロ表現の苦手な方は（一応）閲覧にご注意を。

## 第6話 旧友同士の再会

加富根総合病院 49階 429（しにく）号室

患者達が皆寝静まった頃……その部屋では恋人達による甘い『営み』が始まろうとしていた…

芳佳

「ね…クリス君……今日こそいいでしょ？／／／／／」

クリス

「芳佳…／／／」

サーニヤ

「早くクリスさんが元気になるように…私達からで『治療』をしてあげたいのです…／／／／／」

クリス

「サーニヤ…／／／」

クリスのベッドの上には、それぞれ服を脱いで一糸纏わぬ姿になった芳佳とサーニヤの姿があった。

芳佳・サーニヤ

「「ん…／／／」」

二人は横になるクリスの傍に近づくとその頬に熱い口づけをする。そしてゆっくりと彼の毛布の中に入っていき……

ラルク

「おおお！いいいよ『本番』突入か！？」

政胸

「キヤア〜！芳佳もサーニヤもだいた〜ん♪」

優希邑

「わわわ……はっ…破廉恥です…／／／／」

注意、只今の時間。ちゃんと日は高く昇っています。

ソファーやゲーム機、ラルクのコレクションの銃火器を収めるショーケースなど、部屋の5分の3をラルクの私物によって占領された病室の中、

部屋の本真中に設置されたホームシアター並みのテレビに映るクリスと芳佳、サーニヤの『営み』を観て、激しく興奮するラルクと政胸、そしてまるで自分が観られてるかのように顔を赤くしている優希邑。

ラルク

「いいぞ！芳佳が兄貴のズボンと下着を下ろしたぞ！…さあそのままひと思いにフ…」

クリス

「やめろおおおおおおお！！！」

《ドンッ！！ドンッ！！ドンッ！！ドンッ！！ドンッ！！》

ラルク・政胸・優希邑

「「「うわあああああああああああああ！！？」」「」」

いよいよ18禁プレイ突入と思われた場面で、クリスが3人の後ろからベネリM3（ライオットガン）を乱射し、テレビを破壊する。

政胸

「あああああ！？私の特注のホームシアターが！！」

ラルク

「兄貴！なんてことしてくれんだよ！折角ここからが本番だったのに！！」

政胸が悲痛な叫びを上げて、ラルクがクリスに文句を言う。

クリス

「知るか！！つか、何なんだ今のビデオは！？」

クリスが顔を赤くしながらDVDデッキを指す。

ラルク

「いや：兄貴と芳佳ちゃん、サーニヤちゃんとの3P映像スリープレイを焼いてみたんだけど？」

クリス

「何時の間に撮ってたんだ！？ってか盗撮だろそれ！？」

ラルク

「いや、でも兄貴。なかなかいいのが録画されてたよ。まさか過労の身を押して2人相手に5回も抜：」

クリス

「やめてくれえええ！これ以上言ったらいろいろとマズイ事になる

から、俺のキャラの印象もこの小説も!!」

優希邑

「く…クリスさん…貴方ってそこまで性欲が…ブフウウー…!!」  
今作初の鼻血を噴出する優希邑。

クリス

「そこ! 変な誤解しないでくれ!!…っつかラルク。まさかそれ、複製したりしてないだろうな?」

ラルク

「複製はしてないよ。コピーしてるけど」

クリス

「一緒だそんなもん!!」

政胸

「いいじゃないクリス。商用AVにしたらきつといい値付くわよ。  
タイトルは『捜査官とウィッチの甘い三角関係物語』なんてどう?」

クリス

「撃ち殺されてえのか眼帯バカ!! とにかくすぐに全部抹消しろ!  
今すぐ!」

ラルク

「やだ…いい! 秋葉原で2万で売ってきてやるもんね…!」

そう言ってDVDデッキからディスクを取り出すと、一目散に逃げ出すラルク。





「失礼します。クリス君はいますか？」

芳佳だった。その後ろにはサーニヤもいた。  
だが今日は彼女達だけではなかった。

美緒

「おお！具合はどうだ？クリス」

リーネ

「お久しぶりです」

エイラ

「なんか騒々しいけど何やってんだ？」

ストライクウィッチーズのメンバーで芳佳達の教官 坂本美緒に、  
芳佳の親友のリネット・ビショップ（愛称 リーネ）、サーニヤの  
親友のエイラ・イルマタル・ユートイライネンの3人も一緒に来て  
いた。

ちなみにエイラはサーニヤの事が大好きであり、そのサーニヤと恋  
仲になったクリスを以前は敵視（『B S A A 学園！』本編、第三十  
七話から三十九話までを参照）していたが自身も新たな恋人である  
王原皇呀との出会い（『B S A A 学園！』本編、第四十三話を参照）  
を経た事で、今はクリスとも普通の友人関係となった。

ラルク

「ああ、ちょうどよかった芳佳ちゃん、サーニヤちゃん。今兄貴と  
君たちの夜の営…」

クリス

「黙れええー！ー！ー！ー！ー！ー！」

《ボオオオオオオオオオオオ！！！！》

ラルク

「ギャアアアアアアアアアア！？」

芳佳とサーニャにDVDを渡そうとするラルクに火炎放射器を使った火炎攻撃を浴びせて制止するクリス。

するとラルクは黒焦げになり、手に持ったDVDは溶けてしまった。

政胸

「あゝあ。折角のDVDが…」

残念がる政胸を他所にクリスは息を切らしながら焦げたラルクを優希邑に預ける。

クリス

「はあ…はあ…これでよし」

リーネ

「よ…芳佳ちゃん…私達すごく悪いタイミングに来たんじゃないかな？」

芳佳

「大丈夫だよリーネちゃん。こんなのこの病室では日常だから」

サーニャ

「入院してからずっとこういう事が続いているの」

エイラ

「どんな病室だよ…ここ」

美緒

「ははははは、相変わらず賑やかだな。クリスの周りは」

いきなりの派手な歓迎に、啞然とするリーネやエイラだが、美緒だけは豪快に笑った。

…っとその時、政胸が美緒に気が付く。

政胸

「あれ…もしかして…美緒姉え!？」

美緒

「ん?…あっ!?! お前…政胸か!?!」

美緒も政胸に気が付くと二人はお互いに駆け寄り合う。

政胸

「美緒姉えーーーーー!!! 久しぶりじゃない!!!」

美緒

「ほんと久しいなあ! 何年ぶりだ!?!」

互いに抱き合って再会を喜び合う政胸と美緒。  
それを見て、クリスや優希邑、芳佳達は驚く。

優希邑

「あれ? 政胸さんストライクウィッチーズの坂本少佐とお知り合いなんですか?」

政胸

「うん。知り合っているか、昔一緒に小十郎の道場で剣術を習ってたの。私からすれば姉的な存在で、よく近所からは美人眼帯姉妹って呼ばれてたくらいよ」

美緒

「はっはっはっ！ よしてくれ政胸！ もう昔の話じゃないか！」

クリス

「へえ。それは意外だなあ」

まさかの政胸と美緒の関係に驚くクリス。

美緒

「しかし、一体なぜお前もここに入院してるんだ？」

政胸

「ああ、実は交通事故で腕折っちゃったのよ。それでつらい入院生活を送ってるのよ」

クリス

「よく言うぜ。とっくに治って保険金目的で居座ってるくせに…」

《ガッ！》

クリスがぼやいた瞬間クリスの目の前を政胸の刀が横切り、クリスの傍にある壁に突き刺さった。

政胸

「クリス…余計な事言ったら次は心臓狙うわよ…」

クリス

「は…はい!!」

政胸がクリスにしか聞こえないような小声で威嚇すると、怖気づいて返事するクリス。

リーネ

「あの芳佳ちゃん、どういう事なの？」

芳佳

「実はね。政胸さん仮病使って…」

政胸

「芳佳…わかってるわよねえ？」

すると同じく二本目の刀を構えながら黒い笑みを浮かべる政胸。

芳佳

「は…はいい!!」

それを見た芳佳は、やはりクリスと同じく怖気づきながら返事する。

優希邑

「あのお、一体どういう事で…」

クリス

「聞かなくていい!聞かない方が身のためだから!」

話の内容が気になる優希邑を必死に制止するクリスだった。

その後、互いに自己紹介を終えた政胸、優希邑と、リーネ、エイラ達。

そして、優希邑が職務に戻るために部屋を出て行った頃に、ラルクも意識を取り戻した。

ラルク

「すごいなあ、あの「サムライ」こと坂本美緒と、政胸が同じ道場の門下だったとはなあ」

話を聞いたラルクも政胸と美緒の関係を聞いて驚いていた。

政胸

「小十郎は私がガキの頃に、私の世話役兼ボディガードをやりつつ街の剣道場を開いて、そこで私も剣術を習う事になったのよ。その一番弟子だったのがこの美緒姉えてわけ」

美緒

「こいつは子供の頃からいろいろとお転婆な奴でな。私や片倉先生も常に困らされてたものだ」

サーニャ

「へえ、政胸さんも子供の頃からちっとも変わってないんですねえ」

政胸

「失礼ねサーニャ！私だって少しはお淑やかになってるわよ！」

エイラ

「威張って『お淑やか』だなんて言ったら世話ないと思うぜ？」

政胸

「寝取られ百合女は黙ってなさい」

エイラ

「誰が寝取られ百合女だコラああ！！？」

真っ赤になって憤慨するエイラをスルーしながら政胸は話す。

政胸

「でも、美緒姉えだってガキの頃から豪快でいろいろと無茶苦茶な事やってたじゃないの？」

美緒

「なにをいってるんだ？そんなの昔の話だろ」

芳佳

「へえ、坂本さんが無茶苦茶な事してたんですか？」

リーネ

「今の少佐からは想像ができませんね」

美緒

「当たり前だ。私は常に立派な大和魂を持っていた純潔な人間だ。そんな人を陥れるような浅はかな真似はしないぞ」

美緒はそう言うと言話を切り替えるかのように一つの箱を取り出した。



美緒

「それよりもだ。クリスの為にささやかだが見舞いの鯛を持ってきたんだが、政胸とこうして再会した事だし、どうだ軽く宴会でも」

美緒の提案に嬉しそうに笑う政胸

政胸

「あらいいわねえ、じゃあさっそくそれ捌いて一杯やる？」

ラルク

「賛成！じゃあちよつと兄貴。お酒はある？」

クリス

「え！？」

ラルク

「だから酒だって」

クリス

「酒！？俺胃炎なんだから酒はダメって言われて、今は禁酒中だ」

政胸

「ええ？！じゃあ酒持っていないの？アンタ」

クリス

「あたりまえだろ。一本も持っていない」

政胸

「仕方ないわねえ。じゃあラルク、昨日買ってきた焼酎開ける？」

ラルク

「そうしょっか」

そう言っつて、ベッドの下から日本酒の一升瓶を取り出すラルク。

クリス

「っつて持ってんのかい!？」

政胸

「まあ、一応ね。じゃあ飲みましょうか？」

リーネ

「ええ!？ま…マズイですつて私達未成年なんですから」

サーニヤ

「そうですよ。しかもこんな昼間から」

リーネとサーニヤの忠告にもまったく耳を傾けずに、一升瓶のふたを開けようとする政胸を慌てて止めようとするクリス。

クリス

「いや飲むじゃなくて、大体病室内は飲酒禁止だろ？」

ラルク

「固いこと言うなよ兄貴。こういうのは無礼講だろ？」

政胸

「そうよ。いいじゃない別に」

美緒

「そうだぞクリス。それに成年してるお前がいれば問題はない」

クリス

「そういう問題じゃなくて！…とにかく酒はダメだ！」

そう言って政胸の手から一升瓶を取り上げるクリス。  
その時だった。

レベッカ

「政胸さん、さっき優希邑さんが言い忘れてたんですが…」

同じタイミングで病室のドアが開き、レベッカが部屋に入ってきた。

クリス

「あ…」

レベッカ

「クリスさん！！」

一升瓶を持ったまま硬直するクリス。  
そしてそれを見たレベッカは烈火のごとく怒りだした。

クリス

「は…は、はい！」

レベッカ

「貴方お酒は絶対ダメって言ったでしょ！」

クリス

「いやあのこれは…」

レベッカ

「それに当病棟内は飲酒禁止なんですよ！ルールを守れないようだったら出てってもらいますからね！」

クリスを怒鳴り散らすレベッカを見て芳佳達は慌てふためく。

リーネ

「わわわ！ど…どどどうしよう！？」

サーニャ

「完璧に誤解されてるよ！」

芳佳

「ちょ…ちょっと坂本さん！なんとか事情を説明してあげてくださいよ！」

無実の罪で怒られるクリスを見て、慌てて美緒に助けを求める芳佳。すると美緒はレベッカとクリスの間に割って入る。

美緒

「いや待ってくれ。これは私が悪いんだ！ちゃんと注意しなかった私が悪いんだ！」

クリス

「…って待てよおい！！？」

芳佳

「坂本さあーーーーーん！？」

完全にクリスに濡れ衣を着せる気満々の美緒の発言に仰天する芳佳。

クリス

「そうじゃないだろ！この酒はお前らが…」

慌てて訂正しようとするクリスを横から政胸が止める。

政胸

「いいのよ！クリス！もういいから！」

クリス

「いやいや、いいことないだろ！」

レベッカ

「本当に坂本少佐も政胸さんも、もっと周囲に気を配ってください  
よもう」

美緒

「はっはっはっ、すまんすまん」

美緒がそう言って謝るとレベッカはクリスに向かって厳しい口調で  
言い放つ。

レベッカ

「クリスさん！今回は坂本少佐と政胸さんに免じて許しますけど…  
今度こんな事してごらんなさいよ！承知しませんからね！！」

クリス

「ええっ！？なんでこうなるんだっ？」

濡れ衣を着せられてしまい頭を抱えるクリスを後目に、レベッカは頭から湯気を噴きながら部屋を出て行った。

美緒

「いやあ、すまなかったなあ本当に！申し訳ない！」

美緒はレベッカに平謝りを繰り返しながら部屋の入り口まで送っていき、ドアを閉めるとクリスの方に振り返って…

美緒

「ははははは、申し訳なかったな！クリス！」

クリス

「やかましいわ！！」

謝る気のない謝罪を述べてクリスに怒鳴り返された。

クリス

「なにが『すまなかった』だよ！？全部俺に罪擦り付けやがって！」

美緒

「はっはっはっ、しかし私達、数年ぶりでもなかなかのコンビネーションだったな政胸」

政胸

「まったくよねえ。アハハハ！」

エイラ

「何のコンビネーションだよ！？」

芳佳

「もしかして：坂本さんと政胸さんってドSコンビ？」

不敵に笑いあう政胸と美緒を見て内心軽く引く芳佳。

その隣ではクリスが先ほどのショックから立ち直れないでいた。

クリス

「あああ！？どうすりゃいいんだよお！完全に病院側から誤解されちまったー！！」

サーニヤ

「クリスさん。しっかりしてください」

リーネ

「あの看護師の人には、後で私達がちゃんと事情を説明しておきますから」

そう言ってクリスを励ますサーニヤとリーネ。

ラルク

「まあまあ兄貴。これ上げるから元気出してくれよ」

そう言ってまたしても一枚のDVDを差し出してくるラルク。

クリス

「なんだよこれ？」

ラルク

「さっきのDVDとは別に作ったここ一週間の兄貴と芳佳ちゃん、サーニヤちゃんとのセックス映像をまとめた総集編…」





## 第6話 旧友同士の再会（後書き）

クリス

「6話目にして気が付いたんだが…この作品…ほとんど俺がひどい目に遭って終わるオチばっかじゃね？」

政胸

「いいじゃないの。アンタはこの作品の狂言回しの役なんだから、主役である私達にどんどん振り回されなさい」

ラルク

「そうそう、『ハルヒ』でもキョンが周りの主要キャラ達に振り回される役のように、兄貴の役割は物語の中でとっても重要な役目なんだぞ」

クリス

「そのキョンよりだいぶ振り回され方の扱いが悪いってのはどういう事なんだよ？（怒）」

## 第7話 緊急事態！？SWの入院！（前書き）

いやあ、気が付いたら一か月近くほったらかしだったよ。

政胸

「作者、最近リリカルBASARAばかりだったしね…（怒）」

芳佳

「いくら向こうで『ティアナ編』が佳境だからって、もう少し連載のバランスを考えてください」

すみません…あっ！そういえば今回はそのリリカルBASARAの『あいつ』が登場しますのでお楽しみに。

## 第7話 緊急事態！？SWの入院！

アナウンス

《緊急搬送！緊急搬送！医師、看護師の方々は至急1階の急患用応急処置室へお越しく下さい！》

加富根総合病院内にサイレンとアナウンスが鳴り響く。

そんな中、政胸、クリスは、優希邑やレベッカ達ナースに同行して応急処置室に向かって走っていた。

政胸

「一体どういう事なのよ優希邑！！美緒姉え達が致傷したって！？」

優希邑

「私もよくわからないんですが、とにかく皆さん怪我の具合がかなり悪いみたいなので私達も応援で呼ばれてしまってた…」

クリス

「それ…相当やばいんじゃないのか？」

政胸達は大慌てで応急処置室の前まで来ると、そこには芳佳とサーニヤ、エイラの姿があった。

だが、3人の姿はまるで戦場から帰還したばかりのような傷だらけの痛々しいものであった。

クリス

「芳佳！サーニヤ！無事だったんだな！」

芳佳・サーニヤ

「「クリス君！」」<sup>さん</sup>

二人の姿を見て一先ずほっとするクリス。

政胸

「一体どうしたっていうのよ！？美緒姉え達に何があったっていうの！？」

クリス

「落ち着けよ政胸。とにかく、今は冷静になるべきだ」

政胸が芳佳に詰め寄ろうとするので、クリスは慌てて彼女を宥めた。その傍では優希邑達が応急処置室に入っていた。

クリス

「それで…何があったって言うんだ？」

芳佳

「うん…実は今日の演習中だったんだけど…」

芳佳ビジョン開始

それは今日の昼間の事だった。

ストライクウィッチーズは、先日から、東北で発生したとある自然災害への支援活動を行う為に他国からやってきた輸送機を現地まで護衛するという任務を受けて、隊長のミーナをはじめ総動員で出動し首都と東北を往復して、なおかつ現地ではそれぞれ夜通しの空中支援活動を数日の間行っていた為、全員ほとんど寝ていなかった。その為、帰ってくる頃には全員が過労でほとんど口も聞けない状態

になってしまっていた。

だが、一行が基地に戻った時…滑走路では、思いがけない人物が一同を待ち受けていた。

ミーナ

「!?!? 誰!?!? 貴方は…」

青年の周りには基地の警備員や作業員達が重なるように倒れていた。

青年

「やあ、魔女の諸君…ごきげんよう…」

青年はニヤリと不気味な笑みをストライクウィッチーズに向けた…

芳佳ビジョン終了

芳佳

「その後、私達はすぐに全員でその人を取り押さえようと戦ったのですが…」

サーニヤ

「魔力も体力もほとんど消耗していたせいでまともに戦う事すらままならず…結局その人に…」

芳佳とサーニヤが暗い表情で説明する。

エイラ

「なんとか私と宮藤、サーニヤの三人は野郎に止めを刺される前に自衛隊の応援が来て助かったんだけどな…隊長や少佐達は皆やられ

ちまって、固有魔法を全部奪われたんだ」

政胸

「なんですって!?!」

クリス

「ひどいな…」

エイラの説明に驚愕するクリスと政胸。

クリス

「とにかく、全員一命は取り留めたって事だけなによりだな」

そう言ってクリスが励まそうとすると、応急処置室の中から…

シャーリー

「うわあああああああ!!?!」

優希邑

「シャーロットさん!?!しっかりしてください!!」

「「「「!!?!?!」」」」

ストライクウィッチーズのメンバーの一人、シャーロット・E・イエーガーの悲鳴と、優希邑達ナースの焦り声が聞こえてくる。

芳佳

「しゃ…シャーリーさん!?!」

5人はすぐに、扉が閉まり『治療中』のランプがついた応急処置室

に顔をやる。

レベッカ

「ま…まずいわ！？ここもやられてる！」

優希邑

「先生どうしよう！？」

医師

「押さえろ！押さえるんだ！これ以上ひどくならないように！！」

中から漏れてくる明らかにやばそうな雰囲気の話に、政胸達の顔が青ざめる。

エイラ

「お…おい！？なんかマズイ事になってんじゃないノカ！？」

サーニヤ

「シャーリーさんが…シャーリーさんが…」

クリス

「なんてこった…」

5人の表情に不安が過る。  
だが次の瞬間…

シャーリー

「あゝあ！服がコーラまみれじゃないかよお！」

「「「「えっ！！！？」「」「」」」」

シャーリーの拍子抜けたような声が聞こえて思わず固まる5人。

優希邑

「すみませんシャーリーさん。屁節先生はコーラが大好きなもので…」

シャーリー

「だからって治療中に飲まないでくれよお！あゝあ…折角お気に入り服だったのにシミだらけじゃんかゝ」

扉越しに聞こえてくる会話によって少しずつ状況の真相がわかってくる政胸達…

芳佳

「え？…これってつまり…」

エイラ

「治療中にコーラ飲んでた医者が…」

サーニヤ

「コーラをこぼして…」

クリス

「それがシャーリーの服にかかった…」

政胸



「それだけの事…?」

5人が唾然としたまま応急処置室のドアを見つめる。

医師

「いやあ、申し訳ありません。治療中はどうしてもコーラを飲まないと落ち着かないもので…ああ、レベツカ君。悪いけど替えのコーラ持ってきてくれないかい?」

レベツカ

「はい。わかりました」

その会話を聞いた5人は黙って応急処置室のドアに向かって駆け出し…

クリス・政胸・芳佳・サーニャ・エイラ

「「「「「つていうか治療中にコーラなんか飲むなあああああああああああああ!!!」」「」」「」」

《ドガアアアアアア!》

医師

「ぎゃあああああああああああああああ!!!」

声を揃えてツツコみながらドアを蹴り破り、レベツカに空になったコーラ瓶を渡そうとしていた医師にぶつけた…

その後、なんとか全員命に別状はない事が分かった美緒達は、それ

ぞれ外科の病棟に入院する事になった。

ちなみに隊長クラスのミーナと美緒には個室が与えられ、その他のメンバーは大部屋で相室という形で入院する事になった。

政胸は美緒の病室に見舞いに行き、クリスと芳佳達は大部屋に入院したウィッチ達を見舞う事にした。

シャーリー

「いやあ、ごめんよ余計な心配かけさせて。あのドクターいきなり私の胸にコーラ零したんだもん」

クリス

「いや、そもそも応急処置の最中にコーラ飲んでるのがおかしいと思うだろ？」

腕に包帯を巻いたシャーリーが笑いながら弁明するとクリスが冷やかにツツコむ。

芳佳

「でも、皆無事でよかったです。もし命に係わる事になっていたら……」

リーネ

「芳佳ちゃんが応急処置の回復魔法かけてくれたおかげだよ」

ペリーヌ

「そうですね。宮藤さんが応急処置を施してくれなければもつとひどいことになってた筈ですわ」

それぞれ頭や手に包帯を巻いたリーネとペリーヌがそれぞれ芳佳に

感謝の言葉を述べる。

バルクホルン

「だが固有魔法を奪われた上に、この怪我では当分は戦線復帰は無理だな」

バルクホルンはそう言って、包帯の巻かれた自身の腕を恨めしそうに眺める。

エーリカ

「いいじゃん。当分お休みできるんだし」

エーリカは満更でもない様子で、さっそくペットボトルの飲料水やマンガ雑誌などで散らかりだした自身のベッドで思いつきりくつろぐ。

ルッキーニ

「それより、芳佳、サーニヤ、クリリン。なんで少佐や隊長だけ個室であたし達は集団なのお？ あたしも一人部屋に入院したいよ」

クリス

「クリリンって…俺の事か？」

エイラ

「無理言うなよ。中佐や少佐は隊長・教官クラスなんだ。それぐらの優遇があって当然の話だろ？」

ルッキーニ

「で……も………んにゃ？」

ふとルッキーニが窓の外を見て、声を上げる。

芳佳

「どうしたの？ルッキーニちゃん？」

ルッキーニ

「ねえ？なんか戦闘機がこっちに向かって飛んできてるんだけど…」

一同

「戦闘機？」

クリス達は窓の傍に行き、外を眺める。

すると、一機の戦闘機…それも割と大きい機体の戦闘機がこちらに目掛けて低空飛行で飛んでくる。

芳佳

「あれって…明らかにこっちに向かってきてませんか？」

リーネ

「っていうかここに突っ込んで来てるような…」

すると戦闘機は段々その姿をはっきりと見せてくる。

クリス

「んな！？…あれは米軍のA-7 コルセアII攻撃機だぞ！！」

クリスが叫ぶと同時にA-7は突然空高く急上昇していったかと思えば、その拍子に一発のミサイルらしき物体を病院の…クリス達がいる病室目掛けて発射してきた。



バルクホルン

「へぶうううううう!!?」

ペリーヌ

「あべし!?!」

バルクホルンとペリーヌの身体をそれぞれクッション替わりにして着陸した。

ラルク

「ヒュ~~~~! やっぱBSAA学園からここまでA-7使えば5分もかからねえなあ」

クリス・芳佳・サーニャ・リーネ・エイラ

「「「ラルク(さん)!!!?」」」」

突然のド派手なパフォーマンス付きでの登場に驚くクリス達。

クリス

「おお! 兄貴! 芳佳ちゃん達も大丈夫かい?」

芳佳

「え...えつと...一体どういう事ですか?」

ラルク

「いやだなあ。ストライクウィッチーズが入院したっていうから心配してぶっ飛んできたんだぞ。丁度近くで俺の在日米軍の友人のジョージが演習飛行中だったから途中で拾ってもらって、HALO降下作戦用のミサイル型空輸ポッドでここまで送ってもらったんだよ」

ここで豆知識

HALO降下作戦とは『高高度降下低高度開傘』と訳される、わかりやすく言えばパラシュートなどを使って敵の陣地の上空を飛行する輸送機から直接降下する事で敵地に潜入する作戦の事である。

メタルギアソリッド3でネイキッド・スネークがバーチャス・ミッション時にこの方法で降下し、ゲーム内ではそれが人類初のHALO降下作戦という設定である。

ラルク

「ところで：ストライクウィッチーズの皆がいるって事はアイツも  
：」

シャーリー

「ラルク！？」

ラルクが病室内を見渡しているとクリス達を押しつけて、シャーリーが姿を出す。

ラルク

「！？：シャーリー！！」

シャーリー

「ハハハ！やっぱりそうだ！ラルクウー！久しぶりじゃないかー！  
！」

ラルク

「おおおお！！会いたかったぞお！『兄弟』いいー！！」

久しぶりの再会を喜び合うように抱き合うラルクとシャーリー。

一方、ラルクとは初対面のルッキーニとエーリカは状況が理解できず目を丸くする。

エーリカ

「えっ!?!?…あの…これどんな状況?」

ルッキーニ

「ってか…この人だあれ?」

一方、クリスと芳佳、サーニヤはラルクから少しだけ話を聞き、二人の関係も理解していた為か冷静だった。

クリス

「そういえばルッキーニとエーリカは会った事なかったっけな? こいつは俺の弟のラルク・レッドフィールド。今はこの病院の警備員として住み込みで働いてるんだ」

サーニヤ

「確か、シャーリーさんとは昔アメリカで同じ特殊部隊に所属してた仲だったんですね?」

エーリカ

「ええ!?!? クリスの弟!?!?」

ルッキーニ

「しかもシャーリーの元チームメイト!?!?」

エーリカとルッキーニがそれぞれ驚きの声を上げる。

ラルク



「というわけで…」

シャーリー

「久々に…」

すると突然、それぞれハンドガン…ラルクはH&K USP、シャーリーはコルト・ガバメントを取り出して、互いに銃口を向け合う。

芳佳

「な…なんかいきなり銃口向けあってるんですけどおおお!!」

クリス

「なにやってんだラルク!やめろ!」

ルッキーニ

「シャーリーも銃をしまつて!」

クリス達が止めようするが、二人はまったく動じる事無くそれぞれ相手のぶっ放した銃弾を避けながら、自分の銃を撃つ。

エイラ

「ゲッ!?これ実弾じゃん!?!」

クリス

「皆伏せろ!!」

クリス達が身をかめると、その上を二人の放つ銃弾が流れていく。やがて二人の銃が弾切れになり、彼らは銃を下ろした。

ラルク

「ヒュ〜！相変わらずいい腕してるなあシャーリーは」

シャーリー

「当たり前じゃん。そっちこそ士官学校入って前線から遠のいてたから、腕落ちてるかと思ったけど、全然変わってないなあ」

激しい銃撃戦の後とは思えないさわやかな会話にクリス達は騒然となる。

芳佳

「あの：シャーリーさん？今のはなんですか？」

シャーリー

「ああ、これ？これは私とラルクが昔所属してた部隊でやってた挨拶代わりみたいなものだよ」

クリス

「どんな挨拶なんだ：」

クリスが冷や汗をかきながらツツコんでいると：

バルクホルン

「い：いつまで上に乗ってんだ：お前らは：」

ペリーヌ

「大尉も早く降りてくださらないかしら……」

シャーリーがラルクに抱き着いた時も、『挨拶』と称した銃撃戦を繰り広げる間も、ずっと二人に踏みつけられていたバルクホルンとペリーヌが怒りを含んだ声で話す。

シャーリー

「あらら、2人共どうした？こんなところで寝ちゃって？」

ラルク

「誰かにやられたのか？」

バルクホルン

「お前達だ！！」

ペリーヌ

「貴方方にですわ！！」

恍けるラルクとシャーリーに二人のツツコみが飛んだ。

一方、坂本美緒の病室では：

政胸

「美緒姉え、ほんとに大丈夫？」

美緒

「ああ、すまなかったな政胸。余計な心配かけてしまつて…」

美緒は他のメンバーよりも怪我の具合が酷く、包帯だらけになりながらも、ベッドの傍で心配する政胸に気丈な笑顔を送った。

政胸

「でも美緒姉えが負けるだなんてしんじられないな。それに世界の

ストライクウィッチーズを全滅させるだなんて…」

美緒

「ああ、私だって信じたくはない…だがこうして固有魔法を奪われた事だし、今回の敗北は紛れもない事実だ…」

美緒は悔しげに語る。

政胸

「クリスや芳佳達から話を聞いたわ。美緒姉え達って金山企業を調査していたそうね？」

美緒

「ああ、元々あの会社は昔から黒い噂が絶えなかったからな。私達も調査はしていたのだが、昨年の夏に私達が滅ぼしたはずのネウロイが復活するという事件が発生してな…」

政胸

「そういえば、そんな事ニュースで言ってたわね」

政胸が見舞い用に持ってきたリングを、愛武器である六爪の内の一  
本で皮をむきながら話す。

美緒

「その時に北郷零斗という学生に協力してもらったんだ。まあ、実際はほとんど彼にネウロイを倒してもらったと言った方がいいかな」

詳しくは『BSAA学園！』本編の第十六話、第十七話を参照して

ください。

美緒

「その北郷から聞いた話で私達も本格的に金山企業に関する調査を行っていたのだが：おそらくそのせいで私達も向こうから目をつけられた：かもしれないな：」

政胸

「金山企業かあ：確かに奥州組もあることは結構昔っからドンパチやらかしてたからねえ」

そう言つて『ウサギ』型に切ったリングを美緒に差し出す政胸。

政胸

「金山企業って最近、不動産業にも手を出してきてね。そのせいか度々、奥州組の縄張り（シマ）を勝手に買収したり、許可もなくビル建てたりって、その度に野郎共引き連れて落とし前つけにいったわ」

美緒

「あの金山企業にか？勇氣あるな政胸」

政胸

「でもその度に、金山企業の取り巻きの暴力団の『後藤組』って連中がいつも邪魔してきて、結局会社まで殴り込めた事はなかったわ」

美緒

「後藤組か：聞いたことがあるな。確か金山企業から巨額の資金援助を受けてる代わりに、金山企業にとっての邪魔な存在を消して周

っているという暴力団…だったな…まさかそこが今回の501襲撃の…」

美緒はそう推測するが政胸は首を振って否定する。

政胸

「それはないわよ。いくらなんでも相手はただの暴力団よ。特別な力のあるような構成員がいる話も聞いたことないし、それにリーダーの後藤又兵衛はとんでもない小者と聞くわ。そんな連中にウィッチを11人も倒すほどの力があるわけがないわよ」

美緒

「そうか…だとすると一体誰が…」

美緒はそう言いながらリンゴを食べる。

政胸

「それより心配なのは、今の美緒姉え達よ。犯人が誰であれもし美緒姉え達が皆入院してるとって情報が金山に入ったらきっと金山の奴ら、何かしらの刺客をよこすはずよ」

政胸はそう言って美緒に忠告する。

美緒

「そうだな。取りあえず、しばらくは皆にもむやみに外へ出ないように忠告しないとな…それから本部に応援を呼んで警備兵を増加させて…」

美緒がそう言った時、政胸が得意げな笑みを浮かべる。

政胸

「Don't worry! その点は大丈夫よ美緒姉え」

美緒

「えっ!?!? どういう事だ?」

美緒が問いかけると政胸は徐に手を叩く。

政胸

「Come on guy! 皆入ってきなさい!」

政胸の言葉と同時に病室のドアが開いた。

すると部屋には『奥州組』と刺繍された革ジャンやTシャツを着たモヒカンやスキンヘッド、リーゼントなどの多彩な髪型をした男たちが次々と入ってきた。数は合わせて15人程。

彼らの半分以上は武器を所持している。

銃砲店で売っていそうなライフル、散弾銃、拳銃、そして日本刀。

さらに全員その腕や肩に見事な入れ墨が確認できた。

美緒

「政胸……一体これは……?」

政胸

「今日からこいつらに美緒姉え達の身の回りの世話と警備をさせるわ! 大丈夫! 全員奥州組の中でも特に優秀な『執事』達よ」

美緒

「いや! どうみてもこれ執事じゃないだろ! 全員明らかに極道の人達だよな!?!」

『執事』  
A

「お嬢様！なんでも申し付けてください！！」

『執事』  
B

「部屋の掃除しましょうか?！」

『執事』  
C

「パン買ってきましょうか!？」

『執事』 達は確かに忠実な態度だが、そのドスの聞いた声と、強面がすべてを台無しにしていた。

政  
胸

「じゃあ美緒姉え。誰にお世話してもらおう？」

美緒

「全員帰れええええー！！！！」

能天氣に聞く政胸に美緒が顔を赤くしながらツッコんだ。

その頃、都内某所：

『後藤組』事務所では一人の男がソファ―に座って携帯電話で話をしていた。

男

「了解しました。あとは我々にお任せください。鬼川様」

男…黄土色の短髪の青年はニヤリと笑いながら携帯を切ると、傍に





## 第7話 緊急事態！？SWの入院！（後書き）

突然始まったまさかのシリアス編！？

入院したストライクウィッチーズを狙って加富根総合病院にヤクザがやってくる！？

仲間のピンチにラルク&シャーリーの無敵のコンビが数年ぶりに復活！？

そして女族長 政胸の剣が炸裂！？

果たしてどうなる！？

クリス

「……って、元がギャグもののせいかな、あんまり緊迫感が出ないんだが……」

## 第8話 ラルクとシャーリーの華麗なる栄光（前書き）

今回はレベルアップしたエロ描写に挑戦…  
でもやっぱ書いてみると恥ずかしいいいいい！！

政胸

「アンタ思春期の中学生…？」

取りあえずエロ表現の苦手な方だけ注意してね。一応

## 第8話 ラルクとシャーリーの華麗なる栄光

夜：加富根総合病院の裏口には黒いベンツが何台も停車していた。そしてその車の近くでは50人程のヤクザ達が集結し、それぞれトカレフやマカロフなどの拳銃：

ドラグノフ狙撃銃やウィンチェスターM700などのライフル：ウインチェスターM1300やレミントンM870などのショットガン：そして日本刀などで完全武装を施した上で、円陣を組んで最終の打ち合わせをしていた。

その中心には組長である後藤又兵衛が、三日月刀を腰に下げて立っている。

又兵衛

「いいか。1番隊はロビーで病院の警備部隊を相手しな。2番隊、3番隊は俺と一緒に奴らの病室に殴りこみに行くぜ」

ヤクザ1

「組長。途中で邪魔されることになったら、どうするんです」

又兵衛

「決まってるんだろ。抵抗する奴は誰であれ殺しちまいな。後始末はすべて鬼川様が引き受けてくださるそうだ」

ヤクザ2

「そりゃ感謝感激っスね。じゃ遠慮なく暴れますか」

ヤクザ3

「ところで、ストライクウィッチーズにもしも反撃された時には？」

又兵衛

「そんな時は、『先生』を呼べばいい話だ。態々高い金で雇ってるだけあるからなあ」

又兵衛はそう言うのと不気味な笑みを浮かべる。

又兵衛

「いいか。今回の仕事が成功すれば鬼川様から巨額の報酬と共に、金山企業の進めている土地開発事業の一部をこの後藤組に提供してくれるそうだけ」

ヤクザ

「ヒュウ〜〜！ そうなればウチの組も安泰ですね！」

又兵衛

「そうだとも！ その為にもしっかり働けよ。いいなあ！？」

ヤクザ達

「オス！！！！」

気合を入れたヤクザ達は後藤を先頭に、病院の正面玄関へと向かった。

一方、その頃、ストライクウィッチーズの病室では：

ラルクの派手な登場でひどい目に遭わされたバルクホルンとペリーヌは不機嫌な表情で、先ほどよりもさらに包帯を増やした状態でそれぞれのベッドの上で立腹していた。

ラルク

「まあまあ、そんなに怒らないで。まったく誰がこんなひどい目に  
…」

バルクホルン

「お前だ！」

ヘラヘラと笑いながらボケるラルクに冷やかにツッコむバルクホルン。

ペリーヌ

「まったく！出来が悪い兄がいれば、弟はさらにその上を行ってま  
すわね！」

クリス

「おいペリーヌ。それどういう意味だ？（怒）」

ペリーヌの言葉にちよつと怒り気味になるクリスだが、ラルクは全然  
然気にしている様子はない。

ラルク

「それにしてもゴメンなシャーリー。兄貴からお前が横浜に赴任し  
てるって聞いてから一度顔出そうと思ってたのに、なかなか暇がな  
くてな…」

シャーリー

「いいよそんなの。私達だって任務で忙しかったんだから普通に会  
いにきたって会えなかった筈だし」

ラルク

「おやまあ、大尉殿は多忙ですか…しかし、お前が大尉とはビックリだぜ」

シャーリー

「ビックリしたのはこっちの方だぞ。だって士官学校やめたって聞いたんだから。」

もったいないなあ、ラルクなら絶対SOCOM（アメリカ特殊作戦軍）辺りの将校に就けるくらい優秀なレベルなのにさあ」

親しそうに会話を弾ませるラルクとシャーリー。  
それを見てクリスが二人に問いかける。

クリス

「なあ、気になったんだが…そもそもお前達の同期だった時代ってどんなだったんだ？」

芳佳

「それ…私も知りたいです」

サーニャ

「私も…」

リーネ

「私も興味あります」

ルッキーニ

「私も知ってた…いい！」

エーリカ

「教えてよシャーリー」

エイラ

「なんか想像はつきそうだけどな…」

一同から懇願され、たじろぐラルクとシャーリー。

ラルク

「ちょ…ちよつと待てって皆」

シャーリー

「わかったわかった。教えてやるからそんなに詰めるな」

ラルク

「えっと…じゃあ、どつから話そうかなあ…」

そしてラルク達は話し始めた。

## 回想

アメリカ コロラド州・米軍兵士育成所

ラルクは米軍入隊直後にとある試験部隊に所属する事となった。そして、その上官となった人間こそ、あのガイル中佐であった。

ガイル

「いいか！お前達は今日から『軍隊』という大きな盾を構成する一員であると共に、人間としても常に民間人の先に行く人間でなければならぬ！よってお前たちには陸・海・空すべての軍の規則、技能、そして戦術をレクチャーし、この試験部隊の任期終了時にはど



の部署に入っても申し分がない程の戦闘のプロになるんだ！その為に俺が徹底的に鍛え上げるつもりなので、覚悟しておけ！」

兵士達

「Yes sir！」

ラルク

「おいおい徹底的に鍛えるのかよ…大丈夫かな俺？」

一人不安になるラルクに一人の女兵士が話しかけてきた。

シャーリー

「どうした？お前も不安なのか？」

ラルク

「ま…まあな。アンタは不安じゃないのか？」

シャーリー

「私も正直不安だね。あのガイルって人相当頭固いって有名ならしいから」

シャーリーはそういうとラルクに耳打ちで話してくる。

シャーリー

「でもさあ、ガイル中佐の頭ってどうなってんだろうな？どうやったらあんなブラシの毛みたいな髪型になるんだろ？」

ラルク

「さあ、でもあれって『ジ○ジ○』のポル○レフに似てないか？」

シャーリー

「ああ。確かに言われてみれば…」

そう言って笑いあう2人にガイルが目を付けた。

ガイル

「こら！その二人！！何私語をしているんだ！？」

ラルク・シャーリー

「「す…すみません！！」」

ガイル

「俺の話を聞かずに私語とはいいい度胸だな！二人とも罰としてグラウンドを10周！」

ラルク・シャーリー

「「い…Yes sir！」」

こうして配属早々に罰を与えられた2人。

2人は走りながらも会話を続ける。

シャーリー

「ごめんな…あたしのせいで巻きこんじゃって…」

ラルク

「気にすんなよ。おかげで俺の不安もなんか楽になったみたいで、逆によかったよ」

バツの悪そうに謝るシャーリーを笑って許すラルク。

シャーリー

「へへへ：ありがとな。え〜とアンタは：」

ラルク

「ラルクだ。ラルク・レッドフィールド」

シャーリー

「あたしはシャーロット・E・イエーガー。気楽にシャーリーって呼んでよ」

ラルク

「そっか。よろしくなシャーリー」

シャーリー

「こっちこそな。ラルク」

## 現実

ラルク

「それから俺達と一緒にいる事が多くなって、いつの間にか隊内では相棒パディになってんだ」

シャーリー

「それからあたしはウィッチとしての訓練を、ラルクは陸戦兵としての訓練を受けてたんだけど、ある事件で私達コンビの知名度は大きく変わったんだよなあ：」

## 回想

南米・コロンビア

反政府ゲリラとの戦いでとある戦地にて、米空軍の戦闘機編隊の支援に向かったシャーリーだったが、ゲリラたちの壮絶な猛攻撃を受けて味方が全滅。

シャーリーはただ一人、空・陸双方からの攻撃を耐えていた。

シャーリー

「クソ！友軍機は全滅してるし、近くに応援で来られるウィッチもいない！このままじゃあたしも…」

必死に固有魔法の超加速で飛び回り、隙を見て、武器のM134ミニガンを放つが、それでも敵の攻撃はやむことがない。

シャーリー

「うっ…もうだめか…」

シャーリーが諦めかけたその時…

ラルク

「シャーリー！！」

シャーリーの飛行する真下の敵の陣地に突如一台のハンヴィーが乱入する。

そこから出てきたのは銃器で完全武装したラルクだった。

シャーリー

「ラルク！？」

ラルク

「シャーリー！助けに来たぞ！！」

ラルクは車から降りると、すぐさま手に持っていたサコーM60軽機関銃を地上のゲリラ達に向かってぶっ放す。

ゲリラ1

「ぎゃあ！？」

ゲリラ2

「ぐええっ！」

今まで上空のシャーリーばかりを狙っていたゲリラ達は突然のラルクの乱入に不意を突かれ、ほとんど抵抗もできずに倒れていく。

ラルク

「ロックンローラー！！」

某ゾンビ漫画のミリオタのような決め台詞と共に今度は背中に背負っていたスコップ付きのG3アサルトライフルを取り出して遠方のゲリラを狙撃する。

シャーリー

「ラルク！大丈夫か！？」

ラルク

「へっ！大丈夫だけど、これは帰ったらガイル中佐から派手にお説教されちまうな！」

ラルクはそう言いながら、降下してきたシャーリーに二丁のM4ライフルを投げ渡す。

ラルク

「使え！弾薬も十分持ってきた！！」

シャーリー

「ラルク：ありがとな！」

シャーリーは礼を言うといミニガン捨てて、新たにM4ライフルを二丁持ちで構える。

するとそこへゲリラ達の応援の兵員を乗せたトラックが近づいてくる。

ゲリラ3

「くそ米兵野郎め！絶対に殺してやる！！」

ゲリラ4

「こっちは武器の数も人数も圧倒的に上だ！たかが一人の兵士と一人のウィッチに負けるわけねえ！！」

トラックはラルク達めがけて迫ってくるが…

シャーリー

「お前らなんかにやられてたまるかあ！！」

シャーリーが高速で飛行して一気にトラックの下に迫り、M4ライフルを使ってゲリラ達を掃射する。

ゲリラ達

『にぎゃあああああ！！』

ゲリラ達はあっという間に壊滅し、トラックも爆発して吹き飛んだ。

シャーリー

「さあ！ 一気に反撃だあ！！」

ラルク

「おう！ 援護は任せろ！！」

こうして2人はそれからわずか1時間で総勢5千人の反政府ゲリラ勢力をほぼ全滅に追いやったのだった。

この事件によって一気にラルクとシャーリーの名前は米軍中に広がり、シャーリーは『グラマラスシャーリー』ラルクは『ヒューマンウェポンラルク』とそれぞれ異名を得て恐れられるようになった。

現実

シャーリー

「その時をきっかけにアタシとラルクは隊内でも1、2を争う最強空陸コンビとして名を馳せるようになり、ガイル中佐からも一目置かれるまでになったのさ」

それからも二人の武勇伝は語られ続けた。

回想

中東で国際テロ組織の末端部隊との戦闘した際には…

ラルク

「うおりゃあああああああああ!!」

ラルクが地上に設置された高射砲を操作して、敵要塞に銃弾を撃ち込み敵軍を混乱させ…

シャーリー

「でりゃあああああああ!!」

その隙にシャーリーが上空から敵要塞を機銃掃射して、敵要塞を陥落させた…

北欧某国でその国の反政府勢力とPKF（国連平和維持軍）との紛争地帯に派遣された際には…

ラルク

「覚悟はいいかシャーリー？」

シャーリー

「上等だよ。ラルク」

二人は背中を合わせて互いの奮闘を誓い合うと、30台近くの敵戦車部隊に2人で夜襲を決行し、結果戦車部隊壊滅…

アフリカ・ソマリアの海賊鎮圧活動に赴いた際には…



ラルク

「シャーリー！あの海賊船の甲板を狙って俺を投下してくれ！」

シャーリー

「わかった！せーの…それ！」

ラルクを抱えた状態で、敵海賊船を追跡していたシャーリーが、ラルクの合図で彼を海上に行く海賊船に向けて投げ落とす。

そしてパラシュートで無事海賊船の甲板に降下したラルクは一気に船内の海賊達を一掃した…

そして部隊の宿舎内にある二人のベッドルームでは…

シャーリー

「はあ！…はあ！…ら…ラルクう！…きよ…今日のお前は『撃ち過ぎ』だぞお！」

ラルク

「バカ野郎！こんなんでへばってどうすんだあ！今日はあと3発はいけるぞ！…つというわけで次はその特大の胸を揉ませながらやらせろお！」

シャーリー

「あああん！ラルクのケダモノお〜！」

カーテンで覆い隠されたベッドの中で、シャーリーの『的』に向けて自前の『機関銃』を放つラルク…

現実

ラルク

「そして仕上げにシャーリーの口に俺の『トマホークミサイル』を…」

クリス

「ラルクウウウウウウウ！！！」

最後の武勇伝を話すラルクを怒鳴りながら制止するクリス。

ラルク

「なんだよ兄貴！？せつかく話の山場を…」

クリス

「話さんでいい！つか！最後のは明らかにただの濡れ話だろ！！！」

芳佳

「じゃ…シャーリーさんが…そんな過激な事を…」

真っ赤になった顔で茫然とする芳佳。

するとサーニヤがとんでもないことを言い出す。

サーニヤ

「く…クリスさん…私もクリスさんの『フリーガーハマー』を是非この口に突っ込んでもらいたいです…／／／」

エイラ

「サーニャ！何破廉恥な事を軽々しく言ッテンダヨ！」

エイラが顔を赤くしてサーニャにツッコむ。

ルッキーニ

「ねえねえ。ラルクの『トマホークミサイル』ってどんな大きさなの？」

クリス

「お前は何とんでもない事聞いてんだあ！？」

ラルク

「じゃあここでお披露目しようか？」

クリス

「したら問答無用で警察突き出すぞ！」

ルッキーニとラルクのダブルボケに電光石火でツッコむクリス。

シャーリー

「まあまあクリスそのくらいで…。とにかくそんなわけで私とラルクの二人で1年の間に様々な戦火を上げて、いつの間にか米軍内では伝説のコンビになったってわけなんだ」

ラルク

「それから試験部隊の任期が終わるとシャーリーは米軍の代表としてストライクウィッチーズに転属となり、俺は将校になる為に士官学校に入学した…そして以来会ってなかったってわけだ」

エーリカ

「ふうん。でもそんなにすごいんなら見てみたいなあ。2人がコンビ組んで戦う姿」

ラルク

「ハハハ。まあ今すぐ戦争か暴力団の抗争でもあれば見せてやれるかもなあ」

リーネ

「ラルクさん。それは流石に…」

リーネがそう言いかけた時、ラルクの携帯電話が突然鳴る。

ちなみに着信音は『STRIKE WITCHES 2』笑顔の魔法』である。

芳佳

「自分達のテーマソングが着信で流れるのってなんか複雑な気持ち…」

芳佳の言葉を尻目にラルクは電話に出る。

電話の相手は警備隊仲間の魔理沙からだった。

ラルク

「おお魔理沙。どうした？」

魔理沙

『どうしたじゃねえよ！緊急事態だあ！なんか『後藤組』とかいうヤクザ共が行き成り銃や刀持って押しかけてきたんだ！！』

ラルク

「な…なんだって!?!」

ラルクは思わず大声で叫ぶ。

その声に、クリスや芳佳達部屋にいた全員が何事かとラルクの方を向く。

よく聞いてみたらスピーカーからは悲鳴や銃声、そして男達の怒鳴り声などが聞こえてくる。

魔理沙

『さらにマズイ事に、連中の狙いは今ここに入院してるストライクウィッチーズらしいんだ!』

ラルク

「ええーーーーー!?!」

ラルクは更に驚く。

ラルク

「そ…それで今はどうなってる!?!」

魔理沙

『アベル隊長達が必死に足止めしようとしてんだけど、奴ら50人くらいの大人数で押しかけて来やがって…』

とても全員は足止めしきれずに、何人かは既に病棟のある上層階の方に向かっちゃった!』

ラルク

「ウソだろ!?!」

魔理沙

『ウソじゃねえよ！この目で見たんだから！とにかくこっちの連中を片づけたら応援よこすからそれまで何とかストライクウィッチーズを護衛してくれ！頼むぞ！！』

ラルク

「あっ！？…おい！魔理沙…」

ラルクが言い切る前に魔理沙は電話を切ってしまった。

シャーリー

「何かあったのか？ラルク？」

ラルク

「ああ…とんでもない緊急事態が起きちゃった…」

ラルクはクリスや芳佳達に、『後藤組』と名乗るヤクザ集団が襲撃してきた話を話した。

これを聞いたクリス達は、当然の事だが驚く。

バルクホルン

「ヤクザ！？何故そんな連中がここに！？」

エーリカ

「しかもわたし達を狙ってるの！？」

リーネ

「一体何の為に！？」

ラルク

「さあな。とにかくもう既に、何人かはこっちに向かってきてるらしいんだ」

芳佳

「そんな…」

エイラ

「ど…どうするんだよ大尉!？」

エイラはここにいる面々の中で一番階級が上のバルクホルンに指示を煽る。

バルクホルン

「決まっている! ヤクザなんかに出し抜かれてたまるか! 皆で返り討ちにしてやれ!!」

エーリカ

「で…でもトゥルーデ! 私達こんな怪我してるし、それに固有魔法だって奪われちゃってるんだよ。どうやって戦うの?」

エーリカはバルクホルンの命令に戸惑うが、バルクホルンは自身気に答える。

バルクホルン

「バカ者! 何の為にここまで訓練してきたんだ!? 魔法が使えないくらいでヘコたれる我々ではない! それに相手はただのヤクザだ! ネウロイに比べたらたやすい相手だろ!」

エーリカ

「そ…そうかなあ…?」

バルクホルンの熱血な宣言に若干引き気味の一同。

ペリーヌ

「でも武器はどうするんですの？ここは病院ですし、ろくに武器など置いてないでしょうから…」

ラルク

「いや…ある…」

だがペリーヌの言葉にラルクが自信に満ちた表情で答える。

ラルク

「武器なら心配すんな。ここには十分あるぜ」

ラルクはそう言ってニヤリと笑った。



## 第8話 ラルクとシャーリーの華麗なる栄光（後書き）

魔女VSヤクザの全面戦争勃発！？

前代未聞のバトルとギャグに満ちた闘争が幕を開ける！

そしてついにあの『悪魔も泣き出す男』も参戦か！？

**第9話    F i t s   t h e   s t r i k e s   b l o o d   i n   h o s p i t**

charley「皆さん！一か月以上もほったらかしにして本当にすみません！」

ラルク「どうすんだよ！？本編じゃもう京都編入って、しかも次の話では俺が登場するフラグも立ってんだぞ！！」

政胸

「私達と龍の骨に謝れ！このバカ作者！」

charley

「お：お怒りごもっとも！だからここ数日で一気に連載して本編と時系列合わせるつもりだから！」

## 第9話   **F i t s   t h e   s t r i k e s   b l o o d   i n   h o s p i t**

美緒の病室。

ラルク達が後藤組の殴り込みを知った頃…

政胸の寄越した蔵つい『執事』達を帰らせた美緒はというと…

美緒

「ええい！くそ！これでどうだ！政胸！」

政胸

「フン！やるじゃない！でも…これでどうかしら！？」

病室内に設けられたテレビでP S 3『MARVEL VS. C A  
P C O M 3   F a t e   o f   T w o   W o r l d s』を熱心に  
プレイしていた。

ちなみに今政胸はゲームの中ではスパイダーマンを、美緒はクリス  
を選んで戦っているところであった。

政胸

「やったあ！私の勝ちー！」

美緒

「ああ！？おい政胸！いきなり蜘蛛の糸を飛ばす必殺技なんて使う  
など卑怯だぞ！」

政胸

「美緒姉えこそ、いい加減に技覚えたら？」

二人は子供じみた言い合いをしながら、呑気にゲームに夢中である。  
つとそこに：

良直

「筆頭！大変です！」

先程政胸が『執事』として連れてきた一人である奥州組の構成員の  
一人：リーゼントと豪面が特徴の男 良直が慌てた様子で病室に駆け込んできた。

政胸

「なによ良直。折角、今美緒姉えに8連勝したところだったのに…」

良直

「それどころじゃねえんです！敵襲です！下に後藤組の奴らが50人くらいの大勢で…」

政胸

「Ah？なんですって？」

美緒

「後藤組だど！？ってことは金山企業からの差し金か…くそ！相変わらずなんて手回しの早い連中だ…！」

政胸

「それより美緒姉え！早く他の皆に知らせないと！ちょっと良直！アンタ小十郎にも知らせは出したでしょうね？」

良直

「はい。片倉様には文七郎に連絡させてますが…」

政胸

「だったら早くウチの主要部隊全員連れてくるように伝えなさい！  
V e r y   s o o n !」

良直

「りよっ…了解です！」

そう言って良直が部屋を出ていくと、政宗は椅子に置いてあった六爪を…

美緒は机の下に隠していた烈風丸を手取る。

美緒

「己…ヤクザ風情が舐めた真似をしてくれるな…」

政胸

「美緒姉え…怪我してんだから無茶はしないでよね」

美緒

「わかつている」

政胸は美緒に忠告しながら六爪を腰に構える。

政胸

「久々に、手荒れな s t a g e になりそうね…」

一方、ラルク達は後藤組迎撃用の武器を確保する為、429号室へと移動していた。



ラルク

「まあ、皆入ってみろ。すごいから」

ラルクに促されて隣室に足を踏み入れる一同。

そして中の様子を見て、先ほどよりさらに驚愕する事になる。

部屋の中には隙間なく飾られた銃火器コレクションの山があった。

机の上に並べられた無数の拳銃：

壁に立てかけられた数えきれない程のライフルにショットガン：

さらにはミニガンにロケランまで当たり前のように部屋に貯蔵されている。

そしてそれらの武器の弾薬もすべてそろって箱の山となって積みまわっていた。

その数はもはやガンショップを通り越して軍の兵器貯蔵庫のようである。

クリス

「ら：ラルク！？お前：この武器弾薬は一体なんだ！？何時の間にこんなに集めて：しかもここ確か病室だったはずだよな！？なんで！？」

ラルク

「警備員として病院の治安維持に備える装備を貯蔵する為に場所がほしいって頼んで無理やり空いていた病室を改造したんだよ。ちなみに武器は一部兄貴からの仕送りや兄貴の貯金を下ろして買い揃えたんだ」

その言葉を聞いて仰天するクリス。

クリス

「なんだと！？お前俺の仕送りでこんなの買ったのか！？つーか最近貯金が使った覚えのないにくらか下ろされてたの、あれお前のしわざだったのか！？」

ラルク

「ちなみに一部の装備は取り寄せで買ったけど請求は全部兄貴持ちにしたからよろしく♪」

クリス

「ラルクうううううううううううううううううう！！」

クリスが怒鳴りながらラルクに殴り掛かろうとして芳佳、リーネ、サーニヤに抑えられる。

クリス

「放せええええええ！！この大馬鹿野郎に一度死に目を見せてやるううう！！」

芳佳

「クリス君！気持ちわかるけど落ち着いて！！」

リーネ

「今はそれどころじゃないですって！！」

サーニヤ

「話は後藤組を倒してからにしましょう！」

クリスはしばらく怒り狂っていたが芳佳達の説得でようやく怒りを鎮めた。



しかしラルクに「あとできっちり話しつけるからな」と釘を差していたが…

その頃、ミーナはというと…

ミーナ

「変ねえ…看護師さんや他の患者さん達が誰もいなくなったわ」

美緒と同様一人個室を与えられていたミーナは、後藤組が襲撃してきた事を唯1人知らないでいた。既に患者、スタッフ全員逃げ出した後の廊下を歩き、人を探して辺りをキョロキョロと見回すが、辺りはもぬけの殻だ。

ミーナ

「取りあえず、美緒や皆を探さないで…」

そうつぶやき、廊下を歩くミーナを物陰から伺う2人のヤクザ達。

ヤクザ1

「あれがストライクウィッチーズの隊長か…フン！魔力もなくして怪我の身の今なら楽にやれるぜ」

ヤクザ2

「待てよ。あいつは組長が殺るって言ってたから、殺さずに組長の所へ連れて行け」

ヤクザ達はそう話し合うと、スタンガンを取り出してゆっくりとミーナに背後から近づいて行った。

その頃、ラルク達はどうと…  
49階へやってきた後藤組のヤクザ連中と早くも激しい攻防戦を繰り広げていた。

49階 エレベーターホール  
そこではラルク、シャーリー、リーネ、ルッキーニの4人がヤクザ達の侵攻を防いでいた。

ラルク  
「派手に行くぜ!!」

ラルクが某戦隊ヒーローの主人公の台詞を言い放ちながらH&K G36C アサルトライフルをぶっ放して、ヤクザ達を柱や障害物の陰に追い詰める。

シャーリー  
「おお! 乗ってるねえラルク!」

シャーリーが横からそう言ってM134ミニガンを構えて無痛弾幕チェインを放つ。

リーネ  
「ねえ、ルッキーニちゃん! 私達って怪我した身体休める為にここに  
いるんだよね!?!」

ルッキーニ

「そうだよ！それがどうかした？リーネ」

リーネ

「私達なんで入院先で銃撃戦やってるのおおおー！ー！ー！？」

彼らの傍で対戦車ライフル バレットM82で狙撃しながらリーネが悲痛な叫びを上げる。

ルッキーニ

「いいじゃん！ベッドで寝てるだけより面白いし！」

一方のルッキーニはむしろ楽しそうにスパス12ショットガンを乱射する。

ラルク

「安心しろリーネ！下手したら雲の上の花畑みたいな場所で永遠に身体休める事ができるぜ！」

リーネ

「ってそれ死んじゃってるじゃないですか！？」

シャーリー

「安心しろ！死んだら私とラルクで死体の処理はしてやるから！」

リーネ

「しなくて結構です！っていうか死にませんか！」

ラルク達そんなブラックジョークのやり取りをしていると：

ヤクザ3

「くそ！おい！アレ持つてこい！」

ヤクザ達が突然、隠れていた物陰から、ラルク達の方に目掛けて巨大な筒状の武器を構えてきた。  
それを見た途端にラルクの表情が一変する。

ラルク

「！？ステインガーだ！」

ラルクが怒鳴ると、シャーリー達は慌てて後ろに後退し始めた。  
いつもなら魔力シールドで攻撃を防げるが、魔力を大幅に失っている今の彼女達に魔力シールドを張れる力は残っていなかった。

そして、ステインガーミサイルがラルク達に向けて発射される。  
「やられる…」っとラルク達があきらめかけた時。

????

「バーニングダンス！」

突然、ラルク達の背後から黒いスーツを着た長身の女性が飛び出して、飛んでくるステインガーミサイルに、炎を纏ったとび蹴りを食らわせてその場で大爆発させる。

ラルク・シャーリー・リーネ・ルッキーニ

「「「！！！」」」」

爆炎が立ち込める中、女性は今々とヤクザ達を炎や電撃を纏った格闘技で叩き伏せる。

ルッキーニ

「だ…誰あの人…？」

シャーリー

「あの武器を仕込んだスーツ…もしやアイツは!？」

そうそれは、あの『ミズ・パーフェクト』の異名を持つスーパーエージェントの…

バルクホルン

「そう! 私こそクリムゾン・バルクホルンだ! アハハハハ!」

リーネ

「ば…バルクホルン大尉いいい!？」

思わず拍子抜けしてずっとこけるリーネ。

なんとそれはCヴァイパーのコスプレ姿をただけのバルクホルンであった。

シャーリー

「バルクホルン…アンタなにやってんの？」

ルッキーニ

「なんか変…」

まさかのバルクホルンのキャラ崩壊に、さすがのシャーリーやルツキーニもドン引きする。

ラルク

「うんうん。なかなか様になってるぞバルクホルン」

シャーリー

「えっ！？あの戦闘スーツってラルクがあげたもの？」

ラルク

「そう。以前S・I・Nって軍事企業の武器庫に盗みに入った時にあれと同じのが何着も置いてあったのを見つけて、気に入ったから一着パクってきたんだ」

リーネ

「それ犯罪じゃないですか!？」

当たり前のように説明するラルクにリーネが仰天しながらツッコむ。

ラルク

「現地調達と言ってくれよ。ちなみにもう一種類調達したものがあつたんだが…」

そう話しているラルク達の前にペリーヌがもじもじときこちない姿で歩いてくる。

リーネ

「あっ！ペリーヌさん無事で…!？」

シャーリー・ルッキーニ

「「!？」」

ペリーヌの方に顔を向けたリーネとシャーリー・ルッキーニ言葉を失う。

なんとペリーヌの衣装はいつもの青い服とパンスト姿ではなく、緑色のレオタード姿であった。

これはまるで…

ラルク

「そう！これこそペリーヌ改め、ペリミィ…」

ペリーヌ

「フリーガンスープレックス！ですわ！」

ラルク

「ぎゃあああああああああ!!」

悪戯っぽく紹介するラルクに、顔を赤くしながらバックドロップを放つペリーヌ。

ペリーヌ

「なんで大尉だけでなく私までスト？のコスプレをしなくちゃいけないのですの!？ってかこの服露出度が高過ぎですわ！こんなの普通平気で着る人なんていないでしょ!？」

ラルク

「いいじゃん。所謂中の人ネタってもんだ。ダメか？」

ペリーヌ

「駄目に決まってますわ!!」

ペリーヌは今自分が着せられているキャミイのコスプレに不満を吐く。

ちなみにその頃…

キャミイ

「ハックシュン!なんだ…今ものすごく誰かに貶された気分だ…」

当の本人は大音量のくしゃみをして、無意識に苛立ちを覚えていた…

政胸

「ラルク!」

美緒

「皆!無事か!?!」

ラルク達がペリーヌ達の衣装の事で雑談をしていると、六爪を構えた政胸と軍刀 烈風丸を構えた美緒が駆けつけてくる。

ラルク

「おお政胸!よかった!手伝ってくれ!」

政胸

「Hu~!もう既に派手に暴れちゃってるわね」

シャーリー



「!?!?…ちよつとラルク!? 誰この女!?!」

ラルク

「えっ!?!? ちよ…なんでちよつと不機嫌になってんのシャーリー!?!」

ラルクは、政胸と初対面したシャーリーから何故か問い詰められる。

美緒

「おい、ペリーヌ? バルクホルンもなんだその恰好は?」

ペリーヌ

「キヤアアア! 見ないでください少佐!」

バルクホルン

「違う! 今の私はクリムゾン・バルクホルンだあ!」

美緒

「はあ?」

美緒は美緒で、キャラ崩壊したバルクホルンと何故かキャミイのコスプレ姿であるペリーヌに啞然としていた。  
なんとも緊迫感の無い風景である。

ヤクザ3

「おい! 何テメエらだけでわいわいやってるんだよ!?! 俺達を無視するなああああああああ!?!」

ヤクザ達は自分そっちのけで話が進んでいるのが気に入らないらしく、トカレフ拳銃や刀を振りかざしながら怒鳴る。

政胸

「H a ~ n ? うるさい連中ね…そんなに私の剣を受けたいって言うのかしら？」

政胸はニヤリと笑みを浮かべながら、六爪を構え：

政胸

「さあ！私のd a n c eについてこれる奴はいるかしら！？ L e t  
, p l a y d a n c e ! ! 」

ヤクザ3

「生意気な小娘が！者共やっちまえ！！」

ヤクザ

「「「「うおおおおおおおおお！！」「」「」」

ヤクザ達柱の陰から次々姿を見せて、政胸向かって刀をかざして突撃してくる。

政胸は六爪の先から電流を放ちながら向かってくるヤクザ達を前に身構える。

政胸

「奥州組筆頭！伊達政胸！推して参る！」

政胸は力強く名乗りを上げると：

政胸

「Y a a a a a a a h a a a a a a a a a a a a ! ! 」

電流を纏った六爪を大きく振り、電撃の付いた衝撃波がヤクザ達を一気に吹き飛ばす。

政胸

「続けて…HELL FANG!」

腕を交差させるように振って、ヤクザ達を数人まとめて斬り。

政胸

「JET X!」

ヤクザ

「「「ぐはあああああああああああ!!!!」」」

拳銃や散弾銃を構えてくるヤクザには光弾をお見舞いして次々とヤクザ達を一掃していく。

リーネ

「政胸さん…なんか気合入ってるっていうか殺気立ち過ぎじゃないですか?」

ラルク

「まあ、この作品、1か月以上もほったらかしにされてたからストレス溜まってたんだろ」

ラルクさん、メタ発言はやめてください…

美緒

「ハッハッハ!さすがは片倉先生に鍛えられていただけあるな。相変わらずいい腕だな政胸。だが…」



美緒

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

ヤクザ

「「「「ひいいいいいいい！！お助けえええええええええええ！！」」」」

もはや敵味方関係なく、この戦場は政胸と美緒の solo stage に変わった…

2分後…

ラルク

「っという事であっという間にここにいたヤクザ連中は全滅しちゃいましたけど…」

ラルク達が啞然とする前には山のように折り重なったヤクザ達の姿があった。

バルクホルン

「くそ！もっと私も任務を遂行したかったのに…」

ペリーヌ

「大尉はいろいろと問題ありますからこれ以上その姿で戦わない方がよろしいですわ！」

ルッキーニ

「なあんか初めから二人にやってもらえばよかったかも…」

リーネ

「ってか坂本少佐。怪我してるって設定思いつきり無視しちゃってるんですけど…」

シャーリー

「（なんなのよあの女…私のラルクに手は出させないぞ…）」

様々な思考を抱くリーネ達の前では、政胸と美緒がまだ斬り足りないと言わんばかりに身体を伸ばす。

政胸

「なによ。ヤクザの襲撃って聞いたからどんなかと思ったたら大した事ないわね。小十郎との手合せの方がよっぽどc o o 1になれるわ」

美緒

「まったくだ。501の実戦訓練の方がまだ手ごたえを感じられるな」

ヤクザ4

「お……お前ら……どんな…訓練…してんだ……ガクッ！」

不満げに話す政胸達にヤクザの一人が虫の息になりながらツツコンで気絶した。

リーネ

「でもこっちの方はもう大丈夫みたいですわね」

ラルク

「だな。さっき魔理沙や隊長から連絡があってロビーのヤクザ共も

始末したらしい。あとは兄貴や芳佳ちゃん達とミーナさんを迎えに行ったエーリカだけど…」

エーリカ

「えっ！？ わたしがどうかしたの？」

シャーリー

「いや、だから中佐とお前が……えっ!？」

エーリカの声にシャーリーが一瞬答えようとして、すぐに硬直する。

シャーリー

「ハルトマン！？あんた中佐連れてきてたんじゃなかったの？」

エーリカ

「えっ！？ミーナ？知らないよ。だって私ずっと別の場所でヤクザ片づけてたもん」

エーリカのこの言葉に全員の血の気が下がる。

ラルク

「なに！？じゃあミーナさんはまだ後藤組の襲撃を知らないって事か！？」

美緒達

「ええええええええええええええええ！？」

ラルク達は悪い予感を感じ、すぐさまミーナの病室へと向かおうとした。

そこへラルクの携帯電話が鳴る。

電話の相手はクリスだった。

ラルク

「もしもし兄貴！今俺達忙し…」

クリス

『大変だラルク！ミーナが後藤組のやつらに捕まった！』

ラルク

「！？…マジかよ！？それで連中は今どこに！？」

クリス

「それが、大体の雑魚はこっちも片付けたんだがどうやら連中、それで自分達に勝機がないと判断したのか、屋上からミーナを人質に逃亡する気らしい！」

サーニヤの話だと窓から、病院に近づいてくる金山企業のヘリを見たらしいからおそらくそれで逃げるつもりだ！」

ラルク

「OK！すぐに俺達もそっちに向かうぜ！」

ラルクは電話を切るとすぐに屋上へ続く非常階段へ向かって駆け出した。

その頃、屋上　ヘリポートでは、ミーナが体を縛られて身動きが取れない状態のまま、自分をここまで連れて来た男達を睨みつけていた。



ミーナ

「な、何なんですかアナタ達は！？私なんて攫ったって何もありませんよ！」

又兵衛

「黙りな小娘！本職は隊長だか知らねえがここでは人質の身なんだ！おとなしくしてろ」

叫ぶような口調で話す、後藤組の組長 後藤又兵衛。

ミーナ

「アナタ……もしかして金山企業の者！？」

又兵衛

「半分正解半分間違いだねえ！俺達は金山企業のあるお方からの直々の命令で動いているのさ！」

又兵衛はミーナを見下しながら不敵に笑う。

すると又兵衛の部下のヤクザがミーナに下衆な視線を向けながら話しかけてくる。

ヤクザ5

「しかし組長、この女生け捕りにしちゃいましたけど大丈夫ですかねえ？鬼川様は全員『抹殺』しろって命令したんでしょ？」

又兵衛

「しょうがねえだろ！どいつもこいつもヘマばかりして返り討ちにあったりしたから作戦Bに移行するしかなかったんだよ！」

ヤクザ6

「しかし逃げ切れても後が怖いっスよ。作戦失敗して救助用のヘリまで要請しちゃって…鬼川様になんて言われる事か…」

ミーナは又兵衛達の会話の中で出てきた金山企業の重役 鬼川の名を聞き、落ちついた様子で思い切って彼等に質問する。

ミーナ

「鬼川！？まさか501の基地を襲ったのも鬼川のしわざ！？」

又兵衛

「デメエがそれを知る必要はねえんだよ！しばらくそこで大人しくしていな！もうすぐ迎えがくと思うぜ」

ヤクザ5

「ねえ組長、せっかくですしヘリが来るまでこの女…少し味見してていいですか？」

ミーナ

「……！！」

とっさにミーナは身の危険を感じて、足を引っ込める。

又兵衛

「フン、そうだな。どうせこの女は俺達が無事逃げ切ったらさっさと始末しちまう事だし…いっちゃやるか。その代わり一番最初は俺にやらせろよ」

すると又兵衛達は複数でミーナの周りを取り囲んだ。

ミーナ

「い…いやあ!!」

又兵衛

「まあまあそう怖がるなよ、すぐに天国に昇らせてやるから!」

そう言ってじりじりとミーナとの距離を詰める又兵衛達。

そしてミーナはこれからされるかもしれない恐ろしい出来事を想像して思わず涙ぐむ。

ミーナ

(いや……! 誰か! 誰か助けて……!)

そのまま現実から逃げるように目をぎゅっと瞑るミーナ、その時……

《ドギユンドギユンドギユン!!》

ヤクザ

「「「ギヤア!」」」

突然、数人のヤクザの胸に弾丸が命中して倒れ付す。

ミーナ

「!?!」

又兵衛

「だ…誰だ!!?!」

又兵衛はとっさに三日月刀を取り出して警戒する。

すると、又兵衛やミーナ達の前に赤き影が躍り出てくる。

それは一人の男だった。

ヤクザ5

「だ…誰だテメ…ギヤア！」

とっさに又兵衛にミーナを強姦する事を提案したヤクザがウィンチエスターM1300を構えるが、その赤き影の男は白銀と漆黒の二丁の拳銃をホルスターから抜き去り銃火の華をそのヤクザに散らせる。

男

「イイイイイツヤツホウウウウウウ！！！」

男は楽しそうな声を上げながら銃弾の雨をヤクザに浴びせ続ける。

ヤクザ5

「ぐはあ！？」

全身に弾痕を作りヤクザが倒れ付すと、又兵衛や他のヤクザ達があわてて武器を構え、男を警戒する。

又兵衛

「だ…誰だテメエ…！？」

男

「晩飯の時間なのに看護師の姉ちゃんがちつとも飯持ってきてくれないから様子を見に部屋の外に出たら、素敵なパーティーが開かれていたもんでね。確かに面白そうなパーティーだぜ、頭の悪そうなヤクザ共はともかく女がいるってのは良いもんだ」

男はミーナを見て、軽い言葉を吐く。

又兵衛

「頭の悪いヤクザだと！？なんなんだテメエは?!」

ダンテ

「ハッ！アンタらにはこの名前だけ覚えてもらいたいもんだねえ：

『悪魔も泣き出す男』ってね」

男：二丁銃と魔剣リベリオンを武器にする『悪魔も泣き出す男』の異名を持つ男：ダンテはそういうと、二丁銃を構えて臨戦態勢をとった。

## 第9話 **F i t s   t h e   s t r i k e s   b l o o d   i n   h o s p i t**

ダンテ登場！

悪魔も泣き出す男に又兵衛達に勝ち目はあるか！？

ラルク

「あれ？…又兵衛達って確か悪党側だよね？なんかこの書き方だと又兵衛が主役みたいなんだが…」

## 第10話    **F i t s   t h e   s t r i k e s   b l o o d   i n   h o s p**

c h a r l e y 「ふう〜…やっと本編の時系列に追いつかせる事ができそうだ…」

政胸 「あんたねえ…あんたがそんなs l o w   p e a c e でやっていたせいで龍の骨が心配してたじゃないの？ 『本編このまま進ませてもいいか』って」

c h a r l e y 「うう…すみません…だってリリカルB A S A R A とダブルf e a t . ミルキィホームズの方ばかりネタが思いついちやって…龍の骨さん、本当にすみませんでした」

## 第10話    **F i t s   t h e   s t r i k e s   b l o o d   i n   h o s p**

突如乱入してきた謎の男    ダンテに、又兵衛達ヤクザ集団やミーナは騒然とする。

又兵衛

「ふ…ふざけんな！ なぁにが悪魔も泣き出す男だ！？ お前ら！ 細切れにしちまえ！」

っとお決まりの台詞と共に又兵衛がヤクザ達をダンテに向けてけしかけてくる。

だがダンテはまったく動じる気配を見せない。

ダンテ

「おやおや、元気なお坊ちゃん達だねえ。 お兄さんが不っ味いオヤツでもあげようか？」

ダンテは不敵な笑みと共に凄まじい速度で銃を乱射する。

その弾丸には全てに莫大な魔力を込められているため着弾の衝撃に空間さえ歪み始める。

その光景を目の当たりにしたミーナは呆氣にとられていた。

ミーナ

「すごい……あの人強い……！」

そしてあっという間に又兵衛の他のヤクザ達は全滅した。

ダンテ

「さあてと坊ちゃん、大人しくその子を離しな。 今なら命は勘弁し



てやるぜ？」

又兵衛

「くそ！こうなったら…先生！お願いします！！」

そう言って又兵衛は屋上の周囲を見渡すように大声を上げる、すると突然、屋上の床を突き破られて穴ができ…

「ケッ！ようやく俺の出番か！」

ボクシンググローブを付けた頭の悪そうな黒人　マイク・バイソン  
が穴の中から這い上がってきた。

ダンテ

「ほう、こらまたすげえ登場の仕方だな」

ダンテは驚きと共に、興奮した声を出した。

又兵衛

「どうだ！ここにいるのは我ら後藤組の用心棒　マイク・バイソン  
先生だ！」

バイソン

「フン！テメエの相手はこの俺…」

ダンテ

「シャラップ！！」

《ドガアアアア！！》



「つというわけではテメエだけだな」

あまりに簡略化され過ぎた用心棒戦を終えたダンテが、そのままリベリオンを片手に又兵衛に近づく。

又兵衛

「フッ：馬鹿な奴め。まさかこれで終わりだと思うなよ」

又兵衛はそう言いながら携帯電話を取り出してどこかに電話を掛けた。

又兵衛

「よう、俺だ！作戦変更！例の『あれ』をこっちによこせ！」

すると突然屋上にコンテナを吊り下げた一機のヘリが飛来する。

ミーナ

「あれは…金山企業の…！？」

よく見ると、そのヘリには金山企業のマークが描かれていた。するとヘリが屋上の真上まで来たところで吊り下げられたコンテナのドアが開き…

《ドゴオオオオン！！》

チェーンソーマジニ

「グウオオオオオ！！！！」

突如、顔に包帯を巻いた長身の黒人がコンテナから飛び出してきて、屋上に舞い降りてきた。

ミーナ

「あれはチェーンソーマジニ……!!?」

又兵衛

「そう。もしもに備えて金山企業から寄越してもらった人間兵器さ……さあやってしまえ!」

チェーンソーマジニ

「ぐおおおおおおおおお!」

又兵衛の指示を受けて咆哮を上げたチェーンソーマジニはチェーンソーをダンテに向かって振り降ろした。

ダンテ

「どわっ!!?」

慌ててそれを避けるダンテ。

ミーナ

「大変……早く逃げて!」

又兵衛

「いいぞ、もっとやれ!」

ダンテはリベリオンでチェーンソーを弾くが、その振るスピードは予想より速く、なかなか反撃する余地がない。

又兵衛

「ギャハハハハハ! 流石の貴様も手も足もだせないみたいだな!」

そしてダンテはチェーンソーマジニの攻撃を回避していくうちに、屋上の端に追い詰められてしまった。

ミーナ

「誰だか知りませんが…もういいです！私の事は構わないで逃げて！」

ダンテ

「……！？」

ミーナの悲痛な叫びを聞いたダンテは眼の色を変える。

チェーンソーマジニ

「うおおおおお！！！！！」

そしてチェーンソーマジニはチェーンソーをダンテに向かって力いっぱい振り降ろした。

ミーナ

「ああ！」

ミーナはダンテがやられてしまったと思い、思わずその光景から目を逸らす。

しかし……

又兵衛

「なっ……！？」

又兵衛達がなにやら驚いている事に気付き彼女は再びダンテの方を

見た。

ダンテ

「ヒュ〜…やっぱ美女の言葉はいい潤滑油だねえ」

又兵衛

「な、何！生身でチェーンソーを！？」

そこには片腕だけでチェーンソーマジニのチェーンソーを受け止めているダンテの姿があった。

ダンテ

「“逃げろ” かあ…アンタみたいな美女からこんな言葉をかけてもらえるなんて嬉しいねえ…やっぱ仮病使ってこの病院入院してたかいがあったな」

するとダンテはチェーンソーマジニのチェーンソーを払い除け、縛られたミーナに向かって大声で叫んだ。

ダンテ

「氣に入ったぜ姉ちゃん！そこで大人しくしてろ！俺が守ってやるからよ！」

ミーナ

「ふえ！！？」

その瞬間、ミーナの顔はトマトのように真っ赤にそまり、頭から汽笛のように煙がボンと吹き出した。

ミーナ

「え？何？守ってやるってアレ？コレってもしかして告白？え？ちよっとヤダ私どうしよう？私にはクルトが……！」

なにやら勘違いを起こしたようである。

又兵衛

「くそお！何してる！早くぶっ殺せ！」

チェーンソーマジニ

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

逆上した又兵衛が再度命令をあたえ、チェーンソーマジニがチェーンソーの出力を上げてダンテを斬ろうとするが…

ダンテ

「クラッシュ！」

《ブシュッ！》

ダンテがリベリオンでチェーンソーマジニを串刺しにして、そのまま屋上から投げ捨てた。

チェーンソーマジニ

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

チェーンソーマジニは断末魔を上げながら病院の下へ落下していった。

又兵衛

「く…くそつたれ！…こうなったらこの屋上ごとテメェらをぶっ飛

ばしてやる！」

そう言うのと、又兵衛は人間離れした超脚力でヘリから吊り下げられたコンテナに乗り込むと、そのまま空中に舞い上がる。

又兵衛

「よし！今だ！屋上にロケランを放…」

《ドオオオオオー！！！！！！！！！！！！》

又兵衛がヘリにいる部下に命令しようとした瞬間、ヘリに数発の弾頭が撃ちこまれヘリが爆散した。

又兵衛

「ぐわあああああああああああ！！！」

ヘリの残骸と共に屋上に落下したコンテナから又兵衛が投げ出される。

何が起きたのかわからない又兵衛が慌てて上を見上げると：

クリス

「まあ、こんなことだろうと思ったがな…」

サーニヤ

「先回りしといてよかったです」

空中にはフリーガーハマーを武装したサーニヤと、芳佳に抱えられながら手にRPG-7を持ったクリスがいた。

又兵衛



「デメエら…死ね!!」

又兵衛が叫びながら三日月刀の1本をクリス達目掛けて投げつける。  
しかし咄嗟に芳佳が片手で腰に装備したホルスターからSIG P  
230JP自動拳銃を抜き、飛んでくる三日月刀を撃ち返した。

又兵衛

「なんだと!？」

芳佳

「無駄です!もう貴方の仲間は全員鎮圧されました!大人しく投降  
してください!」

又兵衛

「くっ…くくくっ…!!」

追い詰められた又兵衛は傍で縛られたままのミーナの首根っこを持  
ち上げた。

ミーナ

「きゃ!」

芳佳

「ミーナさん!」

クリス

「貴様!ミーナをどうするつもりだ!」

又兵衛

「ち、近寄るんじゃない!近寄ったらこの女の首を……!」

ボッコオオオン!!!!

又兵衛が次の言葉を言おうとした瞬間、彼の目にダンテの拳が映り、そのまま顔を殴られはるか後方に吹き飛ばされた。

又兵衛

「げへえええええええ!!!!!!」

ダンテ

「あ、わりい、何か言おうとしていたのか？この女が……なんだって？」

ダンテは余裕そうな顔をして拳についた又兵衛の血を払いながら、もう片方の空いた腕で又兵衛から開放されたミーナを支えていた。

ミーナ

「あ……あの……」

ダンテ

「大丈夫か？悪いな……レディに対してちょっと乱暴な助け方だったかな？」

ミーナ

「い、いえ……」

すると、突然屋上のドアが開き……

ラルク

「おらあ！後藤はどこだあ！」

政胸

「奥州組筆頭！伊達政胸！推して参…！？」

ラルクや政胸達が慌ただしく突入してきた。

しかし、そこで広がっていた光景は既に鎮圧された又兵衛以下の後藤組の面々。

ラルク

「あれ？もしかしてもう終わったのか？」

シャーリー

「それっぽいみたいだな」

ラルク達が意外にあっけなく終わった事に拍子抜けしながらも、縛られたままのミーナを救出する為に彼女の元に駆け寄った。  
ちなみにバルクホルンとペリーヌの衣装は元に戻っている。

バルクホルン

「ミーナ！大丈夫か！」

エーリカ

「あの後藤って奴に変な事されなかった！？」

ミーナ

「み、みんな……」

土方にロープを解いてもらったミーナは、そのまま力が抜けたようにシャーリーの胸に寄りかかった。

ミーナ

「ここここ怖かった〜!」

シャーリー

「あははは……おーよしよし、もう大丈夫だからなー」

一方、ラルクと政胸はミーナの傍に立っていたダンテに声を掛ける。

ラルク

「あんたが、こいつらをやってくれたのか？サンキューな、助かったぜ」

ダンテ

「いって、いって、退屈しのぎのお遊びが出来たから丁度良かったぜ」

政胸

「あんたただの人間には見えないわね？一体誰？」

ダンテ

「ただの傭兵だよ。ただし巷じゃ『悪魔も泣き出す男』と呼ばれる……」

ミーナ

「あっ……あの!」

そう言ってその場を去ろうとするダンテに、ミーナが声を掛ける。

ダンテ

「ん？なんだい姉ちゃん？」

ミーナ

「助けてくれてありがとうございます。あの…名前を教えてくださいませんか？後日お礼に伺いたいのです…」

ダンテ

「……ダンテ…435号室のダンテだ。お礼ならオリーブ抜きのパザカストロベリーサンデーをよこしてくれよ」

それだけを話すと、ダンテは颯爽と屋上を去って行った。

クリス

「ダンテ…？どこかで聞いたような…」

芳佳

「知ってるの？クリス君」

クリス

「ああ、でもどこでだったか…」

ダンテの名を聞いて首をかしげるクリス。

すると、同じく考えてこんでいたラルクが…

ラルク

「ああ！思い出した！！」

突然声を張り上げる。

シャーリー

「ど…どうしたの?!ラルク!」

ラルク

「ダンテといえばほら!あの伝説の傭兵兼賞金稼ぎって噂の…」

クリス

「まさか…あのダンテか!?!」

ラルクの言葉を聞いて思い出したのか驚愕するクリス。

ラルクの話によれば、ダンテは別名『悪魔も泣き出す男』の異名を持った凄腕の傭兵兼賞金稼ぎで、法外な報酬を請求する代わりに任務成功率100%という驚異の成果を上げ続け、各国の国家、軍隊、テロ組織、シンジケートなどから一目置かれた傭兵達の間では神のような存在の男である。

リーネ

「そ…そんな凄い人がこの病院に入院してたんだ…」

ラルク

「すっげえな!俺、後でサイン貰いに行こうかな?」

クリス

「何言ってるんだ?お前は…」

政胸

「いいじゃない。折角だから私も貰おうかな?『政胸さんLOVE』とか書かせて…」

クリス

「小十郎がやばいことになるぞ：そんなこと書かせたら」

ともあれ、こうして後藤組襲撃事件は終結を迎えたのであった：

翌日

クリス

「美緒！ラルク知らないか！？」

美緒の病室に突然、ひどく憤慨したクリスと心配そうな表情を浮かべた芳佳とサーニャが駆け込んでくる。

美緒

「ら：ラルク？し：知らんが一体どうしたんだ？そんな怒って：」

クリス

「あの野郎！昨日あの後ドタバタしてて結局問い詰められなかった武器代横領の件を改めて問い詰めようとしたら、いないんだよ！どこにも！」

そう言って病室内を見渡してラルクを探すクリス。

美緒

「武器代横領？：一体何の事だ？」

昨日のラルク達と行動していなかった美緒は何のことかわからず首を傾げるばかり。

つとそこへ政胸が入ってくる。

政胸

「やつほー！美緒姉え…ってクリス？どうしたの？」

クリス

「ああ！政胸！ラルクを知らないか？！」

政胸

「ラルク？ラルクなら今朝この手紙をアンタに渡してくれて言っ  
て荷物纏めて出てったけど…」

クリス

「なに！？」

政胸は一枚の手紙をクリスに手渡す。

クリスが慌ててそれを読むとそこには…

『京都に出かけた零斗から急に助っ人で呼ばれちゃったから行ってくるわ。』

きつと今頃、クリスの兄貴は礼の横領の件でブチ切れてるだろうな

（笑）

まあ、そう怒らないで。お土産に京都名物の鹿せんべい買ってきてやるからそれで機嫌直してよ。

グッバイ愛しのバ…兄貴！ イケメンなラルクより』



《ビリリ！！》

「ラルクウウウウウウウウウウウウウウ！！！」（怒）

まったく反省の籠ってない手紙を破りながら激怒するクリス。

クリス

「あの野郎！なにが『機嫌直してよ』だ！！こんなもんで機嫌直るわけないだろ！大体鹿せんべいって奈良のもんじゃねえか！んでもって名物でも食いもんでもねえし！しかもなんだ最後の『バ…』って？！バカか！？バカって書きそうになったのか！？だったらちゃんと消せアホおおおお！！」

サーニヤ

「く…クリスさん落ち着いて！」

癪癪を起しながら怒鳴って叫び出すクリスを慌てて宥めるサーニヤ。一方、芳佳は暴れるクリスを押さえながら美緒に問う。

芳佳

「そ…それで坂本さん。ミーナさんは？」

美緒

「ああ、昨日助けてくれたダンテとかいう賞金稼ぎの部屋に礼に行ったぞ」

芳佳

「ダンテさんのところに？」

芳佳が首を傾げる傍では、まだ怒り全開のクリスが喚いていた。

## 435号室

ダンテは退屈そうにベッドに寝っころがって雑誌を読んでいた。すると病室のドアがノックされる。

ミーナ

「あ……こんにちは。」

ドアが開かれると、ピザの箱を持ったミーナが入ってきて、ダンテに声を掛けてきた。

ダンテ

「アンタもう起きて大丈夫なのか？」

ミーナ

「ええ、皆さんのお陰で怪我もありませんでしたし……元々怪我も動けないものじゃなかったの……」

ダンテ

「そうかい？」

ミーナはそう言うのとダンテにピザの入った箱を差し出してきた。

ミーナ

「…これ、よかったらどうぞ。売店で売っていたものですが…」

ダンテ

「おっ！ありがとな」

ダンテは嬉しそうにピザを受け取る。

ミーナ

「そう言えばお礼をまだ言っていないませんでしたね、ありがとうございます。」

ダンテさんが助けてくれなかったら私、今頃どうなっていたことか……」

ダンテ

「そんなの気にすんなって。俺の方こそ退屈しのぎにはちょうど良かったぜ」

ミーナ

「そ、それで……あの……」

ダンテはふと、ミーナの顔が心なしか赤く染まっている事に気付く。

ミーナ

「よ、よかったら今度お食事でもどうですか！？ お礼も兼ねて……！」

ダンテ

「いやホント気にすんなよ。助ける度にお礼されていたらきりねえしさ」

ミーナ

「そ、それじゃ私の気が済まないんです！」

ミーナは必死の形相で食い下がる事はなかった。

ダンテ

「じゃあ、これ食ったらどっかうまいストロベリーパフェのある店でも連れて行ってくれるか？」

ミーナ

「は…はい！それならいい店を知ってますよ」

ダンテの言葉に輝くような笑顔を浮かべながらミーナが答えた…

## 第10話    **F i t s   t h e   s t r i k e s   b l o o d   i n   h o s p i**

I C P O 捜査官のレオン・S・ケネディの張り込みを成功させる秘訣：

それは張り込み期間中はドーナツにアメリカンコーヒーだけを食べ続ける事だった：

次回は本作初の加富根総合病院以外の場所が舞台となる。

## 第11話 レオン地獄のドーナツ生活（前書き）

charley「今回はレオンのキャラが完全にぶっ壊れます。  
レオンファンの皆さん申し訳ありません。ついでにバルクホルンの  
キャラも壊れます」

バルクホルン「既に壊してるだろ。お前は…（怒）」

※今回の話ではバルクホルンのキャラは壊れません。

## 第11話 レオン地獄のドーナツ生活

とあるドーナツショップ『インキンドーナツ』

店員

「いらっしやいませえ。ご注文をどうぞ♪」

笑顔で愛想を振る舞うように接客する店員の前に立つ客：

それはレオン・S・ケネディその人であった：

何故彼がこんなところにいるかというと：

レオン

「プレインドーナツ10個とチョコドーナツ10個、ハニードーナツ10個とクリームドーナツ10個：あとは適当にメニューから20個くらいお願いします」

普通にドーナツを買いに来ていただけであった。

店員

「ありがとうございます。全部で7000円になります♪」

レオンは懷から1万円札を取り出して、店員に差し出す。

店員

「では3000円のお返しとなります」

レオン

「どうも」

レオンはお釣りとドーナツの大量に入った箱を受け取ると、店を出ようとする。

すると、レジの方から店員達の会話が耳に入ってくる。

店員A

「ねえ見た？ドーナツを60個も買っていくなんてすごいよね」

店員B

「あの人、そんなにドーナツ好きなのかな？」

明らかに自分に向けた店員達の会話を尻目にレオンは店を出て行った：

しばらくして：

とあるマンションの一室。

レオン

「バク！…んぐ…んぐ…んぐ…」

椅子、そして寝袋しかおいていない殺風景な部屋の中でドーナツを食べるレオン。

レオン



「好きじゃねえよ…」

レオンは不満そうにさっきの店員達の会話に対する反論をつぶやいた。

レオン・S・ケネディ：職業 国際警察捜査官。

いつもなら同僚のクリス・レッドフィールドと共に捜査を行う筈だが、現在そのクリスが過労の為休職中。

そのせいで現在レオンは単独で任務を遂行している。

そして現在レオンが遂行中の任務は、ずばり『張り込み』である。

元警察官のレオンは張り込みの勉強も少なからず教わっている。

周囲に気づかれずに、特定の人間を見張る為にはどうすればいいのか？

その忍耐力や、持久力などあらゆるノウハウを勉強してきたレオンであるが、中でもベテランになった今もしっかりと守り通しているのが、この教えである。

「張り込み中はドーナツとコーヒーだけしか腹に入れてはならない」

ドーナツにコーヒー…それがレオン・S・ケネディの張り込みの作法である。

張り込みが終わるまでは決してそれ以外の食べ物や飲み物を腹に入れない。

それは日本と言えば、張り込み成功祈願の為の儀式だ。

ある密偵があんぱんと牛乳を張り込み期間中の常食にするように、レオンもまたアメリカンポリスの神が好む供物『ドーナツとコーヒー』を張り込みの間常食とし続ける。

張り込みの成功を祈願し、カレー、カツ丼、ハンバーガー、スパゲッティ、寿司、うな重、焼き肉。

あらゆる食欲を殺しつつ、レオンは今日もドーナツを喰らうのだ。

春麗

「レオン。張り込みの方はどうなってるの？」

そこへやってきたのはレオンの同僚のICPO捜査官 春麗である。

レオン

「春麗。見ればわかるだろ。相変わらず向こうに特に怪しい動きは無しだ」

そう言ってレオンが窓から見つめる先にあるのは、『金山企業』と書かれた倉庫群である。

レオン

「一見普通の倉庫にしか見えないな。もしかして今回の情報はガセかもしれないな」

春麗

「そう：ところで貴方、またドーナツばかり食べてるの？」

春麗がレオンの傍らに転がるドーナツの空箱の山を見て問いかける。

春麗

「確かにアメリカの警察官はドーナツとコーヒーってイメージがあるけど、これはさすがに食べ過ぎだわ。その内肥満になるわよ」

レオン

「心配すんな。ちゃんと栄養のバランスは考えてる」

春麗

「そう?……まあ程々にね」

春麗はレオンを心配しながらも帰っていくと、レオンは再びドーナツに手を伸ばす。

レオン

「俺だって好きで食ってんじゃないさ。でもこいつを始めてから俺は一度も張り込みに失敗した事がないのさ」

そう言ってドーナツを食べるレオン。

レオン

「ICPOのエリート捜査官…レオン・S・ケネディの成功の秘訣はドーナツにあり…だ」

レオンは誰に自慢しているのか自分でも判らないまま、ドーナツを食らった。

レオンビジョン開始

## レオン・S・ケネディの活動報告

今回の任務内容は、最近黒い噂の絶えない金山企業が陰で裏取引を行っていると有力視されているとある輸出品保管倉庫の監視、及びその動向の報告だ。

調査を始めてあらずとも1週間：すなわち俺のドーナツ生活も1週間目を迎えた。

相変わらず倉庫に搬入されているのは金山企業が『表の顔』として扱っている海外へ輸出する家電製品や工業用品ばかりだ。夜になってもこれといって怪しい人間が倉庫に入っていく様子もない。

話によると金山企業を陰から操る金山四天王の最後の一人が京都にいと報告があったが、そっちの方は俺の友人の零斗に任せているから、俺はゆっくりとこの仕事に集中できる。

しかし京都かあ…3年前に行った時に祇園で食べた生八つ橋が懐かしいな。

それに伏見の地酒もうまかった：

京都というのはこれでもかといわんばかりにうまいものが揃っている、俺もお気に入りだ。

そんな食に関する欲求を含めた回想を思い出し、京都に行ったという零斗を羨ましながら、俺は今日もドーナツを食らう。

## ドーナツ生活8日目

昨日、駅前のドーナツ屋に行ったら遠くの方で「Mr. ドーナツ来た。マジ来た」とヒソヒソやっていたが、相変わらず倉庫の方に動きはない。

今日届いたメールには零斗から「京都で美味しいもん食った」と自慢されて少し腹が立った。

「こっちは8日もドーナツしか食ってないんだよ！」と怒鳴りたくなる気持ちを抑え、俺は今日もドーナツを食らう。

## ドーナツ生活12日目

気づいたらここ数日誰とも喋ってない。最後に話したのは2日前：確かクリスマスからの電話だったと思う。

なんでもアイツの弟のラルクが、零斗に呼ばれて京都に行ったらしいが、そこから見知らぬ女を連れ帰ってきたとかなんかで、ラルクの事実上彼女であるストライクウィッチーズのシャーロットがブチ切れて大騒ぎになってるとかいう趣旨の救援電話だったが、ドーナツ生活のせいで苛立っていた俺は「そんなもんドーナツ食わせて宥めとけ！」と一喝して切った。

なんであんな事言っただろう…？

ドーナツばっか食って頭までドーナツに染まったか？俺：

そんな恐怖心を抱きつつ俺は今日もドーナツを食らう。

…が、半分残した。

## ドーナツ生活15日目

そのスーパーのドーナツ屋に行ったら、店の店員や常連の客が「典型的アメリカカンポリス来た」とか「絶対またドーナツ10個買うぜ。絶対買うぜ」とかヒソヒソやっていたが、相変わらずこの張り込みに動きはねえ。

そういえば加富根総合病院の方からここ数日銃声や爆音が聞こえているが、あれはなんだろうか？

軍の実戦訓練でもしてるのだろうか？

…っと余計な疑問を抱きながら俺は今日もドーナツを食らい…

レオン

「グボロオオゲブオロヴウワアアアアア！」

全部吐いた…

## ドーナツ生活20日目

あんまり誰とも話してないので俺声出るかなと……

レオン

[illegible]

…と意味不明に叫んでみたらお隣さんが…

お隣さん

「うるせええええええええええ！！」

と壁を叩いてきて久しぶりに会話が成立して嬉しかった。

…が、相変わらず倉庫に異常はない。

そんな時にクリスマスからまたしてもメールが来た。

内容は、『今度は芳佳とサーニヤがシャーロットと例の千歌音とかいう女との壮絶なラルク争奪戦に触発されてクリス争奪戦なるものを始めた』という趣旨のものだった。

よくも飽きもせずどこいつもこいつもハーレムに、奪い合い：零斗にしてもレッドフィールド兄弟にしても、あいつらの周りにはなんでもこうも女ばかり集まるのか…？

世の中には、俺みたいに地味ながらも一生懸命頑張ってる男だって  
いるんだぞ……少しはそういった奴らにもいい思いさせてくれ。

そんな切なる願いと共に俺は今日もドーナツを……

《グチャアアア！》





ドーナツ生活 23日目

春麗にむけてスパークینگ!!

春麗

「きゃあああああああ!!」

ドーナツ生活 24日目

街でたまたま出会ったエーリカとバルクホルンにむけてスパークینگ!!

バルクホルン

「うぎゃあああああああああああああああ！！」

エーリカ

「私達ってこんな扱いばかりいいいいいい！！」

ドーナツ生活 25日目

病院に殴りこんでクリスにむけてスパークィイング！！

クリス

「ぎゃあああああああああああああ！！」

サーニヤ

「いやあああああ！クリスさああああん！」

芳佳

「クリス君になんてことをおおおおおお！！」(怒)

芳佳・サーニヤ

「死を持って償ええええええええええ！！！」（怒）

<<ドカ  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
ン!!!>>

ドーナツ生活 28日目

気がつくとも全身傷だらけで例の張り込み部屋（何故か全壊してた）に戻ってきていた。

ここ数日の記憶がまったくない。ほぼ窓側の壁の全壊した部屋にはミサイルの破片らしき物体が転がっていたが、これはなんだろうか？しかし、考えてもキリがないので俺は任務に戻る事とする。

俺の体の異変とは裏腹に、あいも変わらず張り込み対象に動きはない。

いつものように業者がドーナツの描かれたトラックで倉庫にドーナツを搬入し、ドーナツを出荷する。

そして、夜のドーナツ時に警備員がドーナツを持って敷地内をドーナツ状に回ってドーナツを描きながらドーナツを食べるのだ。

ドーナツにドーナツはドーナツでドーナツがドーナツだドーナツドーナツドーナツドーナツドーナツドーナツ：

30 日目

[illegible]

[illegible]

レオンビジョン終了

ドーナツ生活 31日目

レオン

「もう限界だああああああ！！任務なんて知るものかあああああああ！俺はもう一口たりともドーナツなんて食いたくないんだ！！」

レオンはストレスが限界に達し、必死に街の中を駆け回っていた。その姿はもはや発狂者にしか見えないものである。

レオン

「こうなったら、そもその元凶のあのドーナツを全部捨ててやる！！」

レオンは決意するとすぐさま部屋に戻る事にした。

張り込み部屋…

レオンは部屋に戻ると残っていたドーナツをすべてゴミ袋に入れた。

レオン

「こ…これで…憎きドーナツ地獄から…解放される…」

レオンは息を切らしながらつぶやくと、袋をしまおうとする。その時だった。

????

「待て！レオン・S・ケネディよ！！」

レオン

「!？」

その時、レオンの耳に聞き覚えのない声が入ってくる。

レオンが慌てて声のした方を見ると、そこには全身橙色の服を着て、腰のあたりには巨大なドーナツを装備した奇人が立っていた。

レオン

「お…お前は!？」

ポンデー毛利

「我が名はポンデー毛利! 日輪ならぬドーナツの申し子なり!」

レオン

「ポンデー毛利!？」

レオンが思わず腰を抜かしてしまう。

当然であった。その奇人の顔はまるっきり『戦国BASARA』の毛利元就だったからである。

レオン

「お…お前…毛利元就じゃ…？」

ポンデー毛利

「違う! 我はポンデー毛利! ドーナツを体現したドーナツの精霊である!」

ポンデー毛利はそう言うのとレオンとその前にあるドーナツの詰まったゴミ袋を指さす。

ポンデー毛利

「その貴様！なぜドーナツを捨てる？」

レオン

「…し…仕方ないだろ。俺はもう一口たりともドーナツなんて食べたくないからだ！」

ポンデー毛利

「なぜだ！？それはお主がICPO捜査官として任務を成功させてきた秘訣なのだろう？」

レオン

「そ…それは…」

レオンは俯いてドーナツ入りのゴミ袋を見つめた。

するとレオンの脳裏には今まで自分が経験してきた任務の思い出が走馬灯のように走り出す。

新米の警官時代からレオンは張り込みの度にずっとドーナツを食してきた。

訓練の合間もドーナツを食べ：

プライベートのおやつにもドーナツを食べ：

そしてICPO捜査官になってからも任務成功を祈願してレオンはドーナツを食べ続けてきた。

レオン

「俺は……」

ポンデー毛利

「そうだ！貴様とドーナツは一心同体だったのではなかったか？！」



レオン

「……………」

レオンは黙ってゴミ袋からドーナツを出し始めた。

ボンデー毛利

「うむ。それでいい。レオン、貴様はこれまで貴様を支えてきたドーナツを簡単に踏みにじることなどできぬ」

レオン

「でも…俺はもうこいつらを食べる自信が…」

ボンデー毛利

「心配は無用だ。レオンよ。ドーナツは食べるだけでなく時には武器にもなるのだぞ」

レオン

「えっ!?! なんだって!?!」

レオンは驚いた表情を浮かべながらボンデー毛利に縋り付く。

レオン

「頼む! 教えてくれ! どうしたらこのドーナツ達を無駄死にさせずに済むんだ!?!」

ボンデー毛利

「よかろう。ではこのドーナツの申し子『ボンデー毛利』が直々に貴様を導いてしんぜよう!」

しばらくして…

例の倉庫入り口。

作業員 A

「先輩。今日の搬入予定の品は全部終わりました」

作業員 B

「はい。ごくろうさん」

残業を終えた作業員達が仕事を終えて帰ろうとする。

作業員 A

「そういえば、ここの倉庫って看板に『金山企業』ってありますけど、ここを本当に保有してる会社って確か別の会社でしたよね？」

作業員 B

「ああ、最近金山企業から新興企業の『銀山企業』に譲渡されたらしいけど、急な引き渡しだったせいで社名を変え忘れていたそうだけ。ちなみに新しい金山企業の倉庫は横須賀に移転しているそうだ」

作業員 A

「ふうん…そうなんですかあ…：…ん?!」

その時、作業員の一人が正門の向こうからこちらに向かって走って

くる一つの影を見つける。

作業員 B

「どうした？」

作業員 A

「いや…先輩…あれ…なんでしょうか？」

作業員 B

「えっ!？」

後輩の言葉にもう一人の作業員も正門の方に目をやる。  
するとそこには…

レオン

「うおおおおおおおおおおお!! 金山企業  
うううううううう!! ドーナツの力を思い知れええ  
えええええ!!」

何故かパンツ一丁で両腕両足にドーナツを大量に巻きつけたレオン  
がこちらに向かって突撃をかけてきていた。

作業員 A

「な…なんすか!? 先輩! あれは!？」

作業員 B

「し…知るか! とにかく不審者だ! 警察に…!!」

するとレオンはジャンプして門を超え、2人の作業員に向かって飛び掛かり…

レオン

「ボンデー真拳奥義！ドーナッツ・スロー・デストロイアー……  
ー！ー！ー！」

作業員

「「ぎゃあああああああああああああああああああああ  
あ！……」」

深夜の倉庫に作業員達の悲鳴が響き渡った……

翌日、発行された新聞『坂川TIMES』には大見出し記事でこ  
う書かれていた。

『民間企業施設殴り込み！？作業員二人重症 犯人はICPO捜査  
官』

クリスは病室でその記事を読みながら、同僚の犯した罪を呆れていた。

クリス

「あのバカ一体何考えてるんだ？」

サーニャ

「あっ！？ テレビでも報道されてますよ」

すると隣にいたサーニャもテレビのニュース番組に映るレオンのニュースに気付く。

アナウンサー

『…というわけで今回逮捕されましたレオン・S・ケネディ容疑者は。取り調べに対し『ポンデー師匠が導きになられた』など意味不明な供述をしており、警察では近く、レオン容疑者の精神鑑定を検証しているとのことです…』

芳佳

「なんか…堕ちたね…彼…」

クリス

「ああ、まったくだ」

芳佳は冷や汗をかきながら話すが、クリスは冷やかに答えると再び新聞を読みだす。

芳佳

「レオンさん、どうなるんだろうね？」

クリス

「まあ、間違いなくクビだろ。あんな馬鹿やって警察沙汰になっただから」

クリスはそう言いながらベッドの脇の棚を開けて中を確認しようとする。

クリス

「あれ？ここに置いてあったインキンドーナツのドーナツ知らないか？」

サーニヤ

「ああ、それならここにありますよ」

そう言ってサーニヤが別の場所からドーナツの入った袋を取り出す。

クリス

「ああ、すまないな。いやあ俺これが好物だな」

そう言ってドーナツを受け取って食べるクリス。

すると、その時病室のドアがノックされ、優希邑が入ってくる。

優希邑

「クリスさん。回診の時間です」

クリス

「あつ、はいはい。芳佳、テレビ消して」

クリス達が回診を受ける用意を整えると、優希邑は部屋の外に呼び掛ける。

優希邑

「じゃあ、毛利先生よろしくお願いします」

そう言って優希邑が呼びかけると回診の担当である医師が入ってくる。

毛利

「我が名は毛利元就。日輪の申し子なり」

それはこの病院の内科医の毛利元就であった。

毛利

「むっ…それは？」

すると毛利はクリスのベッド脇に置いてあったドーナツに目を付ける。

クリス

「ああ！？す…すみません！これちょっと朝飯が足りなかったものでつい…」

慌ててドーナツをしまおうとするクリスに毛利はボソツと…

毛利

「我が名はポンデー…フツ……」

クリス・芳佳・サーニャ・優希邑

「」「えっ！？」」「」

毛利のつぶやいた言葉に一瞬騒然となる4人。

毛利

「ではさっそく日輪の威光を持って診断を始めるぞ」

だが毛利は何事もなかったかのように回診を始めるのであった…

毛利元就…その知られざる裏の顔は誰も知らない…

そして…その裏の顔によって一人の捜査官の威光がぶち壊しになった事も…



## 第11話 レオン地獄のドーナツ生活（後書き）

加富根総合病院に悪霊出現！？

突如現れた謎の巫女 博麗 霊夢の壮絶な『お祓いの儀式』が幕を開ける。

その時、入院患者達の運命は…？

## 第12話 女の執念は恐ろしい…（前書き）

今回は前回の予告の予定と変更して龍の骨さんから以前いただいたリクエストの話をやらせていただきます。

政胸

「ところで『劇場版 戦国BASARA -The Last Party-』は観に行った？最高に面白いわよねあれ」

クリス

「今それを宣伝する必要あるのか？」

## 第12話 女の執念は恐ろしい：

事件の幕開けはおよそ一週間前にさかのぼる。

零斗への応援の為に京都へ向かっていたラルクが帰ってきたと知るや、さっそく彼を迎えにを迎えに屋上のヘリポートへ向かったシャーリーだったが、

彼女の予想に反して、ヘリから降りてきたのはラルクだけではなかった。

シャーリー

「ら…ラルク…誰？その女」

ラルク

「いやあ…なんていうか…ハハハ…」

シャーリーが啞然と指を指す先にいたのはぴったりとラルクの腕にしがみついた女 姫宮千歌音だった。

千歌音

「私は姫宮千歌音。ラルクの嫁よ」

シャーリー

「よ…嫁！？どういう事だよラルク！」

シャーリーは髪の毛を逆立てながら驚愕する。  
すると千歌音が得意げに語りだす。

千歌音

「ああ。貴方がラルクの“元”相棒？でも残念だね、今日から私が

ラルクの隣に立つ事になるのでよろしくね」

シャーリー

「んな！？ふざけんな！さっさとラルクから離れろ！！」

すかさずコルト・ガバメントを取り出すと容赦なく千歌音に向けて乱射する。

慌てて銃撃を避けるラルクと千歌音。

千歌音

「いきなりなにをするのよ！？」

シャーリー

「ふざけた口叩くなよ。ラルクの横に堂々と立てる女はなあ、この世広しといえどこの『グラマラス・シャーリー』ことシャーロット・E・イエーガーだけだあ！」

シャーリーは叫びながらM4カービンを取り出し、千歌音を狙ってフルオートで撃ち放す。

ラルク

「だああああ！やっぱ予想はしてたけどやっぱこういう展開になっちまったかあ！！」

ラルクは京都を出てから抱いていた嫌な予感が、的中してしまった事に頭を抱える。

元々、零斗達の助っ人として金山企業の四天王の一人 死神スカルこと華琳と彼女の率いる曹魏五人衆の戦いに参加したラルクだったが、自らが戦った曹魏五人衆の一人、千歌音との戦いの中で彼女はラルクに惚れてしまい、挙句に『嫁』宣言をしてしまったのだった

(※詳しくは『BSAA学園!』第五十四話を参照)。

その為ラルクは自らの公私共にパートナー的な存在であり、『寝台  
の中で戦闘』経験のあるシャーリーと、千歌音を引き合わせたら  
どんな事になるのか内心恐れていたが、案の定彼女達は出会い頭に  
文字通りの『血戦』を引き起こした。

千歌音

「フン！パートナーが何だっていうの？私はラルクの嫁なのだから、  
貴方よりはラルクに近い立場にいるわ」

シャーリー

「そんなのお前の勝手な言い分だろ！私はな名実ともにラルクとは  
死線を幾度も越えてきた仲なんだよ！」

シャーリーは既にストライカーユニットを装備して、空中を飛びな  
がらM4の銃撃を加え、千歌音も弓矢を手にとって応戦する。

シャーリー

「ラルクは私のB A D Y (相棒) だあああ！！」

千歌音

「いいえ！私の婿よおお！！」

ヘリポート上ではシャーリーの放つライフル弾と千歌音の放つ矢が  
飛び交い、地面や壁に次々と穴を開けていった…

それから、シャーリーと千歌音は3日3晩不眠不休の奮戦を展開し  
続けた。

3日目…もはや原型をとどめないまでにボロボロになった屋上では…

クリス

「…っで、いつまで続くんだよ？あの戦いは？」

ラルク

「うーん…わかんね」

兄のクリスが加わり、冷や汗を浮かべながら見守るレッドフィールド兄弟の前には、すっかりボロボロになったシャーリーと千歌音が互いに息を切らしながら膝をついていた。

シャーリー

「はぁ、はぁ…どうやら、直接戦うだけでは決着がつかないみたいだな」

千歌音

「そうみたいね……」

二人は互いにライフルと弓矢を捨てながら立ち上がる。

そして、最初に千歌音がシャーリーに指を指しながら宣言する。

千歌音

「こうなったら…別の勝負で決着を着けましょ！私と貴方、どちらがラルクに相応しいか白黒つけなきゃ気が済まないわ！」

シャーリー

「望むところだ！」

この『ラルク争奪戦』騒ぎはこれがきっかけだった……

## 『第一回戦 ゲーム対決』

加富根総合病院・バラエティモール。

ゲームセンター『K I J U J U』

シャーリー

「どりゃあああああああああああああああー!!」

千歌音

「はあああああああああああああああー!!」

アーケードゲーム『スーパーストリートファイター? ARCADE EDITION』をプレイしながら、互いに凄まじい殺気を放ちあうシャーリーと千歌音。

ちなみにシャーリーは『殺意の波動に目覚めたリュウ』を、千歌音は『狂オシキ鬼』をそれぞれ使用し、両者共にジョイスティックを目にも止まらぬ速さで操作し、一步も譲らない戦いぶりを見せていた。

クリス

「っていうか俺から見たらお前らが『殺意の波動に目覚めた』と『狂オシキ鬼』だっつうの」

呆れながらツツコむクリスの隣では政胸、優希邑、ラルク、芳佳、サーニヤが、同じくこの聖戦(?)の様子を見守っていた。

サーニヤ

「何だか2人共怖いです」

政胸

「そりゃ恋人の座をかけてるんだから当然よね」

優希邑

「あのお…ラルクさん、2人を止めなくていいんですか？」

優希邑が今回の騒動の原因となった張本人であるラルクに問いかけるとラルクは「まいったな」といわんばかりに頭を掻く。

ラルク

「まあ、外野が下手に手出ししても余計ややこしくさせるだけだから、ここは成り行きにまかせようぜ」

クリス・政胸

「「張本人のお前がいうな」」

相変わらずの他人事態度のラルクに呆れる政胸とクリス。

その時…

《バキイイイ！！》

シャーリー・千歌音

「「あああ！？」」

鈍い音と共にシャーリーと千歌音の驚く声が聞こえてくる。クリス達が慌てて2人の方を見ると、そこには互いにジョイステイ



ツクをゲームの機械から引き抜いてしまったシャーリーと千歌音。

芳佳

「こ…壊しちゃったんですか!？」

クリス

「そりゃあんな高橋名人も真っ青なスピードで操作してたら壊れるわ。普通」

千歌音

「フン…どうやら勝負を妨害されたみたいね」

シャーリー

「まったくだな」

政胸

「いや、アンタらが自分でやったんでしょ!」

あたかも他者に邪魔されたかのように話す2人に思わずツッコむ政胸。

シャーリー

「でも勝負はまだこれからだ。次の勝負でケリをつけてやる!」

千歌音

「それは、こちらの台詞よ」

そう言って次の戦いの舞台となる場所に移動していく二人。

優希邑

「…って。あの壊したゲームはどうするんですか？」

優希邑が指を指した先にはジョイスティックが引き抜かれて、黒煙を上げたゲーム機があった。

…とその時だった。

???

「おいテメェら！何ウチのゲーム機壊してんだコラアアアアア！！」

突然一同の背後から飛んでくるゲームセンターの喧騒すら凌ぐ程の怒声。

慌ててクリス達が振り返ると、一人の大柄な女性が怒鳴りながら近づいてくる。

それは『○魂』の婦長…ではなく『この作品』ではゲームセンター『K I J U J U』の女オーナーだった。

ラルク

「…ってまたコイツかよ！？」

政胸

「リリカルBASSARAだけじゃなくこっちでも登場すんのおお！？」

ラルクと政胸がまさかの役を代えての婦長（女オーナー）の登場に信じられないといわんばかりの表情でツッコむが、女オーナーはそんなことなどお構いなしに額に青筋を立てて、眼鏡を光らせて怒っている。

女オーナー

「ウチのゲーム機壊しやがって！！命はないと思いなああああ！！」

芳佳

「命って無茶苦茶ですよおおおおお！！」

クリス

「皆、逃げろおおおおお！！」

芳佳のツッコみとクリスの声一杯に上げた声を合図に一同は全速力で逃げ出した。

女オーナー

「待たんかいコラアアア！！血祭り見せてやる！れっつ・ぱーて  
いいいいいい！！」

政胸

「いや、英語喋れないなら無茶しないでくれない！？」

野獣の如く追いかけてくる女オーナーの不可解な英語（？）に政胸がツッコみを入れつつ、一同は背後から石や缶、ごみ箱、UFOキヤッチャーの景品のぬいぐるみ、タライ、鉄瓶、ダイナマイト（！？）と嵐のような攻撃を避けながら必死で逃げたのであった：

しばらくして：シャーリーと千歌音、そして女オーナーの猛攻からなんとか逃げ切ったクリス達は

バラエティモールのフードコート内にあるファミレス『Penny's』（※読みは直接書くといろいろとマズイので自己解釈してね♪）の店内にいた。

団体のボックス席に座ったクリス達は、政胸とラルク以外全員、戦場から必死に生還したかのように息を切らしながらテーブルに突

っ伏していた。

クリス

「はぁ…はぁ…まったくひどい目にあった…」

芳佳

「完全に疑われちゃったね。私達」

政胸

「いいじゃない。もうあのゲームセンターに二度と行かなきゃいい話なんだし」

サーニヤ

「いや、私達、あそこの常連だったんですけど…」

ラルク

「シッ！アイツら何か始める気だぞ！」

隣の席に座っているシャーリーと千歌音の様子を伺っていたラルクが声を上げると、クリス達は慌てて2人の方に目をやる。  
見れば、2人のテーブルには超巨大な肉の塊のステーキが10人前近く運ばれてきていた。

優希邑

「何を始めるんでしょうか？」

芳佳

「休戦してなかよく食事…じゃなさそうですね」

優希邑と芳佳が話し合っていると、シャーリーが千歌音に宣言した

す。

シャーリー

「ルールは簡単だ。要はどっちが大量のステーキを食いきるかだ。アタシとラルクが空軍時代によくやっていた所謂『大食い勝負』って奴だよ」

千歌音

「ふーん。アメリカ人ってほんと品の無い勝負が好きね。まあいいわ。私こう見えても胃袋は無限回廊なのよ」

シャーリー

「そう言って、後で吠え面搔くなよ」

千歌音

「アホ面よりマシでしょ」

再び火花をぶつけ合いながら、シャーリーと千歌音の『2回戦』の幕が上がった。

数分後：

《《ガツガツガツ！！バクバクバク！》》

2人は必死に次々と運ばれてくるステーキを食べきっていた。

その食べっぷりは凄まじく、巨大な肉の塊を2人はそれぞれ2口、3口程度にカットして食べ進めていたのだった。

そして両者の傍らには、完食した皿が次々と積み重ねられていく。ちなみに今現在の2人の皿のカウントは、シャーリーが14皿、千

歌音が12皿と若干シャリーがリードしていた。

周りの客も、店員達も2人を見て呆氣にとられてしまう。もちろんそれはクリスマス達も同様だった。

クリス

「おい。なんかすごい事になってんだけど…」

政胸

「まさにこれが愛の執念って奴かしらね…」

取りあえず適当に軽食と飲み物を注文して、それを飲みながら勝負を見守り続けるクリス達。

サーニヤ

「でもすごいですシャリーさん。全然ペースを落とさないで食べてるし…」

芳佳

「元々、ステーキはシャリーさんの十八番料理だったから、食べる方にも特化してるって事なのかな？」

優希邑

「でも千歌音さんも意外に大食いなのは驚きましたね、これもラルクさんに対する愛の執念なんでしょうか？」

ラルク

「わかんねえ。だけどシャリーは空軍時代では俺やガイルさんにすら勝っていた大食漢だぜ。それと互角って事は相当な胃袋持っているって事だろうな」

ルッキーニ

「うんうん。私もそう思う」

ラルクの言葉に頷きながら、シャーリー達の食べているものと同じステーキを食べるルッキーニ。

クリス

「…ってお前は何当たり前のようにそこ座ってんだよ!？」

何時の間にか一同に合流していたルッキーニにツツコむクリス。

ルッキーニ

「いやあ、お昼食べに来たらなんか面白そうなことやってるみたいだから、私も見物させてもらおうと思ってね」

クリス

「あのなあ…つか、何お前一人だけステーキ食ってんだよ!？」

ルッキーニ

「ええー?だってクリリンが奢ってくれるってラルクが言ったから」

ルッキーニの言葉を聞いて卒倒するクリス。

クリス

「はあ!?! お前何勝手な事言ってるんだよラルク!?!」

ラルク

「えっ!?! アニキ奢ってくれるんじゃないの?」

クリス

「奢るかああああ!?!?…ってかよく見たらお前も何、ステーキ勝手に注文してんだ!?!」

見れば、ラルクはちゃっかり、シャーリー達と同じステーキを食べていた。

ラルク

「まあシャーリーの焼いたステーキには及ばねえけど、結構いけフな。アニキも食べフ?」

クリス

「やかましいわ!つうか食いながらしゃべるのやめろ!ムカつくんだよ『いけフ』とか『食べフ』とかいうその喋り方!」

芳佳

「まあまあクリス君!落ち着いて!」

呆れる程呑気なラルクにキレるクリスと、それを宥める芳佳。その時、シャーリーと千歌音の大食い勝負に動きが見えてきた。

シャーリー

「や…やるね…アンタ…」

千歌音

「フツ…そ…そっちこそ…」

2人はすっかり膨れ上がった腹を抱えながら互いに強気を見せようとするが、既にその顔色は真っ青である。

ちなみに現在の皿のカウントは…シャーリー、千歌音共に30皿目である。



シャーリー、千歌音

「「お…おかわ……………う……………んっ……………」」

そこでついに二人は同時に力尽き、互いにテーブルに突っ伏した。

店員

「お…お客様！？大丈夫ですか！？」

政胸

「ちょっと！二人ともしっかりしなさいよ！」

慌てて店員やクリスマス達が2人の下に駆け寄り、介抱する。

芳佳

「大変！食べ過ぎで二人とも失神してます！」

優希邑

「ええ…！？ど…どどどどうしましょう！？取りあえず誰か、お医者様に看護師の方はいませんかああ？！」

政胸

「いや、看護師はアンタでしょうが！？」

優希邑

「えっ！？あっ！そうでした！」

結局、気を失ったシャーリーと千歌音はそのまま優希邑の応急処置を受けながら担架で病室に運ばれていった。

ルッキーニ

「うーん、結局勝負は引き分けかぁ。つまんないよお」

ラルク

「そうだな。このままじゃいつまでも決着着けそうにないし、どうしようかねえ？」

クリス

「…ってお前らはいつまで食ってんだぁぁぁ!？」

そう言いながら、2人の残したステーキを食べるラルクとルッキーニの能天気さに怒鳴りながらツツコむクリスだった…

シャーリー・千歌音

「「うーん……うーん……」」

その夜。

事実上ラルクの私室になっている430号室では、それぞれベッドに運び込まれたシャーリーと千歌音を華佗が診察し、その周りではクリス、ラルク兄弟と、政胸、優希邑、芳佳達ストライクウィッチーズのメンバーが集まって、その様子を心配そうに見守っていた。

華佗

「うん。完全なる食べ過ぎだ。まあ、明日には回復するだろう」

クリス

「まったく、2人共つまらない意地を張ってばかりいるからだ」

華佗から2人が大事に至ってない事を知らされて胸を撫で下ろすラ

ルクと、呆れたように話すクリス。  
なにはともあれ2人共が無事であった事に安心する政胸達。

千歌音

「ま……まだ……よ……」

政胸

「ん？」

点滴を打たれながら譫言ように話す千歌音。  
続けてシャーリーも擦れる声で話し出す。

シャーリー

「絶対…この女とは……白黒つけないと……ルクが…ルクが…」

ルク

「シャーリー…」

倒れながらも執念を燃やし続ける相方に驚くルク。

美緒

「どうするんだルク？シャーリーの奴、意地でもお前の相棒の座を守る気でいるぞ」

ルク

「うーん…ほんとどうしよう？」

苦笑を浮かべるばかりのルクにエイラが呆れながら指摘する。

エイラ

「つていうかそもそも話はお前が京都から、この千歌音って女を連れ帰ってきたのが原因ダロ？」

ラルク

「そんな事言ったって、そもそもの始まりは龍の骨が独断で千歌音と俺のフラグを立てちまったのがきっかけだったんだからさあ」

バルクホルン

「他人のせいにする事はよくない事だぞ。龍の骨は許せんが…」

エーリカ

「わたしもそう思うよラルク。龍の骨は許せないけど…」

ペリーヌ

「あの…お二人とも、さっきからなんでそんなに龍の骨さんの名をやたら出してるのですか？何かされたのですか？あの方に…」

エーリカとバルクホルンは、B S A A学園本編で一刀に召喚された際に、いろいろと酷い目に遭う展開が続いたせいで、すっかり龍の骨を一方的に嫌ってしまっていた。

(※ 詳しくはB S A A学園本編の第五十六話を参照)

クリス

「とにかくだ。理由はどうあれ、このままじゃいつまでもこの二人泥沼の戦い続けるばかりだぞ」

政胸

「そうよね。ここはやっぱりアンタが何とかするしかなさそうね。ラルク」

ラルク

「俺が？ やっぱり…ん、そう言ったってねえ…」

ラルクは腕を組んでしばらく考え込む。

そして…ある『考え』を思いついた。

ラルク

「よし！ こうなったら空軍時代の伝統勝負事でケリを付けさせるしかねえな」

一同

「伝統勝負？」

ラルク

「そうだ！ 名付けて…」

ラルクは一度間を空けてから声を張り上げて宣言する。

ラルク

「『姫宮VSイエーガー 因縁と炎のファイナルドリームマッチ』  
いいいいいい！」

ミーナ

「な…なんなのその勝負！？」

ラルク

「まあ、要するにリング上でさまざまな勝負事で対戦させる決闘だ。しかもその勝負事は普通の戦いではなく「熱々あんかけ対決」や「ゴボウしばき合い対決」などかなり特殊な形式の戦いで挑ませるんだ」

リーネ

「なんか、どこかの深夜番組の特別企画で似たようなバトルあったよね？」

ルッキーニ

「うんうん。確か、ガ○の使い……」

ラルク

「シャラップ！これ以上は大人の事情が関わるので何も言うな！」

そう叫んで、ルッキーニの言葉をシャウトするラルク。

サーニヤ

「でも、そんな勝負で本当にシャーリーさん達は納得するんですか？」

ラルク

「心配無用！この勝負は空軍のガイルさんも「こいつは神聖な戦いなんだぜ！勝っても負けても文句はいっこなしだっぺ！キャッホーイ！ラブ注入！」って査察に来た大統領の前で宣言してた程だから」

クリス

「ウソつけ！特に後半の言葉は絶対言っていないだろ！ガイルのキャラクターに合っていないし！」

クリスのツツコみを他所にラルクは、自らの提案を満足するかのよう頷く。

ラルク

「じゃあ、さっそく2人が回復したら開催するでしょう！これは面白い勝負になりそうだぞおお！！」

芳佳

「面白いって言うか…大変な事になりそうな気がする…」

クリス

「ああ…」

こうして芳佳とクリスが不安に思案中、シャーリーと千歌音の戦いは予想外にド派手なスケールへと発展していくこととなった…

## 第12話 女の執念は恐ろしい…（後書き）

ラルクの提案によって幕が開けた『姫宮VSイエーガー 因縁と炎のファイナルドリームマッチ』。

リング上で繰り広げられる想像も絶する戦いにクリスも政胸も、皆たじたじ!？

芳佳

「要するにまともなバトルじゃないって事ですね…」



第13話 ハジケろ！炎のスーパードリームマッチ！（前書き）

すべては愛する者の為に：

己の愛……そしてすべてを掛けた少女達の意地と意地の壮絶な戦いが幕を開ける。

そうこれはまさに、神聖なる戦い！

ダンテ

「つというわけでいくら賭けるか？この勝負」

リュウ

「そうだな…シャーリーに2万くらい…」

クリス

「って言ってる傍から賭け事してんじやねえええええ!!」

### 第13話 ハジケろ！炎のスーパーファイナルハジケドリームマッチ！

加富根総合病院 30階 多目的ホール

通常、学会の説明会やスタッフの会議などに使われるこの部屋だが、今日はどこか雰囲気違っていた。

巨大なホールの四方には無数の椅子が並べられ大勢の観客が腰かけており、ホールの真ん中には白いマットのリングが用意され、その真上には多彩な色合いの照明が取り付けられている。まるで、どこぞの格闘技大会の会場のような雰囲気である。

そしてリングのすぐ傍らに用意された机と椅子のセットには、ラルクとルッキーニが座り、彼らの席の後ろには『スペシャルゲスト席』とへたくそな文字で書かれた立て看板が立てられ、その列の椅子には優希邑、クリス、芳佳、サーニャが腰かけていた。

ラルク

「じゃあ、そろそろ始めるか？」

ラルク達は観客が揃った事を確認すると、立ち上がってマイクを取り出し、声高く宣言する。

ラルク・ルッキーニ

「第1回加富根総合病院特別企画 チキチキ！ 己の愛の力にすべてを掛ける！

姫宮千歌音VSシャーロット・E・イエーガー 因縁と炎のスーパーファイナルハジケドリームマッチーーーーー！！！！」

観客

「「「ワアアアアアアア!!!」」」」

ラルクの宣言に会場内が一気に沸き起こるが、一方で『スペシャルゲスト』であるクリス達は白けている。

優希邑

「炎のスーパーファイナルドリームマッチって…」

芳佳

「完全に『ガ○使』ノリじゃないですか…」

クリス

「しかも、第1回なのにファイナルマッチって…」

サーニヤ

「適当感丸出し…」

クリス達は各々呆れる。

一方、ラルクとルツキーニはかなりノリノリである。すると、突然ルツキーニは白髪のカツラを被り、鼻眼鏡をかけた。

芳佳

「えっ…あの、ルツキーニちゃん?なんで急に仮装なんかし出すの?」

ルツキーニ

「えっ!?! キャラ作りだよ」

芳佳

「キャラ作り?」

ルッキーニは当然のように語ると、ラルクが会場に向かって自己紹介を始める。

ラルク

「さあ、始めました『姫宮千歌音VSシャロット・E・イエーガー 炎のスーパーファイナルハジケドリームマッチ』。

コミッショナー及び実況は私、ラルク・レッドフィールド。そして本日の解説は、女性の心境に詳しい『関東乙女大学』の瑠木威式るっき陀教授にだでございます」

ルッキーニ

「よろしく願います」

おじいさん声を作りながらあいさつするルッキーニ：否、瑠木威式陀教授。

クリス

「ネーミングもキャラ設定もメチャメチャ適当だな！おい！」

速攻でクリスはツツコみを入れる。

芳佳

「キャラ作りなら、もうちょっと捻ろうよ！」

ラルク

「はい。後ろのVIPゲストがいろいろとうるさいのでさっそく今回のゲームの説明に行きたいと思います」

ラルクはそう言うと、さっそくこの大会について説明を始める。

ラルク

「えー…読者の皆さんは前回の話を読んだのでわかると思いますが、私、ラルク・レッドフィールドとはある作者の意向によって、京都にてとある女性と恋愛フラグが立ってしまいました。しかし、私には本来、アメリカ空軍時代からの相棒にして、親友以上の女性がいきました。

そうになると、どんなことになってしまいますか？ 瑠木威式陀さん」

突然、ラルクは隣にいたルッキーニもとい瑠木威式陀…つかルツキーニでいいや。

ルツキーニに質問を振る。

ルツキーニ

「そうですねえ、こうなってしまえばおそらく起こりうる展開はただ一つ：想像も絶する修羅場でしょう」

おじいさん声で、丁寧に解説するルツキーニ。

ラルク

「その通り、そして瑠木威式陀さんの仰るとおり、彼女達は私がここへ帰還したその日から、壮絶なバトルを展開して今日に至っているのです。

そして、その壮絶な戦いを繰り広げる彼女達こそ、今回このリングに立つ千歌音とシャーリーなのです」

クリス

「他人事みたいに話してんじゃねえよ」

ラルクの言葉に呟くようにツツコむクリス。

ルッキーニ

「ちなみに彼女達が繰り広げた戦いの具体的内容は、前回の話を読んで確認してください」

芳佳

「あのおさつきから気になってたけど、ラルク君もルッキーニちゃんもメタ発言ばかりしてるけど大丈夫なの？」

冷や汗をかきながら心配する芳佳。

そこでサーニヤが挙手をして質問する。

サーニヤ

「でも一体どうして急にこんな大会を開催したんですか？」

サーニヤの問いかけにラルクが「待ってました」と言わんばかりに、得意げに答えだす。

ラルク

「よく聞いてくれた。これは俺の所属していた部隊での伝統行事だな。

收拾のつかない事が起ると、白黒つける為にこうしたりリング上を舞台に、力だけでなく己の『すべて』を使った特別な戦いを挑み、勝負にケリを付けさせるのさ。以前話しただろ？」

サーニヤ

「そ…そうですが…」

優希邑

「そんな神聖な戦いをこんな娯楽行事みたいにしてもいいんですか

「？」

ラルク

「だって、醜い女の争いをシリアスにやってもドロドロしてつままないだろうし、めんどくさいから、楽しくする為に考えたんだよ！」

クリス

「その女の争いを引き起こしたのは誰だと思ってんだ！？」

クリスは今度は大声で、身勝手な弟をツッコんだ。

しかし、ラルクはそのツッコみをスルーすると、さっそく大会を進め出す。

ラルク

「さあ、さっきからうるさいVIPゲストがいますが、さっそく大会の方に入らせてもらいます。まずは選手の入場！」

観客

「「「ワアアアアアアアアア！！！」」」」

すると会場内の照明が暗くなり、リングの右側から伸びた赤い花道の先にある赤色のゲートにスポットライトが当てられる。

ラルク

「まずは、赤コーナー 身長167cm！ アメリカが生んだスピード狂！「グラマラス・シャリー」の異名を誇る第501統合戦闘航空団の色気担当！シャーロット・E・イエーガー！！！」

観客

「「「ワアアアアアアア！！！」」」」

ラルクの紹介と共に、会場内に『スイートプリキュア』のOP『ラ♪ラ♪ラ♪スイートプリキュア♪』がBGMとして流れ始める。

芳佳

「なんでプリキュアが、シャーリーさんのBGMなんですか？」

ラルク

「中の人繋がりだよ」

芳佳の質問にラルクが簡単に説明する中、ゲートのカーテンが開かれて、シャーリーが気迫十分に見せながら歩いてくる。

そして彼女の後ろにはエーリカとバルクホルンがセコンドとして付いている。

バルクホルン

「なんで私達がこんなバカバカしいことを…」

エーリカ

「もう、私もトゥルーデも完全に汚れ役キャラになってるゝ（泣）」

2人は滝のように涙を流しながら、シャーリーに続いてリングに上がった。

ラルク

「続きまして青コーナー 身長165 cm！ 同性でも異性でも自分に惚れた者の為なら命を掛ける！愛にすべてを捧ぐ月の巫女！  
姫宮千歌音！！」



観客

「「「ワアアアアアアア！！！」」」」

すると、今度はリングの反対側にある青い花道の伸びた青いゲートにスポットライトが当たる。

同時にBGMが変わって、今度は『Fate／stay night』のOP『disillusion』が会場に流れる。

クリス

「ってまた中の人繋がりがいい！？」

クリスのツツコみが飛ぶ中、ゲートのカーテンが上がって奥から千歌音が、同じく凄まじい気迫を見せながら、リングに歩み寄る。その後ろに続く彼女のセコンドは、レベッカとこの子…

風

「うふふ。結構なご盛況ですねえ」

千歌音と同じ元曹魏五人衆の一人、風であった。

ルッキーニ

「千歌音選手。セコンドに知略の長けている風さんを選びましたか。これは油断ならないですねえ」

そして、二人の選手がリングに上がった所で会場の空気は一気に緊迫したものになる。

千歌音

「フツ…恋する乙女の本当の力を思い知らせてあげるわ」

シャーリー

「そっちこそ、私のラルクに対する想いの強さ…嫌という程、味あわせてやる！」

試合開始前にも関わらず、早くも闘志全開の2人。

その身体からはそれぞれ、赤と青のオーラが放たれる。

その雰囲気を見てクリス達も観客達も思わず恐縮する。

ルッキーニ

「さあ！ではさっそく、今回の対戦種目を発表にいきたいと思います…ってかこの喋り方面倒くさいから、もう普通に喋る！」

自ら、あっさりキャラを放棄するとルッキーニは、机に設置されたボタンを押す。

すると会場の端に立てかけられたボードを隠していた黒い布が外れ、今回の対戦種目の書かれたボードが露わになった。

ちなみにボード内に書かれていたのは、以下の14目であった。

『石鹼水鉄砲対決』

『ラルク式ヤール・ギュレシュ対決』

『熱湯タオルしばき合い対決』

『ぐるぐるハリセン対決』

『スペイン風トマト祭り対決』





すると：

《ビーッ！ビーッ！ビーッ！》

突然会場内に設置されたパトライトが点灯し、ブザーが鳴り響く。  
つと同時に観客席の裏手にあるドアが開き：

マツチヨA・B

「「sdcjsdv@jsdopvjsvoldsv○vsdzc  
sacsscxsdsacsscscs△dcbgbynufrowthx  
□czxs!」」

突然赤い禪一枚のみを身に纏い、サングラスをかけ、手にフランス  
パンを持った黒人のマツチヨが2人会場に乱入してきて、クリスの  
下に駆け寄ると。

マツチヨA

「コノ、フタマタロリコンヤロウガ!!」

《バシイイイイ!!》

クリス

「痛ああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー!!」

フランスパンでクリスの頭を思いっきり殴りつけた。  
そして、そのまま全速力で帰って行った。

観客

「「「「.....」」」」

優希邑・芳佳・サーニャ

「「「……………」」」

エーリカ・バルクホルン

「「……………」」

レベツカ

「……………」

風

「ほお、なかなか力強い人たちなのですよ」

あまりに突然過ぎる行動にラルク、ルツキーニ、風、シャーリー、千歌音以外の全員が啞然とする。

サーニャ

「あの……………なんですか？今の人達は？」

そんな中、サーニャが冷や汗をかきながらラルクに問いかけると、ラルクはクリスに殴られてできたタンコブを押さえて立ち上がりながら、澄ました顔で答える。

ラルク

「ああ、今のは俺の友人の傭兵『アドゴニー』と『マッスル』だ。二人とも『フランスパン真拳』の使い手で、今回の大会では『お仕置き執行者』を担っている」

優希邑

「『お仕置き執行者』って何！？この大会お仕置きとかあるんですか！？」

優希邑が仰天すると、ルッキーニが当然のように説明する。

ルッキーニ

「当然だよ。例えばさっきのクリリン見たいに、スタッフに暴行を働くなどフリーガン行為を行ったり、スタッフの決定事項に従わない観客に対しては容赦なくあの2人がやってきてSATUGAI…じゃなくしてお仕置きするからね♪」

芳佳

「あのお、ルッキーニちゃん…語尾に『♪』つけて可愛さを表現してるけど、言ってる内容がメチャクチャ怖いから…」

ラルク

「ちなみにあの2人はおっかないぞ。なんたってアフリカの内戦地帯で5万の軍勢に対してたった2人で挑み、しかも武器はフランパン一本で敵を全滅に追いやった実力者だ」

ラルクの言葉に観客達や芳佳達は一気に青ざめる。  
おそらく、これで大会の邪魔をする人間は絶対に出ないであろう。

ラルク

「しかしまあ、そこで気絶しているクリスさんの言うとおり、さすがに『百合S○X対決』は後々問題が懸念されますので、種目候補から外す事にします」

犠牲は大きかったもののなんとかクリスのおかげで、この小説の居場所を守られた。

シャーリー

「なあ、いつまで大会の説明してるんだ？」

千歌音

「私達は早く始めたいんだけど」

周囲の事より自分達の勝負に執着するシャーリーと千歌音がラルク達を急かす。

ラルク

「おっと忘れてた。ゴメン二人とも…」

そう言うと、ラルクとルッキーニは中継席に座り、芳佳達は気絶したクリスを引きずってVIP席に戻った。

ラルク

「それでは早速、第3回戦を始めたいと思います！」

観客

「「「ワアアアアアアアアア！！！」」」

芳佳

「ってちよつとラルク君。なんで1回戦からじゃないの？」

ラルク

「既に2人は、1回戦『スパ？対決』、2回戦『大食い対決』とやってるからな。故にこれは第3回戦となるだろ？」

芳佳

「そういう問題かな…？」



と心配する芳佳を尻目に、ラルクは最初の種目名を唱える。

ラルク

「最初の種目名はこれだ!!……『ラルク式ヤール・ギュレシユ対決』 うううう!!」

観客

「「「ワアアアアアアアア!!」」」

そして加富根総合病院史上最も白熱したハジケ対決が幕を開けた…

### 第13話 ハジケろ！炎のスーパーファイナルハジケドリームマッチ！（後書き）

ついに始まる『姫宮千歌音VSシャーロット・E・イエーガー 炎のスーパーファイナルハジケドリームマッチ』。

第一種目『ラルク式ヤール・ギュレシュ対決』とは…？

ラルク

「ここでお知らせだ。今回の『炎のスーパーファイナルハジケドリームマッチ』の対戦種目の中で、どの対決が見てみたいカリクエストを募集する！」

ルッキーニ

「なお『熱々八宝菜対決』と『ゴボウしばき合い対決』は既に決まってるから、残り3競技の種目を以下の対決候補の中から選んでね」

『石鹼水鉄砲対決』

『熱湯タオルしばき合い対決』

『ぐるぐるハリセン対決』

『スペイン風トマト祭り対決』

『納豆K-1対決』

『カレー粉かけ合い対決』

『みたらしレスリング対決』

『金平糖合戦対決』

『ファイアーパフォーマンス対決』

『スイカフットサル対決』

政胸

「ところで、なんで今回私登場してないのよ。優希邑は出てるのに」

ラルク

「お前は後半に重要な役目を司っての登場予定だから、それまで我慢してなっ」

政胸

「頼むわよ本当。最近影薄化が心配されてるんだから、ここらでガン活躍したいのよ」

ラルク

「わかったよ。それではリクエストお待ちしております」

## 第14話 超危険！？初戦早々混沌な戦いへ！（前書き）

ラルク

「ついに幕が開ける女の執念をかけた戦い！その激闘を制するものはシャーリーか？千歌音か？それとも…」

クリス

「かつこよくナレーションしてるけど、もはやこの話がシリアスだと思ってる奴は誰もいないと思うぞ」

## 第14話 超危険！？初戦早々混沌な戦いへ！

ついに始まった『シャーリーVS千歌音 因縁と炎のスーパーファイナルハジケドリームマッチ』。

第1回戦（事実上3回戦）の種目は『ラルク式ヤール・ギュレシュ対決』といういきなり色物全開な種目であった。

芳佳

「ええつと：『ラルク式ヤール・ギュレシュ』って一体？」

芳佳の質問に、ラルクはマイクを握ったまま会場内の全員に聞こえるように答える。

ラルク

「まあ掻い摘んで言えばトルコの国技『ヤール・ギュレシュ』を俺が独自ルールで改善させた競技だ」

芳佳

「っていうか、そのヤール・ギュレシュという競技自体よくわからないんだけど」

芳佳がそう言うのと、ラルクは「そう来ると思って」とつぶやきながら一枚のDVDを取り出す。

ラルク

「では、そんなVIPゲストの為にここにヤール・ギュレシュとはどういった競技か説明した映像があるので、今からこのVTRと共に説明したいと思います。会場の皆様。会場前方のスクリーンをご覧ください」

そう言ってラルクがルッキーニに合図を出した。

それを受けたルッキーニはプロジェクターにDVDを入れた。

ルッキーニ

「じゃあさっそく。VTR：チエケラ！」

エーリカ・バルクホルン

「「古!?!」」

ルッキーニの時代錯誤な言葉使いにリングの端からツッコむエーリカとバルクホルンを他所に、部屋が暗くなり、ラルク達の後ろに設置された巨大スクリーンに投影され始めた。  
そこに映っていたのは…

芳佳

「ね…クリス君…今日こそいいでしょ?／／／／／」

クリス

「芳佳…／／／」

サーニヤ

「早くクリスさんが元気になるように…私達からで『治癒』をしてあげたいのです…／／／／／」

クリス

「サーニヤ…／／／」

芳佳・サーニヤ

「「ん…／＼／」」

しばらく前にラルク達が盗撮した。  
クリスと芳佳、サーニヤの『夜の営み』のシーンであった…

一同

「「「……………」」」

数秒間、会場内に沈黙が走った。

ラルク

「あっ…ゴメン、これ兄貴達の濡れ場を盗撮したDVDだった」

芳佳・サーニヤ

「「…って何撮ってるんですかああああああああ！！！！」」  
怒」」

芳佳とサーニヤが顔を赤くしながらラルクの頭を殴ろうとして、優希邑に止められる。

芳佳

「優希邑さんどいてください！こいつ殺せません！！」

優希邑

「駄目ですよ芳佳ちゃん！サーニャちゃん！下手にラルクさんに手を出したら、またあのフランスパン持った人達がやってきますわ！  
」

怒り心頭の芳佳を必死に宥める優希邑。

その後、優希邑は1分程かけて、なんとか芳佳とサーニャの機嫌を直した。

ラルク

「えーと…では今度こそ、ヤール・ギュレシュについて説明したV  
TRをどうぞ」

ラルクは謝罪の言葉と共に、今度こそヤール・ギュレシュの説明V  
TRを再生した。

すると、モニターにはトルコのヤール・ギュレシュチャンピオンで  
あり、世界的有名な油メーカー社長のハカント、何故かクラウザー  
が油まみれになりながらリングに向かい合っている。

エーリカ

「なんでクラウザーの親父がヤール・ギュレシュやってんのおおお  
おおお！！？」

ラルク

「あれ？知らなかったの？クラウザーの親父って実はアメリカのヤ  
ール・ギュレシュ界の英雄的選手だったんだぜ」

サーニャ



「そうだったんですか!？」

クラウドザーの親父の意外な経歴に驚く一同。  
一方モニターでは…

ハカン

「《うおりゃあああああああああああ!》」

クラウドザー

「《せいやあああああああああああ!》」

互いに油まみれの身体で組み討つハカンとクラウドザー。  
映像の中では二人が身体をぶつけ合うたびにそれぞれの汗と油が宙に舞うのが見える。

ラルク

「まあ、要するに油を塗って戦う相撲だと思ってください。ちなみにこれはトルコの伝統ある国技だそうです」

得意げに説明を終えるラルク。

しかし、映像を観た会場からの反応は…正直微妙である。  
戸惑い8割、不快感2割の空気が会場内を包む。

「お…おお…」みたいな。

クリス

「おい、なんかメチャクチャ微妙な空気になってるぞ…」

復活したクリスが、会場内の空気を見て冷や汗を浮かべる。  
しかし、これからそのヤール・ギュレシュで実際に戦うシャーリーと千歌音は、寧ろやる気満々である。

千歌音

「いいわ。逆にそういうマニアックな競技の方がやる気が起きていいと思うわ」

シャーリー

「確かにそうだな。それに千歌音が油まみれの無様な姿になるのもいい気味だしな」

バルクホルン

「いや、だからお前も油まみれになって戦わないといけないんだぞ」

リング脇からバルクホルンがシャーリーにツッコみを入れる。

ラルク

「では早速競技に行きたいと思います！二人とも、準備はOK？」

シャーリー

「ああ！」

千歌音

「いつでもいいわ」

すると2人は、その場で服を脱ぎ棄てて服の下に着ていた競技用の衣装を晒す。

シャーリーはバニーガール風のうさぎの耳としっぽが付いた赤いビキニ水着：千歌音は青いレオタード姿であった。

観客

「」「」「うおおおおおおおおおおおおおお！！」「」「」

二人の刺激的な衣装に興奮しだす観客達。  
するとそれぞれのセコンドの下に大量の蜂蜜が入った鍋が運ばれてくる。

芳佳

「あれ、蜂蜜！？油じゃないの！？」

ラルク

「だって『ラルク式』って言ったじゃんか。このゲームの独自ルールとして、今回身体に塗るのは油じゃなくて蜂蜜に変えてみたんだ」

サーニャ

「なんで蜂蜜に変える必要があるんですか？」

ラルク

「その方が面白味があるからな」

ラルクは当然のように答えると、さっそくそれぞれのセコンドに、蜂蜜を2人に塗るよう指示した。

レベツカ

「ああゝあ…せつかくの仕事休みの日に、私なにやってんだろ…」

風

「まあまあ、仕方ないですよ」

千歌音

「二人とも喋ってないで早く塗って」

バルクホルン

「仮にもストライクウィッチーズの一員がこんな悪ノリ全開な勝負に本気を出すなんて、恥ずかしいと思わないのか？」

シャーリー

「これもラルクをあの子狐から守る為だよ」

エーリカ

「だったら私達まで巻き込まないでよー！」

殆どやる気の出ないセコンド（風を除く）達とは裏腹に、シャーリーと千歌音は互いに闘志を上げながら、身体一杯に油代わりの蜂蜜を塗りたくる。

そして、ついに試合の準備ができた。

ラルク

「さあ！いよいよ試合開始です！では二人とも身構えて」

ラルクの言葉に、互いに拳を構えるシャーリーと千歌音。

ラルク

「では、『ラルク式ヤール・ギュレシュ対決』…ようい！！」

《チーン》

ラルクの合図と共にトライアングルを鳴らすルツキーニ。

クリス

「しよばいなオイ！普通鐘だろ！」

クリスのツツコみを他所にスーパーファイナルハジケドリームマツチのゴング(?)が鳴った。

シャーリー

「ふっ…目に物見せてやる」

千歌音

「そっちこそ…」

2人は互いに殺気を出し合いながら、身構える。

そして頃合を見計らって両者同時に足を踏み出してリングの真ん中へ…

《ズルッ!》

《ガンッ!》

シャーリー・千歌音

「「だう!?!」」

だが2人がリングの真ん中に着地した瞬間、2人は同じタイミングかつ同じ姿勢ですっ転び、同じ後頭部を強打してしまう。

クリス

「っていきなりすっ転んでるじゃねーか!」

さっそくクリスのツツコみが飛ぶ。

シャーリー

「や…やるなアンタ…」

千歌音

「ふふ…貴方もね…」

レベッカ

「いや、どっちも勝手に転んだだけじゃない!!」

レベッカからもツッコみが浴びせられる中、シャーリーと千歌音は立ち上がろうとするが…

《ズリンッ!》

《ガンッ!》

シャーリー・千歌音

「「へぶう!?!」」

再びシャーリーと千歌音は転び、リングの床で頭を強打。  
何とか立ち上がろうとするが…

《ズリンッ!》

《ガンッ!》

《ズリンッ!》

《ガンッ!》

《ズリンッ!》

《ガンッ!》

：つとこんな調子で転んでは頭を打つを繰り返していく内に、二人の身体だけでなくリングの床までもが蜂蜜だらけになっていく。

クリス

「いや、もうこれ試合になってねえだろ!!!」

クリスは怒声とツツコみをミックスさせてラルクに向かって叫ぶ。するとラルクは「おかしいな」と頭を掻く。

ラルク

「もしかして蜂蜜にガソリンとベンジン混ぜたのまずかったかな？」

芳佳

「ガソリンにベンジン!?なんでそんなものが入れてるの!？」

ルッキーニ

「アタシのアイディアだよ。だって油塗って戦うんでしょ？」

ルッキーニの言葉に仰天するクリス達。

優希邑

「油は油でもガソリンやベンジンなんて人の身体に塗るもんじゃないじゃないですか!」

ルッキーニ

「ウジャ!?!そんなに危ないの!?!」

クリス

「危ないどころの問題じゃないだろ！引火してこの病院が吹っ飛んでもしたらどうするんだ！！」

クリスはルッキーニを叱ると、すぐにセコンドに向かって注意を呼びかける。

クリス

「おい！バルクホルン！ハルトマン！あの二人を止めろ！」

バルクホルン

「わ…わかった。おい二人ともいい加減に…」

言いながらバルクホルンはエーリカを連れてリングに上がる。

芳佳

「あっ！？バルクホルンさん！ハルトマンさん！よく考えたら、そのリングの上は…」

芳佳が止めるのと、エーリカとバルクホルンがシャーリーや千歌音が転げまわったせいでガソリン・ベンジン入りの超危険蜂蜜が浸透してしまっていたリングの床に足を乗せたのは同じタイミングだった。

《ズリンッ！》

《ガンッ！》

エーリカ・バルクホルン



「「だううう!?!」」

そして当然ながらバルクホルンやエーリカも派手にすっ転ぶ。  
超危険蜂蜜にすっ転ぶシャーリーと千歌音に、バルクホルンとエーリカが加わって、ますます試合どころではなくなってしまった。

シャーリー

「ど…どうしたんだよ女狐! さっきから転んでばかり…だう!」

《ズリンッ!》

《ガンッ!》

千歌音

「そ…それは貴方だって同じでしょ…ぎゃあ!」

《ズリンッ!》

《ガンッ!》

バルクホルン

「うわあああああああ!?!」

《ズリンッ!》

《ガンッ!》

エーリカ

「誰か助けてええええええええええ!?!」

《ズリンッ！》

《ガンッ！》

シャーリーと千歌音は互いを罵り合いながら、半ば巻き込まれてしまったバルクホルンとエーリカは喚きながら、超危険蜂蜜の海をそれぞれベトベトの身体で、のたれうち回る。

こうなれば観客達も声援を送るに送れず、クリスにもこう呟く事しかできなかった。

クリス

「腐ってやがる……………バカ過ぎたんだ…」

第1回戦（事実上3回戦） 『ラルク式ヤール・ギュレシュ対決』

結果……………試合にならない為、引き分け。

## 第14話 超危険！？初戦早々混沌な戦いへ！（後書き）

開始早々、カオスな事になった『スーパーフアイナルハジケドリ  
ムマツチ』。

果たしてこんな調子でシャーリーと千歌音は決着をつけられるのか？

次回、第2回戦開始！

## 第15話 火傷注意のファイヤーパフォーマンス対決！（前書き）

ラルク

「おい：前回の話から二か月も経ってるってやばくないか？作者」

charley

「あははは：ほんと自分でもほったらかし過ぎたって反省してるよ」

政胸

「っていうかぶっちゃけどんな話だったのかも忘れてる人いたりして？」

charley

「アハハハ：もうこうなったら笑ってごまかそうか？」

クリス

「ごまかすな」

## 第15話 火傷注意のファイヤーパフォーマンス対決!

初戦早々、ガソリン、ベンジン入り超危険蜂蜜まみれでベトベトというカオスな展開となった『姫宮千歌音VSシャーロット・E・イーガー 炎のスーパーファイナルハジケドリームマッチ』。早くも先が思いやられるクリス達を他所に、試合は第二戦へ。

ラルク

「次の種目は：『ファイヤーパフォーマンス対決』 うううう!!!」

観客

「「「ワアアアアアアアア!!!」」」

ラルクの宣言と共に会場内にBGMが流れて、観客達は大きく湧きあがった。

芳佳

「えーと：ファイヤーパフォーマンスって？」

ラルク

「要するに、いかにして相手より巧みに火を操ってイリュージョンを見せるか競う競技だ」

ラルクはそう言いながら一本の松明を取り出して火を灯す。

ラルク

「ちなみにこの松明の火。一見すれば普通に見えるだろ」

サーニャ

「それがどうかしたんですか？」

ラルク

「実はこの火はなんと…」

ラルクはそこまで話すと急に沈黙する。

彼の沈黙する姿を見て、思わず周囲の人間は息を飲んだ。  
この松明の火に一体どんな秘密が…

すると、ラルクは唐突に松明をクリスの方に向けて…

クリス

「へっ!？」

ラルク

「ふうふううう!!」

《ゴボボボボボボボボ!!》

クリス

「あぎゃあああああああああ!？」

そのまま松明の火に息を吹きつけて、クリスの顔面に火を噴きかけた。

クリス

「どあああちちち!! ギャアアアアアアアアア! か…髪が  
ああああああ!」

芳佳・サーニヤ

「く…クリス君！？」

顔が黒焦げになり、髪の毛が縮れて床を転げまわるクリスを尻目に、ラルクが松明をかざしながら説明する。

ラルク

「このように、クリスの兄貴に火をかざすと兄貴の顔は燃えてしまうのです」

クリス

「誰にやってもそうなるんだよ！いちいち無駄に実演するなバカ！」

とんだ肩すかしの説明だった上に、顔に火をつけられたクリスが、サーニヤの差し出した水で顔を冷やし、芳佳にやけどの手当てを受けながらラルクを怒鳴りつけた：

ハチャメチャな前座の後、さっそくリングの上では二回戦の準備が進められた。

しかし、なぜかリングの上には先程の超危険蜂蜜が残されていた。

優希邑

「って危なくないですか？ガソリン入りの蜂蜜の充満したリングでファイアーパフォーマンスって？」

優希邑はハラハラしながら、問いかけるがラルクは平然とした表情で答える。

ラルク

「それが逆に面白いんだってば。これぞ真正正銘のデスマッチつてやつさ。命をかけて戦う美女程萌えるものはないからなあ」

わざとリングに聞こえるような大声で話すラルクの言葉を耳にした途端、リング状でスタンバイしていたシャーリーと千歌音は互いに闘心を燃やし始める。

千歌音

「フフフ…聞いたかしら？ラルクは命をかけて闘う美女程タイプらしいわね。さっきは不覚だったけど、今度こそ貴方に吠え面かせてあげるわ」

シャーリー

「アンタのアホ面よりマシだろ？アタシは常に命かけて戦場で戦ってるから、アンタの薄っぺらい闘志なんかと一緒にされるのはお門違いだね」

互いに相変らずの殺気を見せながら2人は、そう言いながら互いにマントを羽織り、リング脇に待機して互いににらみ合っていた。

バルクホルン

「おい、やる気を見せるのはいいが今度は私達がとばっちりを受けない戦いをやってくれ」

エーリカ

「うゝ…まだ蜂蜜のベトベトが残ってるゝゝ…」

さっきの試合でシャーリー達と共に蜂蜜地獄に入ってしまった、ひどい目に遭ったエーリカとバルクホルンが迷惑そうな表情を浮かべながらシャーリーの身支度を手伝う。



一方、千歌音側のリング脇では同じく千歌音の身支度をしながらレベッカが前もって忠告する。

レベッカ

「あのお：姫宮さん。今度蜂蜜まみれになっても私絶対助けませんからね。さっきのバルクホルンさん達みたいにとばかり受けるのはこりごりですから」

そう不安げな表情で話すレベッカの肩を、小さな手が軽く叩く。

風

「大丈夫ですよ。こういう時に備えて、これを着ていれば問題はありません」

そう話す風は、なぜか消防士が着るような防火服を着用し、手には消火用ホースが握られていた。

レベッカ

「なんで防火服！？ってかどっから持ってきたのよそれ！？」

風

「禁則事項なのですよ」

レベッカ

「そんな某未来人みたいな言い方しないでください！！」

風

「レベッカさんもうどうです？」

レベッカ

「いらないですよ!!」

向こうも向こうならこっちもこっちである。

どちらのセコンドも実に混沌に満ちた状態であった。

そして、第2回戦（事実上4回戦）の幕がついに上がる。

リングの上には互いに2本の松明を持った、シャーリーと千歌音がマントを脱ぎ、先程と同様にバニーガール風のうさぎの耳としばが付いた赤いビキニ水着と青いレオタード姿で互いをにらみ合う。

ラルク

「では、『ファイヤーパフォーマンス対決』…よい!!」

《ブブブブブブブブブブブブブブブブ!!》

ラルクの合図と共に今度はブブゼラをクリスの傍で向かって吹くルツキーニ。

クリス

「なんで俺に向けて吹くんだよ!？」

ルツキーニ

「ノリだよ!ノリ!」

ルツキーニのブブゼラとクリスのツツコミをゴング代わりにして『ファイヤーパフォーマンス対決』の幕が上がった。

シャーリー

「おらおらおらおらあーーーーー!!」

千歌音

「はあああああああああああああ！！」

ゴングと共に互いに手にした松明を激しく回転させながら火を振りかざすシャーリーと千歌音。

芳佳

「っていうかファイアーパフォーマンスってあんな格闘技じみた競技だったっけ？」

サーニャ

「細かい事は気にしちゃダメだよ。芳佳ちゃん」

明らかに競技として間違っているファイアーパフォーマンスにツツコミを入れる芳佳を横から宥めるサーニャ。

一方ラルクは、観客達と共に歓声を上げながら2人の戦いぶりを見守る。

ラルク

「おおお！今のシャーリー選手の松明の振り方、キレがあってよかったですねえ！解説の溜木威式陀さん。この試合どちらに軍配が上がると思いますか？」

ルツキーニ

「そうですねえ。シャーリー選手は固有魔法を失っても持ち前の運動神経で常人より優れたスピードを持っていますから、この試合では非常に有利だと思います」

芳佳

「あつ、やつと解説らしい仕事やってるね。ルツキーニちゃん」

珍しく、解説者らしい事を言い始めたルツキーニに感心する芳佳。  
すると、ラルクも実況っぽい口調で話し始める。

ラルク

「なるほど。ではこの試合はシャーリー選手が有利である?」

ルツキーニ

「しかし、打撃の強さは姫宮選手の方が上ですからねえ。もし接近戦に持ち込み過ぎて、それこそ大きな一撃を受けてしまったら忽ち軍配は姫宮選手に上がってしまいます」

ラルク

「なるほど、ではシャーリー選手も決して油断はできないという事ですか?」

ルツキーニ

「そういう事になります」

本格的な実況と解説をし始めたラルクとルツキーニ。

そんな2人のやり取りを見て、今度こそまともな試合になると安心しかけたクリス。

そんな自分の安堵が、またしても裏切られるとも知らないで…

シャーリー

「はあ! はあ! はあ!」

千歌音

「はあ！はあ！はあ！」

松明に灯る炎の熱と、それを持ってリング状を激しく動き回った事で全身汗だくになりながら息を切らせて対峙する2人。  
現在試合開始から3分が経過していた。

ラルク

「うーん…このままじゃ客も飽きるだろうから、そろそろ『アレ』持ってこさせるか」

一向に進まない戦況に業を煮やしたのか、ラルクが不意に手を叩きだす。

すると、またしても例の謎の黒人コンビ アドゴニーとマッスルが大量の瓶の入った箱を抱えてやってきた。

芳佳

「今度は何するんですか？」

不安になる芳佳を尻目に、アドゴニーとマッスルの2人はリングの脇にそれを置くと、中から髑髏マークのラベルが貼られた瓶を取り出す。

アドゴニー

「コレ使ッテドスエ！」

アドゴニーの謎の言葉と共に、2人の手からリング上に向かって瓶が投げられる。

それを受け取ったシャーリーと千歌音は見つめ合い、ニッと笑みを浮かべた。





レベツカ

「熱ううううー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！い！！なんでこうなるのおおお  
おお！？」

風

「あゝあ。だから防火服をお薦めしたのに」

千歌音に火を吹きかけられ、尻に火がついて走り回るレベツカと、  
その姿を見て首を横に振る防火服を着た風。  
さらにシャーリー側でも：

バルクホルン

「こつちに向けて吹くなイエーガー！ うわああああ！！火の粉  
が服にいいいい！！」

エーリカ

「ギャアアアアアア！ズボンが少し燃えてきたあああああ！」

先程燃料入り蜂蜜のせいで燃えやすくなっていたバルクホルンとエ  
ーリカが悲鳴を上げながら必死でリングから飛んでくる火をよけま  
くっていた。

クリス

「おいラルク！お前これなんとかして！」

クリスが芳佳に点いた火を何とか消し止めながら、ラルクの方を向  
くと：

ラルク

「チッ！これまだ半生じゃねえか」



ルッキーニ

「うじゃ〜！上手に焼きました〜♪」

吹き交わされる炎を使って生肉を焼いていた。

クリス

「ってなに呑気に肉焼いてんだテメエらは！！」

クリスがそうツッコむとラルクはモンスターハンターの肉焼きソングを鼻歌で歌いながら、肉を飛んでくる火に炙る。

ラルク

「よっしゃ！上手に焼きました〜！」

クリス

「やめろ！余計腹立つわ！特に最後の『上手に焼きました』ってのが！」

クリスは怒鳴りながら、焼き上がったこんがり肉を食べるラルクに詰め寄る。

クリス

「それより、あれなんとかしろよ！このままじゃ会場が全焼しちまうぞ！」

ラルク

「マジで！？……あ！本当だ！確かにこれはマズイな！……ちょっと半生肉だったな」

クリス

「いや、だから肉の事じゃねえよ！つうかボケてる場合か！？」

齧りかけの肉を見て不満げに話すラルクにクリスのツツコミが飛ぶ。  
「あっちだ！」と叫ぶクリスの言葉を聞いて、ラルクがリング上を見らるゝと：

リング外に飛び回るお構いなしに火を吹き続けるシャーリーと千歌音。

観客席の中には既に引火してパニックになっている客の姿もあった。

ラルク

「あゝゝゝ。これはもう危険極まりないな。ルッキーニ、あいつら  
を呼んで」

ルッキーニ

「え？あいつらって、アドホニーとマッフル？」

クリス

「って食いながらしゃべんな！！」

こんがり肉を食らいつきながら話すルッキーニに、ツツコむクリス。

ラルク

「そうそう。このままじゃ試合になんないから一端ストップさせよう」

ルッキーニ

「了解！じゃあさっそく…」

《ポチッ》

《ビーッ！ビーッ！ビーッ！》

叫びながら例のボタンを押すルッキーニ。

するとまたしてもパトライトが点灯し、ブザーが鳴り響く。

アドゴニー&マッスル

「「s d c j s d v @ j s d o p v j s v o l d s v ○ v s d z c  
s a c s c s × d s a c s c s c s △ d c b g b y n u f r w d x  
□ c z x s ! !」」

すると今度は何故か消防団員の格好をしたアドゴニーとマッスルの2人が会場に駆け込んできた。

ちなみに彼らの手にはフランスパンではなく、消防用ホースがあった。

マッスル

「消化！…開始！…デッセエエエ！！」

マッスルの合図と共にリング上に向けられたホースの先から液体が飛び出した。

それを見た会場の誰もが火が消えると安心した…

しかし…アドゴニー達の噴射した液体が、いまだ火を吹き交わしているシャーリーと千歌音に直撃すると同時に…

《ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！  
！》

突然、会場は爆炎と轟音に包まれた…

しばらくして…会場内は黒焦げになり、全員が煤と灰に塗れていた。しかしそれでいて、死者が一人もないのはギャグ小説の定義である。

クリス

「あがが………」

芳佳

「ケホ！ケホ！」

サーニャ

「な…なにが起きたんですか？」

瓦礫の中からなんとか這い出してきたクリス達が真っ黒になりながら煙を吹く。  
すると彼らの近くの瓦礫から同じく黒焦げになったラルクとルッキーニが這い出てきた。

ラルク

「痛てて…まったく何が起こったんだあ？」

ルッキーニ

「うにゃくくく！折角のこんがり肉がコゲ肉になっちゃったよくく」

どうやら、ラルク達もこの爆発は予想していなかったのか状況を理解できないでいた。

困惑するラルクに詰め寄るクリス。

クリス

「ラルク！お前今度は何しでかしたんだ！？」

ラルク

「俺だってわかんねえよ！二人の火を消そうとして水かけさせたら急に爆発して…」

ラルクが必死に弁明しかけた時、突然瓦礫の中から何故か無傷のアドゴニーとマッスルが姿を現す。

アドゴニー

「a d a o d a l d j s f j s d v b f u v b e d j k u b h b  
j d r t j k v v n s n z l k c v n s d f h s u c b s h」

ラルク

「えくく…何々？…あゝ、そうだったのかあ」

突然、アドゴニーがラルクにしかわからない謎の言語でラルクに耳打ちし、何かを話しかける。

クリス

「なんて言ってるんだ？」

ラルク

「いやあ、なんでもアドゴニー達。水と間違えてさっきの危険蜂蜜をぶっかけちまったらしいんだ」

クリス

「はああああ！？なんだそりゃ！？」

あまりにくだらな事真相に呆れかえるクリス。  
するとアドゴニー達はまたしても謎の言語で語り出す。

ラルク

「『まあ、悪気はなかったんだ。許してやりなチェリーボーイ』……  
だつてさ」

クリス

「誰が童貞だ！<sup>チェリーボーイ</sup>禪一枚の変態黒人に童貞扱いされたかねえよ！」

芳佳

「お、落ち着いてってばクリス君！　そ、それよりシャーリーさんと千歌音さんはどうしたんですか？！」

怒鳴り出すクリスを宥めながら、芳佳がそう訊ねつつリングの方に顔を向ける。

すると、リングの上では……

シャーリー

「い……いい加減……ギブアップしろよ……」

千歌音

「あ…貴方こそ……」

両者共に黒焦げになり、とつくに火が消えてしまっているにも関わらず、未だ松明を持ち、互いに振り続けるシャーリーと千歌音があった。

芳佳

「ま…まだやってるの？」

ラルク

「本当に凄い執念だなあ」

ルッキーニ

「でも、もうキリがないから引き分けて事で…」

第2回戦（事実上4回戦）『ファイヤーパフォーマンス対決』

結果………事故により会場が爆発した為、引き分け。

## 第15話 火傷注意のファイヤーパフォーマンス対決！（後書き）

芳佳

「つていうか。原作では既に金山企業突入編に入ってるんですよ？  
？どうするんですか？時系列的に」

charley

「まあ、一応そこは時間差トリックって事で誤魔化してよ。『今回の事件は本編における最終決戦編より少し前の話です』的な」

芳佳

「（それでいいのかな？…）」

次回、甲乙付け難い勝負にまさかの新展開が…！？

優希邑

「つていうかまた2か月も空けるような事はしないでくださいよ」

charley

「ハイ…氣ヲ付ケマス」



ここでもやっちゃう？ リビングタイム1（前書き）

ラルク

「今回は久々に政胸が登場します」

芳佳

「政胸さんって…確かこの作品のメインヒロインなんですよね？」

クリス

「なのにこの扱いって一体…？」

## ここでもやっちゃう？ リビングタイム1

加富根総合病院 429号室。

ラルクは政胸、クリス、芳佳達と共に、サーニヤが持ってきた『バ  
イオハザード？ アフターライフ』のBDを観ていた。

クリス

「うーん…自分の事ながらなかなかいい活躍してるじゃないか」

ラルク

「そりゃ『プリズンブレイク』のウェントワース・ミラーが演じて  
るからねえ。かつこいいのも当然だぜ」

政胸

「でも、剃り入り坊主頭ってのはいまいちだと思うけどねえ…」

それぞれにベッドや床に寝そべって寛ぎながら談笑する3人に対し  
て芳佳とサーニヤはジッと惚けた表情で映像に映るクリス（映画版）  
の活躍場面を見入る。

芳佳・サーニヤ

「「クリス君（さん）」」

政胸

「……………芳佳とサーニヤってば、さっきからやけに顔を赤くしな  
がらに観てるんだけど？」

ラルク

「まあ、無理もないかな？そもそも2人がクリスの兄貴に惚れたのも、クリスの兄貴がこうしてメインキャラになって、弟の俺がこの作品に出てきたのだって、すべてはこの映画からはじまったんだからな」

クリス

「お…おい！ラルク！」

政胸

「?…どういうことよ？」

首をかしげる政胸に対し、ニヤニヤと笑いながら説明しようとするラルクに対し、クリスは慌てて止めに入る。

クリス

「よしてくれ！もう昔の話だろ」

ラルク

「なんだよ兄貴。いいじゃねえか。そもそも今日はこの外伝がなぜ生まれたのかその歴史を辿るという意味もあるんだからな」

政胸

「へえ、面白そうじゃない！聞かせて聞かせて！」

ラルク

「えーと…そもそもこの作品の本編『BSAA学園!』の事は判っているよな？」

政胸

「もちろん。『どスケベ拳法使いの零斗がいろんな作品の世界感ぶ

ち壊して忙しないギャグワールドを作るカオス小説』でしょ？」

クリス

「お前、龍の骨を怒らせたら作者が大変な事になるから二度とそんな事言うな…」

すみません。龍の骨さん…

芳佳

「それでその『BSAA学園！』の『第十六話 空を飛ぶ魔女』において、私達ストライクウィッチーズが初登場して…」

サーニャ

「その次の『第十七話 ハジケろ！夏のサマースペシャル！』でクリスさんが初登場したわけです」

クリス

「…って2人共いつの間に会話に入ってきたんだ？！」

さっきまで映画を観ていたはずの芳佳とサーニャが会話に混じっていた事に驚くクリス。

政胸

「いいの？映画は？」

芳佳

「はい。今はクレアさんと処刑マジニとの戦闘シーンだから別に観なくてもいいので」

クリス

「（クレアが聞いたらキレるぞ…）」

さり気なく毒づく芳佳に軽く引くクリス。

サーニヤ

「でも、実はその話ではまだクリスさんと私達って接点がなかったんですよね？」

芳佳

「そうそう。きっかけは確か、当時まだ作者デビューする前だったcharleyさんが感想枠に書いたショートストーリーでクリス君に私達をバカにさせた事がきっかけだったよね？」

政胸

「えっ！？ そうなの？！」

ラルク

「乙女をいじめるなんて最低だぜ！ 兄貴！」

クリス

「違うわバカ！ この時の俺はまだキャラが確立してなかったからな。Charleyの野郎が俺のキャラ付けとウィッチーズと絡みに持っていていかせようとして勝手に考えたネタだったんだ。

今の俺にはこれっぽちもこいつらをバカにする気はないって」

政胸

「ふうん。んで？ どうなったの？ それから」

クリス

「まああれだよ。ウィッチーズに北極に飛ばされたり、芳佳に奴隷

的な扱いを受けたりと、しばらく仲が良くなかったんだけどな。零斗に仲介されて和解してからは普通に友人関係になってたさ」

政胸

「えっ?! 北極って何? 奴隷って何?」

政胸は思わず繭を顰めたが、クリスはそれ以上何も説明しなかった。芳佳の方に顔を向けても…

芳佳

「ん?…なんですか? 政胸さん」

いつものあどけない爽やかな笑顔を浮かべるだけで何も説明してこなかった。

政胸

「(一体その期間にこいつらの間で何が起きたっていうの!?)」

内心怖くなる政胸だった。

クリス

「んで、友人関係だった俺達の関係が変わるきっかけだったのがこの『バイオハザード? アフターライフ』だったわけだ」

サーニャ

「そう。私がお休みの日にちょっと映画館に行った時に何気なく観てたんですけど、劇中に出てきたクリスさんが格好良くて…」

政胸

「でも映画のクリスとこの作品のクリスって別人って設定なんでし

よ？」

クリス

「そうなんだよ。実はその時の俺の悩みがそれだったんだ？」

政胸

「?…っというത്？」

ラルク

「おおっと。百聞は一見にしかずだぜ」

政胸がさらに問いかけようとすると、突然間に割って入りだすラルク。

その手には何故か I Pad があつた。

ラルク

「これを観てくれ」

そう言いながらラルクは慣れた手つきで I Pad を操作していき、そして一つの動画ファイルを再生し出した。そこに映っていたのは…

『BSA 学園!』第二十四話で、零斗、レオンと共に腰を縦に早く振るだけという奇怪極まりないダンス『ジャスタウェイダンス』を踊るクリスの姿であった。

クリス

「!?!?…ギヤアアアアア! やめてくれえええ!!」

政胸

「な…なんなの？これ？」

芳佳・サーニャ

「……………」

クリスは耳を塞ぎながら絶叫し、政胸、芳佳、サーニャはドン引きする。

ラルク

「まあ、観てのとおり、兄貴の『BSA学園！』でのポジションははつきり言っであんまりいい役どころじゃなかったんだよなあ。こうして零斗のジャスタウェイダンスのバックダンサーやったり、右手がジャスタウェイになったり、痴漢になっちまったり…」

クリス

「って痴漢はしてないだろ！！」

政胸

「アハハ…確かにこれは黒歴史よね」

クリス

「ああまっただ。ジャスタウェイダンスなんて二度と踊るか！」

キャラが確立しなかった頃の若気の至りだった自分を思い返して身震いするクリス。

サーニャ

「だから私もクリスさんを何とか元のかっこいいキャラにしてほしいと思ったんです。仮にも本家『バイオハザードシリーズ』の主人公だったんですから」



政胸

「まあ、確かにこれ見たらサーニヤの気持ちもわからないことないけどねえ」

サーニヤ

「それで、零斗さんをお願いして、『クリスさんのキャライメージアップ大作戦』を決行していろいろ模索してくれたんですよ」

クリス

「それが第三十七話から三十九話までの『クリス恋騒動編』って事だ」

芳佳

「あの時は私も零斗さんに協力したんだけど、そうしている内に少しずつクリス君の事が好きになってしまってた…」

政胸

「今の三角関係が出来たって事ね。成るほど」

クリス

「でもあの時はすさまじかったんだよな。サーニヤが俺に惚れたって事を知ってクレアやエイラ、それにウェスカーまで揃いに揃って俺達の邪魔してきたり…」

芳佳

「私もサーニヤちゃんもあれからしばらくエイラさんとともに口を聞けなかったよ」

ラルク

「まあいいんじゃないの？ エイラも今じゃ皇呀っていう立派な彼氏もいる事だし、すべて丸く収まってよかったんじゃないの？」

クリス

「でもクレアは相変わらず彼氏無しだぜ？ この間なんか、同じ恋人無しの朱里先生と革命起こしかけたとか聞いたし…」

——同時刻・クラウザーの居酒屋では…

クレア

「あつくしょん！」

朱里

「あつくしょん！」

クレアと朱里の2人がカウンター席に座りながら盛大にくしゃみをした。

クレア

「うゝ…誰か私の悪い噂してんのかしら？」

朱里

「大方私達の恋人無しをバカにしてるのでしょうか？ …だとしたら、キーツ！ 悔しい！」

クレア

「ええいチクショー！ クラウザー！ 酒が足りないぞ！ ジョッキもう一杯ずつ持って来い！！！」

クラウザー

「2人共飲みすぎだぜ…」

ラルク

「まあ、姉ちゃんの事はいいじゃねえか…その内いい人見つかるだろ」

冷や汗を浮かべながら話題を切り替えるラルク。

ラルク

「それで、こうしてハーレムキャラに昇格した兄貴達にcharleyの奴が物語を与えてやりたいと考えてはじめてのが、この『B S A A学園！外伝 Healing lost Hospital 加富根総合病院物語』ってわけだ」

芳佳

「そうそう。でもまさか『戦国B A S A R A』の伊達政宗女体化キヤラとして政胸さんが出てきたり、クリス君の弟キヤラとしてラルク君が登場するなんて思ってもいなかったなあ」

ラルク

「ああ、元々俺のキャラはcharleyが『ゾンビゲーム』の読者時代から考えていたそうだぜ。ほら、ライアンはバリーの従弟だし、アックスはアホのウェスカーの弟だから『主人公のクリスにも弟がいてもいいんじゃない？』って事で俺のキャラを考えたそうだ」

クリス

「『アホ』って言ってやるなラルク。皆も忘れてるかもしれないがウェスカーは本当は本家バイオの黒幕キヤラなんだ」

政胸・芳佳

「「あっ…忘れてた」

クリス

「おいしい！そんなはつきりと言ってやらなくてもいいだろ！」

どこまでも扱いが悪い宿敵（本家の話）に同情を抱くクリスだった。

政胸

「んでもって、私こと伊達政胸は元々は『BSAA学園！』ではなくてcharleyの代表作の『異世界合戦記録 リリカルBASARA StrikerS』天下分け目の魔法戦記』からの登場だったのよね」

ラルク

「そうそう、確か黒神さん作の『リリカル銀魂 StrikerS』攘夷戦争鎮魂歌』にゲスト出演した際に政宗と幸村が女体化してしまうハプニングがあったけど、その女体化キャラにわざわざ黒神さんがいろいろと設定を付けてくれたから、折角だしという事で当時考案中だった『BSAA学園外伝』に主要キャラとして出そうと考えて政胸のキャラは出来たんだよね？」

サーニャ

「そうだったんですかぁ」

政胸

「し・か・し！！ラルクが登場したのをきっかけに私の出番が少しずつ減っていった、今連載中の『シャーリーVS千歌音 炎のバトル編』では全然出番がないのよ！一体どうなってるのよ！作者！こ

れっていじめ?!」

突然涙を流し出して号泣する政胸を慌ててなだめるクリスと芳佳。

クリス

「お：落ち着けて政胸！作者だっていろいろと考えてやってるんだから、そんな喚くなよ！」

芳佳

「そうですよ！それにたぶん今の政胸さんは立場的に本家『BSA学園！』のアリスさんポジションだと思いますよ」

政胸

「じゃあもつと出番増やしたり、ラルクと仲良くしたっていいじゃない！元相方のグラマラスウサギだけじゃなくて」

シャーリー

「私がどうかしたかい？」

クリス

「…ってわああああ！？しゃ…シャーリー！？」

いつの間にか当たり前のように会話に混じっていたシャーリーを見て仰天するクリス。

芳佳

「いつの間に来ていたんですか？シャーリーさん」

シャーリー

「いやあゝ。ラルクに借りてた『ジャスタウェイブートキャンプ』

のDVD返そうと思ってきたんだけど、なんか面白そうな会話してたからつい入ってきちゃった」

サーニャ

「あのお：『ジャスタウェイブートキャンプ』ってなんですか？」

シャーリー

「あれ？サーニャ知らないの？数年前に流行った某軍隊式エクササイズとジャスタウェイダンスを組み合わせて最近考案された新しいエクササイズなんだぜ？」

ちなみにこれ隊長役はジョッシュだよ」

クリス

「どうでもいいわ！そんな情報。ってかビ○ー隊長と同じ黒人ってだけでなんでジョッシュが『ジャスタウェイダンス』のエクササイズ隊長って設定なんだよ？！」

またカオス臭の強い新設定に引き気味のクリス。

シャーリー

「それで何？何の話してんの？」

ラルク

「ああ、最近政胸の出番がないから、その事で今慰めていたんだ」

シャーリー

「政胸の？アハハハハ！！そりや当然でしょ。だってヒロインって器じゃないじゃん！政胸って」

芳佳

「ちょ：ちよつとシャーリーさん!!?」

慌ててシャーリーを止めようとする芳佳だったが既に手遅れだった。  
すかさず目つきを鋭くして顔を見上げる政胸。

政胸

「それどういう意味かしら? シャーリー?」

シャーリー

「んまあなんていうか、そもそもいくら女体化したって言っても元のキャラが『戦国BASARA』の伊達政宗だし、グラフィックがない分どうしてもそのむさいイメージがついちゃってるんだよなあ、政胸って。」

それに伊達政宗女体化といえば最近だと戦国乙女の伊達マサムネなんてキャラも登場しちゃったからキャラが被ってるし：其れに」

サーニヤ

「それに?」

シャーリーはまじまじと政胸の小さな胸元を眺めながら、最も言うてはならないことを言ってしまう。

シャーリー

「胸が無いっていうのは痛いねえ。やっぱりヒロインは私みたいにグラマラスじゃないと♪」

《ブチィッ!》

この言葉が政胸の怒りのボルテージを極限にまで引き上げた。

政胸

「シャアアアーーーーーリイイイーーーーー  
ーーーーSit Downーーーーーn!!!!!!」

ブチ切れた政胸がベッド脇に置いていた刀を引き抜き…

政胸

「Jet X! Jet X! Jet X! Jet X  
! Jet X! Jet X! Jet X! Jet X  
! Jet X! Jet X! Jet エエーーーーックス!」

怒り狂いながら電撃弾をシャーリーに向けてぶっ放した。

シャーリー

「おっと!?!やるかい?」

そう言ってM4カービンを構えて応戦するシャーリー。

クリス

「何やってんだ2人共やめろ!おいラルクお前からも何とか言っ  
て…」

慌ててそれを止めながらラルクの方に目をやるクリス。  
するとラルク達は…

ラルク

「うお!?!いいねえ、実写ウェスカーのバク宙弾丸避け!」

芳佳

「でも…やっぱいいなあ…実写クリス君の戦う姿も」



サーニャ

「でしょ？ 芳佳ちゃん。ちなみにこのシーン私一番好きなんだ」

後ろで繰り広げられる修羅場を尻目にバイオ？の続きを観ていた。

クリス

「うおおおおおい！！暢気にバイオ？観てる場合かー！！？」

政胸

「くそおおお！メインヒロインなのに！メインヒロインなのにいいいい！！」

シャーリー

「じゃあ、胸を大きくする方法でも教えてあげよつか？そうすりゃグラマラスになって出番を増えて…」

政胸

「アンタに言われると一番ムカつくわよおおおおお！！」

病室内が騒がしく混沌としていく中、彼女達の下は、そんな事情は一切知らない。

結局一人空しくクリスが奮闘する中、政胸とシャーリーの喧嘩は看護師が止めるまで繰り広げられるのだった…

ここでもやっちゃう？ リビングタイム1（後書き）

ラルク

「そういえばこの作品のイメージOPとEDがまだだったな」

クリス

「いまさら決めるのか!？」

政胸

「この作品のイメージOPは「すーぱー☆あふえくしょん」。  
イメージEDは「T・W・L」よ」

芳佳

「どっちもギャグアニメの主題歌だね」

ラルク

「次回から『シャリーVS千歌音 炎のバトル編』の後半戦に入る  
るのでお楽しみに!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9049p/>

---

BSAA学園！外伝 Healing lost Hospital 加富根総合病院物語

2011年11月12日21時44分発行